

中山遺跡
卷 林 遺 跡

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

中山遺跡 卷林遺跡

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



中山火葬墓

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成5年度に実施した西地区(2-2工区)の遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成6年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 神 長 耕 二

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、安来市荒島町から八束郡東出雲町に至る、国道9号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する遺跡の発掘調査を実施しております。

この地域は、出雲地方の古代文化の中心地であった意宇平野と安米平野に挟まれた地で、須田川・意東川・羽入川・飯梨川などが形成する美田地帯と京羅木山・星上山から派生する丘陵地帯、そして前面には中海と非常に自然環境に恵まれているところです。

安米道路予定地内の調査については、平成元年度から調査を開始し、この西地区では平成4年度に八束郡東出雲町内の調査から着手いたしました。

今年度は、安来市荒島町と八束郡東出雲町において調査を実施し、家形の石製竹蔵器を納めた火葬墓や玉作り工房跡などを発見することができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、この地域の歴史を考える上で貴重な資料になるとともに、多少なりとも埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助になれば幸いです。

なお、調査にあたりましては、建設省松江国道工事事務所をはじめとして、ご協力いただきました関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

平成6年3月

島根県教育委員会教育長

今 岡 義 治

例 言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成5年度に実施した一般国道9号安米道路建設予定地内（西地区）埋蔵文化財発掘調査のうち、中山遺跡・巻林遺跡・亀尻Ⅰ遺跡・亀尻Ⅱ遺跡・桐の木Ⅰ遺跡・桐の木Ⅱ遺跡の調査報告書である。受馬遺跡・林廻り遺跡・四ツ廻Ⅱ遺跡・駒貫遺跡については本書では概要を報告する。
2. 平成4年度から着手した「安米道路2-2上区」（安米市荒島町～八東郡東出雲町出雲郷）を便宜上「安米道路西地区」と呼称している。
3. 調査組織は次のとおりである。

〔事務局〕 広沢 卓嗣（文化課長） 勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長）

山根成二（文化課課長補佐） 久家 備夫（同課長補佐） 工藤 直樹（同企画調整係主事） 田部 利夫（島根県教育文化財団囑託） 有田 實（同囑託）

〔調査員〕 宮澤 明久（文化課主幹・調査第一係長） 北尾 浩之（同教諭兼主事） 山尾 一郎（同教諭兼主事） 原田 敏照（同主事） 勝瀬 利栄（同主事） 田中 強志（同臨時職員） 林 嘉彦（同臨時職員）

〔調査指導者〕 池田 満雄（島根県文化財保護審議会委員） 渡邊 貞幸（島根大学法文学部教授） 徳岡 隆夫（島根大学理学部教授） 大西 郁夫（島根大学理学部教授） 井上 貴典（鳥取大学医学部教授） 木越 邦彦（学習院大学名誉教授） 勝部 衛（出雲玉作資料館館長補佐）

〔遺物整理〕 安達 裕子 荒川あかね 板垣 見知子 上山根 美和子 菅井 国江 杉原 あいこ 高木 由佳 多久和 登紀子 仲佐 美鈴

4. 発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注・重機借り上げ・プレハブハウス借り上げ・発掘用具調達など）については、建設省中国地方建設局・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

（社）中国建設弘済会島根支部（支部長 岩浅 武夫）

〔現場担当〕 布村 幹夫（技術員） 木村 昌義（技術員） 〔設計補助〕 原 博明

〔事務担当〕 与合 明子 高木 山住

〔発掘作業員〕

西谷 節子	森本 鶴吉	荒川 清子	植松 カツエ	玉川 敏子	石倉 徳郎
中村 昇	福島 初枝	石木 早苗	石倉 キクエ	安部 美恵子	三島 政子
掛田 ヨシエ	引野 美都恵	引野 キミヨ	角 富子	太田 佐恵子	清山 富子

小原 本衛	福寄 ヒロエ	森脇 リエ子	小松 憲吾	佐藤 弘	森広 保
藤本 百合子	角 冴子	周藤 トシ子	一瀬 波子	角 美智恵	入江 良明
上山根 幸	藤本 和子	松村 俊子	一瀬 寛	須山 武道	昌子 昇
角 ヨシ子	森広 治恵	富士本 裕子	生馬 文子	三澤 キミ子	上田 安子
懸田 スエ子	足立 熊太郎	石橋 徳夫	荒川 あかね	山崎 キミエ	田中 武子
岩田 広	近藤 静代	加藤 ヨシ子	杉原 あい子	上山根 美和子	仲佐 美鈴
森広 治子	須山 卓郎	吾郷 貞男	石倉 ハルミ	秦 民枝	引野 温
村田 弘	石原 哲朗	一瀬 友子	小原 美枝子	角 輝子	角 香織
永井 初枝	永井 幸一				

5. 調査にあたっては、以下の方々から有益なご助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

浅沼 政誌（東出雲町教育委員会主任主事） 片岡 詩子（出雲玉作資料館学芸員）
 三宅 博士（安来市教育委員会文化係長） 山田 芳治（伊豆長岡町教育委員会係長）
 津金沢 古茂（群馬県文化財保護課） 中村 唯史（島根大学理学部地質学研究室）
 前園 実知雄（橿原考古学研究所資料室室長） 林部 均（橿原考古学研究所付属博物館主任学芸員）
 川上 洋一（橿原考古学研究所付属博物館学芸員）

6. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S1-竪穴住居跡 SB-掘立柱建物跡 SD-溝状遺構 SK-土坑 SX-性格不明遺構
 P-ピット

7. 挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。
 8. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院のものを使用し、「調査区位置図」「トレンチ配置図」は建設省松江国道工事事務所のものを浄書して使用した。
 9. 本書の作成は、調査及び遺物整理に携わったものが分担して作図、執筆し、集団討議を行って編集した。執筆分担は本文目次に示すとおりである。
 10. 出土遺物及び穴測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

本文目次

I	位置と環境	(山尾)	1
II	調査に至る経緯と経過	(宮澤)	7
III	中山遺跡	(原田)	10
IV	巻林遺跡	(勝瀬)	53
V	その他の遺跡	(宮澤・原田・勝瀬)	65
	1 亀尻 I 遺跡		65
	2 亀尻 II 遺跡		67
	3 桐の木 I 遺跡		68
	4 桐の木 II 遺跡		71
	5 受馬遺跡		73
	6 林廻り遺跡		79
	7 四ッ廻 II 遺跡		85
	8 鶴貴遺跡		91

挿 図 目 次

第1図	安来市・東出雲町の位置	1
第2図	周辺の遺跡	5
第3図	四ツ廻Ⅱ遺跡現地説明会風景	9
第4図	林廻り遺跡現地説明会風景	9
第5図	中山遺跡蓋石除去風景	9
第6図	3区出土須恵器実測図	10
第7図	中山遺跡調査区配置図	11
第8図	火葬墓周辺地形測量図(調査前)	13
第9図	火葬墓周辺地形測量図(調査後)	15
第10図	火葬墓周辺土層図	17
第11図	火葬墓実測図Ⅰ(土層)	21
第12図	火葬墓実測図Ⅱ(墓墳・排水溝縦断)	23
第13図	火葬墓実測図Ⅲ(埋土・礎除去後)	25
第14図	骨蔵器内火葬人骨・遺物出土状況実測図	27
第15図	骨蔵器内出土遺物実測図	29
第16図	火葬墓周辺出土須恵器実測図	29
第17図	石製骨蔵器実測図Ⅰ(蓋)	31
第18図	石製骨蔵器実測図Ⅱ(身)	33
第19図	石製骨蔵器拓影Ⅰ(身側面)	35
第20図	石製骨蔵器拓影Ⅱ(身上面)	36
第21図	石製骨蔵器拓影Ⅲ(蓋)	37
第22図	火葬人骨取り上げ状況(1)	42
第23図	火葬人骨取り上げ状況(2)	43
第24図	出雲市朝山古墓出土石製骨蔵器実測図	45
第25図	巻林遺跡調査区位置図	53
第26図	土層断面図Ⅰ(H4年度トレンチ調査時)	54
第27図	巻林遺跡遺構配置図	55
第28図	土層断面図Ⅱ(H5年度A-A'ライン)	57
第29図	土坑実測図Ⅰ	61
第30図	土坑実測図Ⅱ	62
第31図	巻林遺跡出土土器実測図	64
第32図	亀尻Ⅰ遺跡全景	65
第33図	第10トレンチ北東壁土層断面図	65
第34図	亀尻Ⅰ遺跡の位置	65
第35図	亀尻Ⅰ遺跡焼土坑	66
第36図	焼土坑実測図	66
第37図	亀尻Ⅰ・Ⅱ遺跡調査区配置図	66
第38図	亀尻Ⅱ遺跡全景	67
第39図	第1-bトレンチ東壁土層断面図	67
第40図	亀尻Ⅱ遺跡の位置	67
第41図	桐の木Ⅰ遺跡出土遺物実測図	68
第42図	桐の木Ⅰ遺跡の位置	68
第43図	桐の木Ⅰ遺跡全景	68

第44図	桐の木Ⅰ遺跡発掘状況	68
第45図	桐の木Ⅰ遺跡調査区配置・土層断面図	69
第46図	桐の木Ⅱ遺跡第8トレンチ完掘状況	71
第47図	桐の木Ⅱ遺跡第4トレンチ北壁土層断面図	71
第48図	桐の木Ⅱ遺跡の位置	71
第49図	桐の木Ⅱ遺跡調査区配置図	72
第50図	桐の木Ⅱ遺跡全景	72
第51図	受馬遺跡遠景	73
第52図	受馬遺跡の位置	73
第53図	受馬遺跡近景	74
第54図	SK01・02・03(焼土坑)	74
第55図	円形ピット群	74
第56図	受馬遺跡遺構配置図	75
第57図	出上土器	77
第58図	スクレーパー	77
第59図	受馬遺跡出土土器実測図	78
第60図	小学生体験教室	78
第61図	林廻り遺跡近景	79
第62図	林廻り遺跡の位置	79
第63図	SB01	80
第64図	SB02	80
第65図	SB03	80
第66図	林廻り遺跡遺構配置図	81
第67図	出土土器	83
第68図	SB01出土勾玉	83
第69図	林廻り遺跡出土土器実測図	84
第70図	四ツ廻りⅡ遺跡全景	85
第71図	四ツ廻りⅡ遺跡の位置	85
第72図	SI01	86
第73図	SK09(落し穴状土坑)	86
第74図	樹立柱礎物跡	86
第75図	四ツ廻りⅡ遺跡遺構配置図	87
第76図	SK05土器検出状況	89
第77図	出土土器	89
第78図	工作関係遺物	89
第79図	四ツ廻りⅡ遺跡出土土器実測図	90
第80図	鶴貫遺跡全景	91
第81図	鶴貫遺跡SK01	91
第82図	鶴貫遺跡の位置	91
第83図	鶴貫遺跡調査区配置図	92
第84図	鶴貫遺跡土層断面図(A-A')	93
第85図	鶴貫遺跡木製品出土状況	94
第86図	鶴貫遺跡土層断面図(B-B')	94
第87図	鶴貫遺跡出土遺物実測図(1)	95
第88図	鶴貫遺跡出土遺物実測図(2)	96

表 目 次

第 1表 周辺の遺跡一覧表	4
第 2表 調査工程表	7
第 3表 調査を実施した遺跡一覧表	8
第 4表 埋納状況について	20
第 5表 石製骨磁器(石櫃) 出土地名表	48
第 6表 山陰の古代火葬墓	52
第 7表 巻林遺跡土坑計測値一覧表	60

図 版 目 次

<p>図版 1・中山遺跡遺景 ・中山遺跡近景 (I区)</p> <p>図版 2・中山火葬墓検出状況 ・中山火葬墓検出状況</p> <p>図版 3・中山火葬墓礎検出状況 ・中山火葬墓礎検出状況</p> <p>図版 4・中山火葬墓埋土除去後 ・中山火葬墓埋土除去後</p> <p>図版 5・中山火葬墓排水溝内礎検出状況(墓塚側) ・中山火葬墓排水溝内礎検出状況(木端部)</p> <p>図版 6・中山火葬墓炭化材出土状況 ・中山火葬墓蓋石除去後</p> <p>図版 7・中山火葬墓骨磁器内土層断面 ・中山火葬墓火葬人骨出土状況</p> <p>図版 8・中山火葬墓蓋下層埋土断面 ・中山火葬墓埋土・礎除去後</p> <p>図版 9・中山火葬墓周辺全景 ・中山火葬墓全景</p> <p>図版10・中山火葬墓全景 ・中山火葬墓完掘状況</p> <p>図版11・中山火葬墓埋土除去後 ・中山火葬墓蓋石・埋土・礎除去後</p>	<p>図版12・中山遺跡 3区出土須恵器 ・中山火葬墓周辺出土須恵器 ・骨磁器内出土遺物 (上: 鉄釘、下: 水晶球)</p> <p>図版13・石製家形骨磁器(蓋) -北面- ・石製家形骨磁器(身) -南面-</p> <p>図版14・石製家形骨磁器(蓋) -西面- ・石製家形骨磁器(蓋) -東面加工痕-</p> <p>図版15・石製家形骨磁器(身) -西面- ・石製家形骨磁器(身) -東面加工痕-</p> <p>図版16・巻林遺跡調査前近景(西から) ・巻林遺跡調査後近景(西から)</p> <p>図版17・巻林遺跡SK01 ・巻林遺跡SK02</p> <p>図版18・巻林遺跡SK03 ・巻林遺跡SK04</p> <p>図版19・巻林遺跡SK04土層堆積状況 ・巻林遺跡SK05</p> <p>図版20・巻林遺跡SK06 ・巻林遺跡SK07</p> <p>図版21・巻林遺跡SK08 ・巻林遺跡SK09、10、11、12</p> <p>図版22・巻林遺跡出土土器</p>
---	--

I 位置と環境

一般国道9号安来道路建設予定地の内、安来道路西地区(8.0km区間)は安来市荒島町から八束郡東出雲町にわたり、島根県の東端部に位置する。東は鳥取県米子市、西は松江市に接し、南には京羅木山(473.0m)をはじめとする山々が連なり、それを越えると能義郡広瀬町となり北には中海が広がっている。現在の集落は概ね平地に散在し、その平地は中海に面した北側と京羅木山をはじめとする山々から北方向に派生する尾根が形成するいくつかの谷部に存在する。現在の湖岸線は、掘屋干拓地を除き、約6000～5000年前のいわゆる「縄文海進」の後、縄文晩期(約3000～2400年前)に湖岸線が海側に退いて形成されたものと考えられている。

また東出雲町の西端部には中海に注ぐ意字川が流れ、その川の両岸に広がる意字平野には出雲国庁・山雲国分寺などが置かれ、古代出雲の政治の中心地として栄えている。安来市の飯梨川の西側に広がる荒島丘陵には、大型の前期古墳が存在し当時の権勢のようすを知ることができる。

そして今回の調査地は古代山陰道に推定されている地域周辺で、古代より交通の重要な役割を果たし、人々の生活の舞台として発展した地域でもある。

ここで本年度調査遺跡の報告にあたり、周辺の遺跡については時代ごとにまとめてみる。

周辺の遺跡

<縄文時代>

この地域における縄文時代の遺跡は少なく、あまり知られていない。東出雲町において縄文時代の遺跡は出雲郷の縄文時代前期から晩期の土器が出土した竹の花上遺跡、縄文時代晩期の土器が出土している春日遺跡がある。また大木権現山2号墳の地山面のピットからも、縄文時代晩期の土器が出土している。これらはいずれも意字川周辺で中海に面した地域に集中している。

安来市荒島町周辺では、縄文時代の遺跡は見つかっていない



第1図 安来市・東出雲町の位置

ない。

〈弥生時代〉

東出雲町の弥生時代の主な遺跡としては、寺床遺跡、磯近遺跡、春日遺跡、古城山遺跡、阿太加夜神社境内遺跡などがある。寺床遺跡では、弥生時代前期・中期の竪穴住居跡が確認されている。また磯近遺跡からは、弥生時代中期の完形壺形土器、打製石斧、土錘などが出土している。さらに出土した弥生土器には籾殻痕が認められ、この周辺で稲作が行われていたことを示すものとなった。

安来市荒島町周辺には弥生時代後期に、仲仙寺墳墓群や安養寺墳墓群など四隅突出型墳丘墓と呼ばれる地域色の濃い弥生墳丘墓が造られた。

〈古墳時代〉

東出雲町では平野に面した丘陵上を中心に古墳が造られるようになる。前期古墳では、鏡などの豊富な副葬品をもち礎床構造で二段掘りの墓塚の中には割竹形木棺がおかれていた寺床1号墳、船載の内行花文鏡が出土した古城山2号墳などがある。中期のものには箱式石棺が検出された大木権現山2号墳、地山岩盤を舟形に穿って造られた主体部をもつ春日岩舟古墳が知られている。後期になると石棺式石室を持つ栗坪古墳群、金成山古墳、箱式石棺が出土している焼田古墳群などが造られた。また内部の天井が四注式家形を呈する内馬池横穴群や古城山横穴群、高井横穴群、四ツ廻横穴群などの横穴墓も丘陵斜面に盛んに築かれるようになった。

この時代の遺跡には古墳・横穴墓の他にも、住居跡として栗坪遺跡、焼田遺跡などが知られている。さらに生産遺跡は須恵器の窯跡である古屋窯跡が確認されている。

安来市荒島町には造山古墳や大成古墳など、前期から中期にかけて竪穴式石室を主体とする大型古墳が連続的に築かれている。中期のものとしては長さ約50mの前方後方墳である宮山1号墳と、近年調査された42m前後の方墳である清水山1号墳がある。後期には出雲地方の後期古墳を特徴づける石棺式石室を持つ飯梨岩舟古墳、塩津神社古墳、若塚古墳などが造られ、横穴墓としては凝灰岩に穿った整美な日白横穴群が知られている。

〈奈良時代～平安時代〉

意宇平野の意宇川沿いには、現在でも古代に条里制が敷かれていたことを推定することができる。また松江市側の意宇平野には国庁、出雲国分寺、国分尼寺などの跡が確認されている。これに隣接する東出雲町出雲郷地区は、出雲国の政治的中心地と深いつながりがあったことと思われる。

安来市の荒島丘陵周辺では、あまりこの時代のことは明らかになっていないが小久白遺跡では、奈良時代末期のものとみられる火葬墓が見つまっている。県内では発見例が少ないため貴重な資料となっている。

〈鎌倉時代～室町時代〉

東出雲町の城跡は、春日城跡、古城山城跡、京羅木山城跡、福良城跡などが知られている。春日城は下河原氏の居城であったが、尼子氏との激しい攻防を繰り返した末、落城したと記録されている。現在でも本丸・出丸・空堀が残っている。古城山城は砦として利用されていたと考えられ、当時の井戸や郭が残されている。京羅木山城跡からは、広瀬町の月山富田城を一望することができ、毛利氏が尼子氏を攻める際に重要な城であったと考えられる。福良城跡は尼子氏の家臣である作間左衛門入道の居城であったが、この城も尼子氏と毛利氏との重要な攻防戦の地となっている。

安来市荒島町周辺には城は確認されていないが、飯梨川は広瀬町富田城へ向かう水上ルートと考えられ当時は交通の要衝として重要な位置を占めていたと考えられる。

参考文献 島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書
西地区I』1993・3

島根県教育委員会『一般国道9号（安来道路）建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告
書IV』1993・3

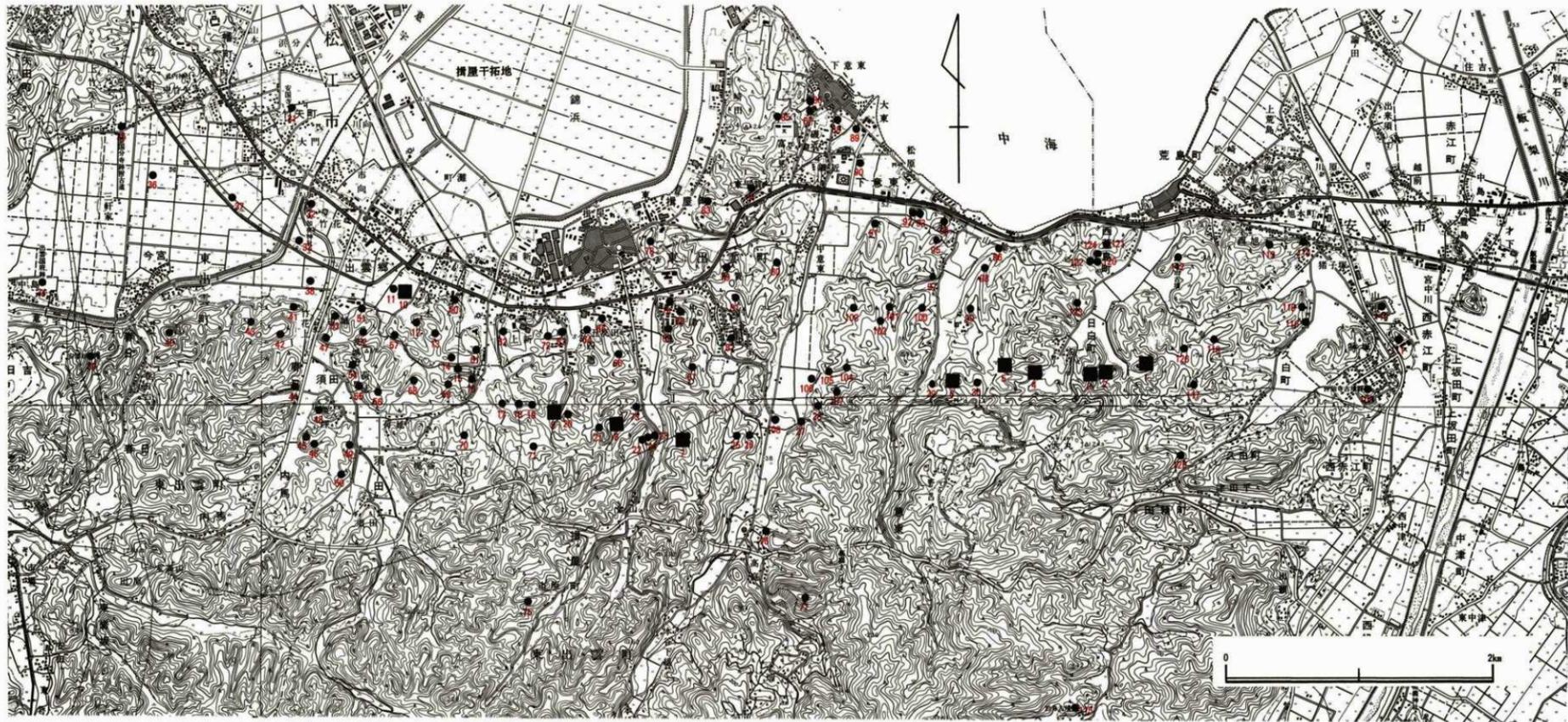
東出雲町教育委員会『東出雲町の遺跡』1988・3

安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告書』1991・3

安来市教育委員会『古代出雲王陵の丘シンポジウム資料集』1993・10

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	中山遺跡	火葬墓	64	東山雲中学校東側遺跡	散布地
2	亀尻Ⅰ遺跡	散布地	65	東出雲中学校校庭遺跡	散布地
3	亀尻Ⅱ遺跡	散布地	66	五反田遺跡	散布地
4	桐の木Ⅰ遺跡	散布地	67	五反田Ⅰ号墳	古墳
5	桐の木Ⅱ遺跡	散布地	68	中津橋穴群	横穴群
6	巻林遺跡	散布地	69	高井橋穴群	古墳群
7	受馬遺跡	祭祀遺跡	70	安垣古墳群	古墳群
8	林廻り遺跡	住居跡	71	浪山池南古墳群	古墳群
9	四ッ廻Ⅰ遺跡	下作工房跡	72	回ッ廻橋穴群	横穴群
10	駒貫遺跡	散布地	73	東西畑遺跡	散布地
11	悪比須遺跡	散布地	74	高経塚	塚塚
12	岸地遺跡	散布地	75	袴子谷古墳	古墳
13	島田池古墳群	古墳、横穴墓	76	古塚高跡	塚跡
14	島田遺跡	土壇高台	77	福良城跡	城跡
15	長瀬遺跡	散布地	78	畑原神社古墳	古墳
16	長瀬古墳群	散布地	79	平賀遺跡	祭祀遺跡
17	浪山池古墳群	古墳、横穴墓	80	平賀Ⅱ古墳	古墳
18	浪山池遺跡	葉落跡	81	廣瀬谷古墳	古墳
19	原ノ前遺跡	葉落跡	82	附谷遺跡	散布地
20	四ッ廻Ⅱ遺跡	散布地	83	編田遺跡	散布地
21	人鳥遺跡	散布地	84	神子谷遺跡	散布地
22	勝負遺跡	住居跡	85	深田上の古墳	古墳
23	堂床遺跡	散布地	86	鳩峠山焼窯跡	窯跡
24	堂床古墳	古墳	87	永島窯跡	窯跡
25	毛無遺跡	散布地	88	水島(長瀬し)窯跡	窯跡
26	毛無古墳	散布地	89	石橋窯跡	窯跡
27	十元遺跡	散布地	90	磯近遺跡	散布地
28	御崎谷遺跡	散布地	91	まろつか古墳	古墳
29	清水遺跡	散布地	92	金成山高跡	塚跡
30	巻林橋穴	横穴墓	93	金成山古墳	古墳
31	安国寺古墓	古墓	94	岩屋古墳群	古墳群
32	阿太加夜神社境内遺跡	集落跡	95	荒神ノ上古墳	古墳
33	意字平野条里制遺構	条里制	96	中尾崎A遺跡	住居跡
34	山露園子跡	園子跡	97	横廻古墳群	古墳群
35	出雲園分寺跡	園分寺跡	98	備前山古墳群	古墳群
36	布田遺跡	葉落跡	99	中尾崎経塚	経塚
37	天敷遺跡	水田跡	100	丸谷池遺跡	散布地
38	春日遺跡	散布地	101	渡田遺跡	住居跡
39	春日岩舟古墳	散布地	102	横田古墳群	古墳群
40	春日城跡	城跡	103	油免古墳群	古墳群
41	鳥籠古墳	古墳	104	雉子谷古墳群	古墳群
42	以下谷池北岸遺跡	散布地	105	雉子谷横穴群	横穴群
43	姫津古墳群	古墳群	106	渡田遺跡	住居跡
44	以下古墳	古墳	107	兄ヶ平遺跡	古墳
45	城山城跡	城跡	108	青木遺跡	散布地
46	内馬池横穴群	横穴群	109	仲仙寺墳墓群	墳墓群
47	竹の花上遺跡	散布地	110	安養寺墳墓群	墳墓群
48	栗坪古墳群	古墳群	111	宮山墳墓群	墳墓群
49	栗坪遺跡	住居跡	112	造山古墳群	古墳群
50	戸田屋敷横穴群	横穴群	113	大城古墳	古墳
51	古城山横穴群	横穴群	114	仏山古墳	古墳
52	古城山古墳群	古墳群	115	飯架岩舟古墳	古墳
53	古城山城跡	城跡	116	塩津神社古墳	古墳
54	赤廻遺跡	散布地	117	吾塚古墳	古墳
55	須田神社境内遺跡	住居跡	118	小久白遺跡	住居跡、火葬墓
56	高延古墳群	古墳群	119	塩津山古墳群	古墳
57	後谷池古墳	古墳	120	白橋穴群	横穴群
58	後谷窯跡	窯跡	121	清水山Ⅰ号墳	古墳
59	人畑遺跡	散布地	122	福田古墳群	古墳群
60	大木庵現山古墳群	古墳群	123	客山古墳群	古墳群
61	寺床遺跡	住居跡、古墳	124	坪内横穴群	横穴群
62	堤谷古墳群	古墳群	125	山の神古墳群	古墳群
63	屋台垣橋穴群	横穴	126	神庭谷遺跡	葉落跡、横穴



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

Ⅱ 調査に至る経緯と経過

昭和47年、建設省松江国道工事事務所から県教育委員会あてに国道9号線バイパス建設の基本設計資料作成のため、安来市古佐町から松江市乃白町に至る30.3km区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて県教育委員会では昭和47年と48年にこの区間の分布調査を実施した。

その後、昭和61年度になると安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9km区間が「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には、既に部分供用を行っている「米子道路」と「松江道路」を接続する延長18.7kmの高規格幹線道路(自動車専用道路)の「安来道路」に計画変更された。この変更に伴い昭和62年度と63年度に再度分布調査を実施し、中央部(1-2・2-1工区)では平成元年度から発掘調査を開始した。「西地区」(2-2工区)では平成4年度から八東郡東出雲町内において発掘調査を開始し、今年度は東出雲町内で5遺跡、安来市内で5遺跡の10遺跡について発掘調査を実施した。

1班は、昨年度トレンチ調査を実施した東出雲町内の四ツ廻Ⅱ遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡・巻林遺跡の調査を担当し、もう1班は安来市日白町・荒島町内の桐の木Ⅰ遺跡・桐の木Ⅱ遺跡・亀尻Ⅰ遺跡・亀尻Ⅱ遺跡・中山遺跡の調査を担当した。

4月5日に四ツ廻Ⅱ遺跡の表土掘削に着手し、調査が始まった。発掘作業員による本格的な作業も同月14日に桐の木Ⅱ遺跡、同19日に四ツ廻Ⅱ遺跡で始まった。

第2表 調査工程表

番号	遺 跡 名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
1	四ツ廻Ⅱ遺跡	■									
2	林廻り遺跡				■						
3	受馬遺跡							■			
4	巻林遺跡								■		
5	桐の木Ⅱ遺跡	■									
6	桐の木Ⅰ遺跡		■								
7	亀尻Ⅱ遺跡							■			
8	亀尻Ⅰ遺跡							■			
9	中山遺跡			■							
10	鷺貫遺跡							■			

東出室町内を担当した班は予定どおり調査が進んだが、安来市内を担当した班は予定より調査が早く進んだため調査規模・期間などを検討し、次年度以降調査予定の遺跡の中から東出室町鶴貫遺跡の調査を繰り上げて実施することとなった。

6月から7月の長雨で作業の遅れが心配されたが第2表のように順次調査を進め、12月15日に現地作業を終了した。

第3表 調査を実施した遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺構の概要	遺物の概要
1	中山遺跡	火葬墓（石製骨甕器）	須恵器（奈良時代）、土師器、鉄釘、水晶球
2	亀尻Ⅰ遺跡	焼上坑	須恵器、陶磁器
3	亀尻Ⅱ遺跡		
4	桐の木Ⅰ遺跡	土坑	陶磁器
5	桐の木Ⅱ遺跡		黒曜石
6	巻林遺跡	土坑	須恵器（古墳～奈良）、土師器
7	受馬遺跡	ピット、土坑、溝状遺構	須恵器、土師器（古墳時代）、古銭、鉄製品、土師質土器（近世）、石器
8	林廻り遺跡	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構	須恵器（奈良～平安）、土師器、勾玉、鉄製品ほか
9	四ッ廻Ⅱ遺跡	竅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構ほか	須恵器（古墳～奈良）、土師器、玉類未製品・剥片、磁石、石器
10	鶴貫遺跡	土坑、溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、鉄製品

（上表の遺跡番号は、第2図の周辺の遺跡地区番号に対応する。）

第3図
四ツ廻Ⅱ遺跡
現地説明会
(’93. 7. 10)



第4図
林廻り遺跡
現地説明会
(’93. 10. 16)



第5図
中山遺跡
蓋石除去
(’93. 6. 21)



Ⅲ 中山遺跡

1 遺跡の位置と調査の概要

安来市荒島町字中山に所在する。中海に向かって延びる丘陵の西側、舌上に南西に派生した低丘陵上、標高50m前後に立地する。日白川が中央を北流する谷平野の二俣に分かれた東側の小谷に面している。また周辺には、同一丘陵上で南東500m付近に若塚古墳、小久白遺跡、東1300mには塩津墳墓群が存在し、北方700mには、造山古墳群等を含む荒島墳墓群が望める。

調査は、丘陵尾根上を西側より1区、2区、3区と調査区域を分けて行ったが(第7図)、遺構は、1区において火葬墓を1基検出したのみであった。

(1) 1区の調査

1区は、丘陵先端部にあたり、尾根にそって平坦面が存在し、東端が最も広がっている。調査は、尾根上では、他と比較して若干高まっている2つの地点を中心にそれぞれ軸を設定し、それに沿ってトレンチにより遺構の確認を行った。調査の結果、火葬墓を1基検出し、その他には、遺構遺物は見られなかった。なお、火葬墓については、中山火葬墓として節を改めて、後述したい。

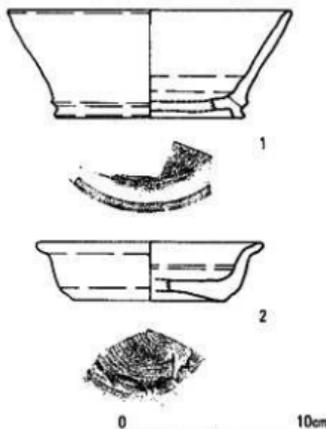
(2) 2区の調査

2区は、遺跡で最も高い地点で、尾根に沿って東西方向に細長い平坦面が存在する。調査区は、その尾根にあわせて東西に細長く設定し、また斜面にも尾根と直交した調査区を設定した。尾根上においては、表土下10m前後で地山を検出し、遺構、遺物とも確認されなかった。斜面においては、南側と西側で、4段～5段の幅30m～50mの加工された平坦面が廻っているのを確認したが、これは、近年の耕作に伴うものであった。尾根上と同様に遺構と遺物は、確認されなかった。

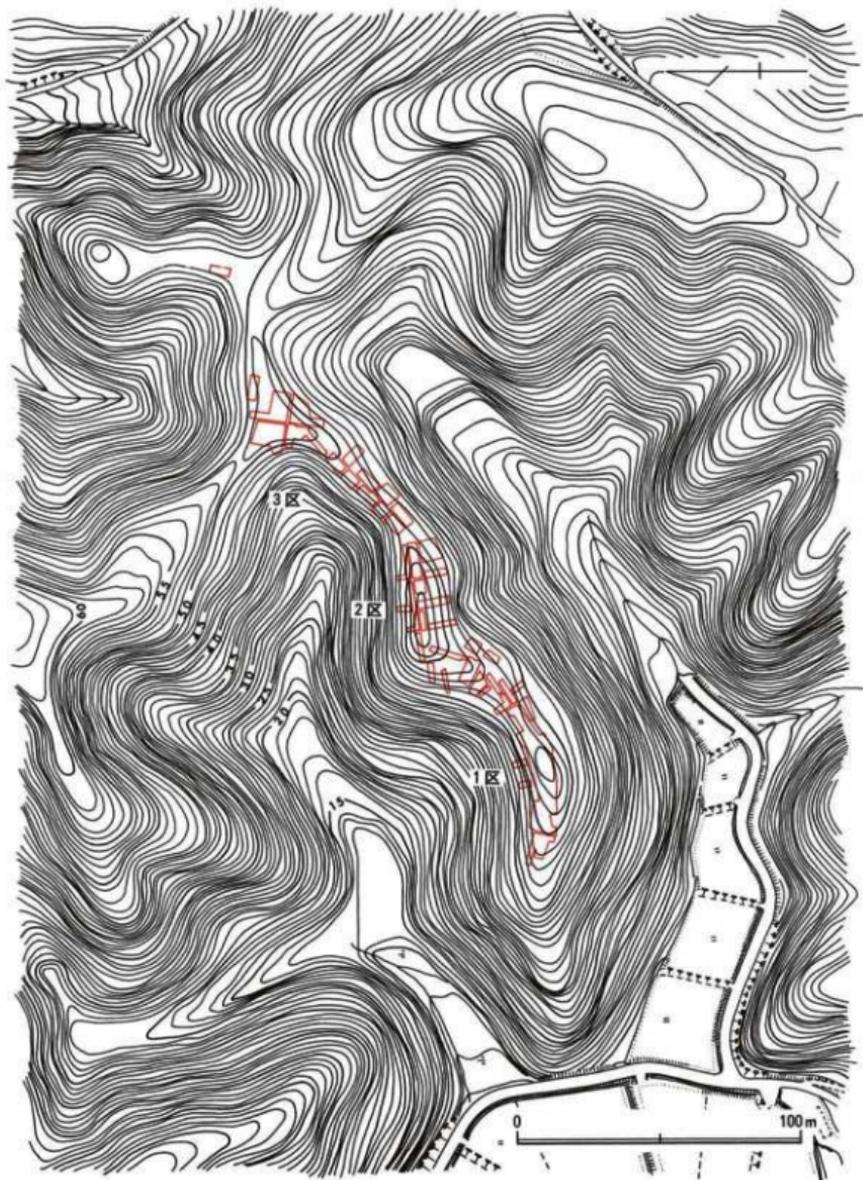
(3) 3区の調査

3区は、遺跡の存在する丘陵の基部周辺で、狭長の尾根と丘陵基部の比較的広い尾根上の平坦面、北東に突出する短い丘陵尾根上がこれにあたる。

狭長の尾根上では、尾根に沿って東西に細長く設定し、斜面にも尾根と直交した調査区を設定した。遺物は、須恵



第6図 3区出土須恵器実測図(1/3)



第7图 中山道跡調査区配置图 (1/2000)

器の坏（第6図1）が表土下の後世の攪乱土より出土している。坏は淡青灰色を呈し、口径14.6cm、底径10.0cm、器高5.7cmを測り、高台が底部の外縁付近に貼り付けられ、底部には糸切り痕を残す。そして、体部と底部の境に稜をもち、体部はやや外方に直線的に立上り、口縁を丸くおさめている。時期は、概ね8世紀末～9世紀前半と推定される。

丘陵基部の平坦面は、本遺跡の中で最も眺望の利く地点で、北に造山古墳群、中海を望むことができる。調査は、中心軸を任意に設定し、4分法により行った。調査の結果、後世の改変が著しく、遺構は確認されなかった。遺物は、攪乱された層より、須恵器、土師器が出土している。図化した須恵器の皿（第6図2）は、口径12.0cm、底径8.0cm、器高3.1cmを測り、底部には回転糸切り痕を残す。体部は、やや丸みを帯びて立ち上り、口縁は外方にくの字に屈曲する。時期は、類例が少数であり明確にしたいが、概ね9世紀代のものと推定される。他の出土遺物は、小片であるため詳細は不明である。

北東に突出する短い尾根上には、トレンチを1本設定したが、遺構、遺物は確認されなかった。

2 中山火葬墓

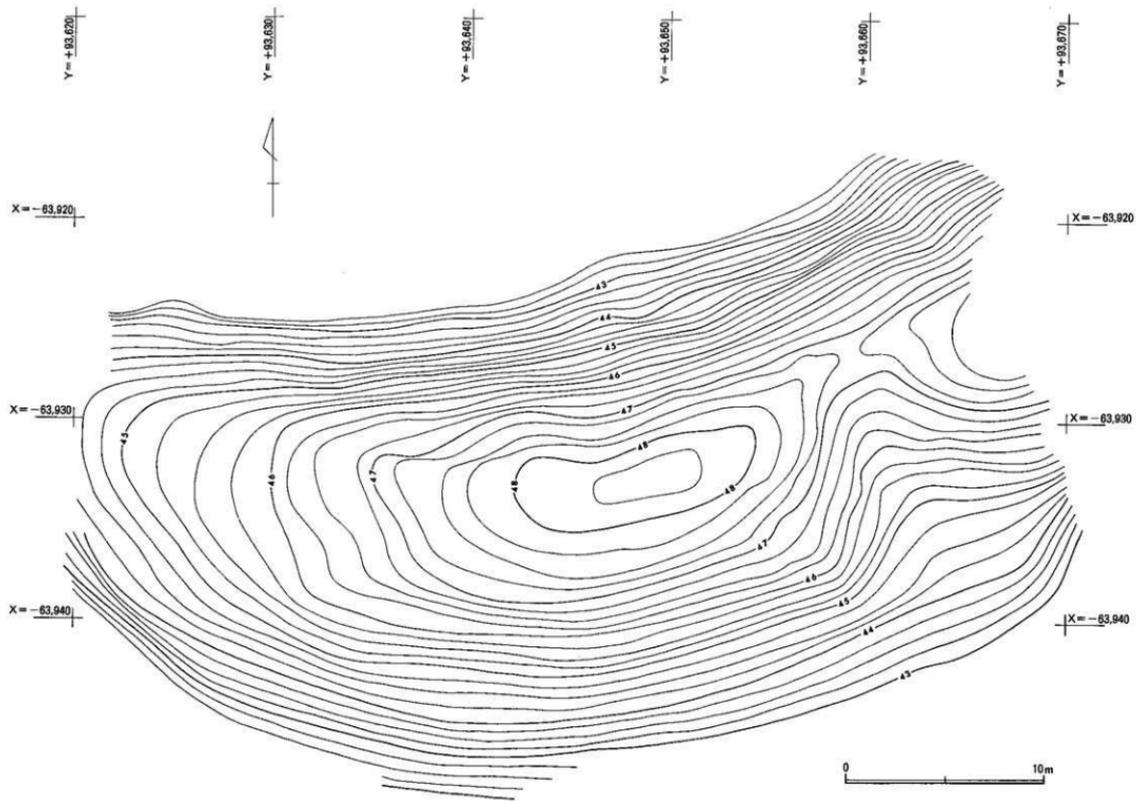
1区の尾根上に認められるいくつかの高まりが存在する中で、最も西端に位置する地点で火葬墓が検出された。調査前の状況（第8図）では、この高まりが古墳である可能性も考えられたために、任意に中心点を設け、十字に主軸を設定した。北側から調査をおこなったが、遺構は確認されなかった。次に、南側に土層観察用のベルトを残して調査をしたところ、火葬墓の蓋石の一部を検出した。そして、周辺を精査し、墓壙及び排水溝を検出することとなった。

（1）周辺の土層（第10図）

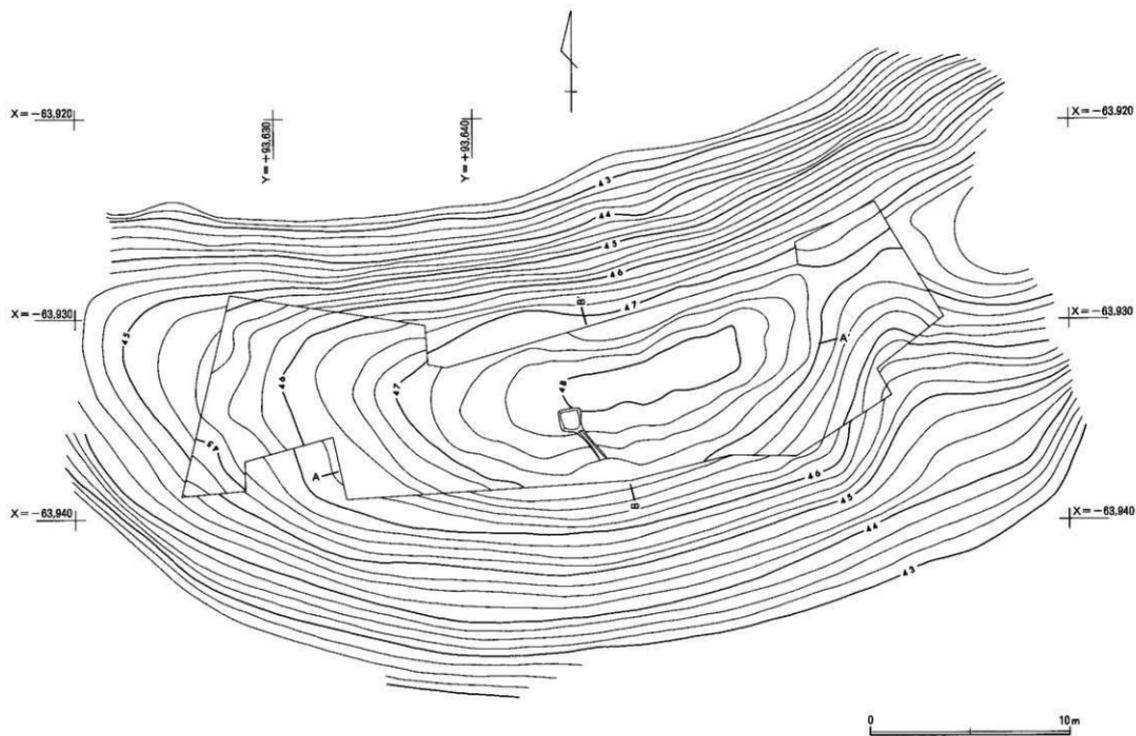
火葬墓周辺の土層は、腐植土（1層）と黄褐色土（2層）の表土を除去すると礫を多く含んだ黄褐色土の地山が検出される。尾根上の平坦面においては、2層の厚みは、10cm程度と薄く、傾斜面25cm前後と下にいくほど厚くなっていく。A-A'ラインの東西に設定した土層断面図では、火葬墓を横断しているが、北側の調査時には、遺構埋土と地山の判別ができず、確認できなかった。2層は、地山の風化、及び根による攪乱によるものと考えられ、傾斜面において、厚くなっているのは、上からの流入があったためと推定される。また、火葬墓に伴う盛土等が存在する可能性も考えられ精査したが、調査では確認されなかった。遺物は、2層から須恵器片が出土しており、火葬墓周辺から2～3mの範囲内である。

（2）埋葬施設の構造

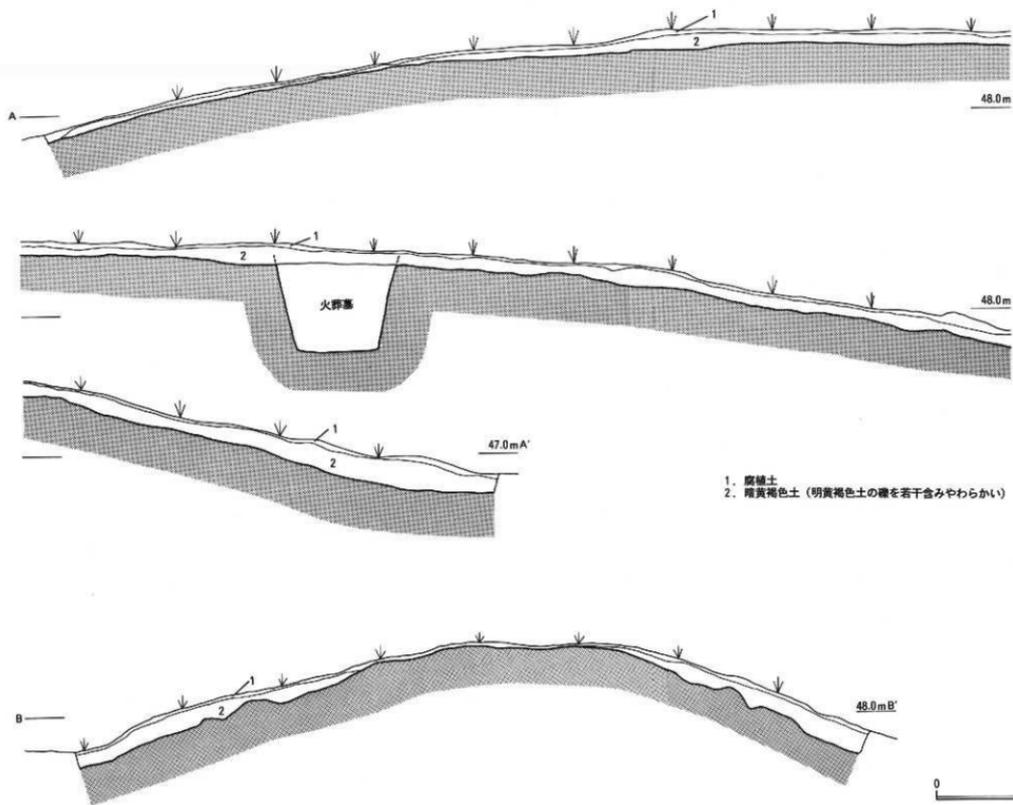
火葬墓は、墓壙を穿ち、その中に大形の石製家形骨磁器を納め、南東隅に排水溝を設けたもので



第 8 回 火葬墓周辺地形測量図 (調査前) (1/200)



第9圖 火罏基周辺地形測量圖(調査後)(1/200)



第10図 火葬墓周辺土層図 (1/60)

ある。封土、盛土等の存在は、認められなかった。

墓壇 (第13図) 調査時に地山と埋土の判別が困難であったことから、南側においていくらか掘り過ぎていたため、その規模を示す数値は本来のものではない。ただし、北側においては、かなり近い数値と思われる。墓壇は地山にほぼ垂直に掘られ、現状では、中央の上端で東西120cm×南北120cmを測り、ほぼ正方形に近い平面形で隅はしっかりとした角をもたず丸い。深さは北側で90cmを測り、骨蔵器の高さとあまり変わらない。底部は中央で東西95cm×南北105cmを測り、多少凹凸があり中央付近が他と比較して若干窪んでいるが、全体的にはほぼ水平である。また、中央部付近の若干の窪みは、骨蔵器を設置するために掘り込まれた程のものとは考えられなかった。墓壇の主軸角度については、墓壇の各辺がややいびつなため正確な数値を出しづらいが真北でほぼ $N-11^{\circ}-W$ 前後、磁北で $N-4^{\circ}-W$ 前後と考えられ、方位を意識して穿たれていると推定される。

排水溝 (第12、13図) 墓壇の南東隅に設けられており、南東方向に直線状に長さ170cm程延びたところで、末端部はやや西よりに折れ、15cmのところで自然地形の傾斜面と同化して終わっていると思われる。排水溝の末端部については、調査で明確に掘り形を確認できなかったが、床面に敷かれている礫がないこと等から判断した。延びていても20cm程と思われる。また、他の部分についても調査時に、排水溝の存在が明確に検出できなかったために、掘り過ぎていたので数値については、本来のものではない。現状で上端の幅35cm、下端の幅17cmを測り、深さは45cmである。断面はやや上開きの台形であり、南西壁が北東壁に比べ傾斜が急であり、ほぼ垂直方向に穿たれている。床面は、墓壇との取り付け部において墓壇床面より12cm高く、骨蔵器の蓋と身の合わせ口より17cm低い。そして、墓壇側から末端部に緩やかに傾斜しており、取り付け部と末端部付近との比高差は5cmである。排水溝の主軸角度については、真北で $N-43^{\circ}-W$ 、磁北で $N-36^{\circ}-W$ である。

石製骨蔵器の出土状況 (第13図) 骨蔵器は、墓壇の中央からやや西北に偏った位置から出土している。主軸は、真北で $N-24^{\circ}-W$ 、磁北で $N-17^{\circ}-W$ であり、墓壇で設定した主軸と比較すると西へ 13° 程ずれている。そのために骨蔵器の蓋石の北西隅は墓壇壁に接している。墓壇の中央に骨蔵器を設置するのがかなり困難な作業であったと思われる。

埋土・礫の状況 (第11、12図) 墓壇内、及び排水溝内は最終的に暗橙褐色土(3層)で埋め戻されており、その下からそれぞれ礫が検出されている。3層は、地山と非常に類似しており、墓壇と排水溝を掘削した際に生じた排土を再利用していると考えられる。なお、墓壇内、排水溝内で見られる礫は、同種の石材と考えられ、火葬墓に穿たれている地山に混ざる礫とは、異なっている。

墓壇内における礫の状況(第11図)は、骨蔵器の蓋と身の合わせ口付近の周辺に壇内全域にわたって置かれており、5cm~15cm程度の大小様々な大きさのものが2段から3段に重なりあっていた。礫は整然と置かれていたという印象はなく、様々な礫が無造作に置かれていたものとする。なお、

蓋の直下にも礫は置かれていたが、蓋の取上げに際して抜き取っているため、その部分については、正確には確認できなかった。よって、図上で復元しているだけである（第12図）。礫の上面の高さは、ほぼ水平に近いが、北辺側がやや高く南東隅付近が最も低い。両者の比高差は4cm前後である。礫の下面の高さはほぼ水平であり、また排水溝の床面よりも5cm程高い。

礫の下面から墓壇床面までには暗橙褐色土（4層）が認められた。土質的には3層と同様なのだが、性格は、墓壇の床面と排水溝の床面との比高差を解消するために置かれたものと考えられる。なお、排水溝の床面直上にも取り付け部付近に限ってこの土が認められる。

排水溝内の礫（第12図）は、床面直上に敷かれており、高さ13cm程の間に5cm～15cm程度のものがある。2段程度の重なりであるが、末端部付近においては、まばらで重ならない。墓壇と同様に規則的に敷かれたものではないと考える。礫の上面はほぼ水平に敷かれており、墓壇の南東隅の礫の上面と比較した場合にも比高差はほとんどない。ただし、骨蔵器の合わせ口より5cm程度低い。

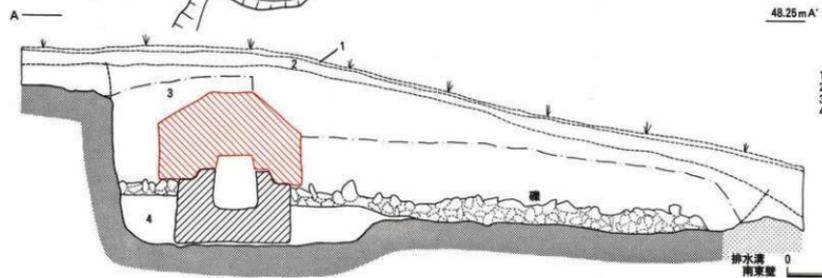
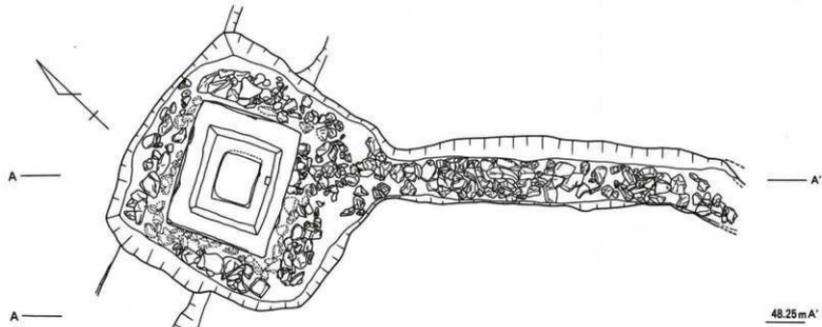
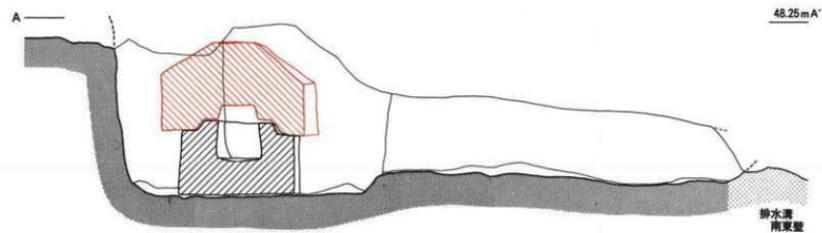
以上のような状況で礫と埋土は確認されたが、次にどのような順序で、埋納がおこなわれたか推測してみたい。骨蔵器の蓋と身が組み合わされ、中に火葬人骨が納められた状態で墓壇に安置されたと考えなければ、表4における3つの可能性が考えられる。埋納順序はまず第1番目に、墓壇が

地山に穿たれ、2番目に排水溝が穿たれたと考えられる。墓壇は、骨蔵器が納まる程度穿たれ、排水溝は、墓壇の床面より高い位置までしか穿たれていないが、骨蔵器の合わせ口より低いことから、骨蔵器内への水の流入を防ぐことのみを考えて最小限に穿たれているものと思われる。そして、3番目に石製骨蔵器の身が墓壇内に安置され、その次の行為については、表4のA案、B案、C案の3つの可能性が考えられる。いずれにしても、蓋石を置く直前において、火葬人骨の納骨に伴う祭祀が行われたと推定される。そして、最後には第3層で埋め戻していると考えられる。

第4表 埋納状況について

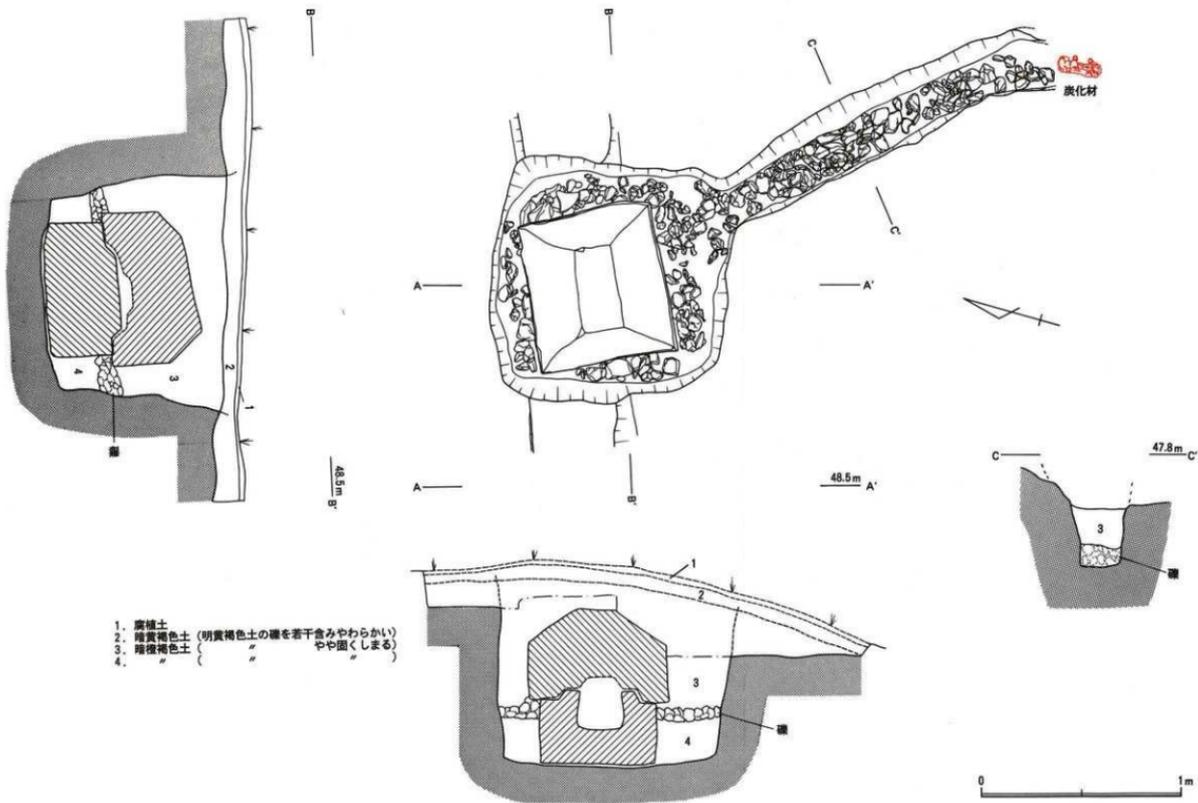
1	墓壇を穿つ		
2	排水溝を穿つ		
3	石製骨蔵器（身）を置く		
	A案	B案	C案
4	蓋を置く	第4層を置く	第4層を敷く
5	第4層を置く	蓋を置く	礫を敷く
6	礫を敷く	礫を敷く	蓋を置く
7	第3層で埋め戻す		

遺物の出土状況（第14図） 遺物は、骨蔵器の身の納骨穴内より火葬人骨とともに水晶球、鉄釘、土塊、炭化物が出土している。納骨穴内には、上端部から11cm程の深さまで暗橙褐色土が入っていた。この土は、粒子が細かく、蓋取り上げ時に、根、及び多数の蟻の存在が確認されたことから、これらによって運ばれたものと推定され、人為的に入れられたものではないと考える。暗橙褐色土を取り除くと火葬人骨が厚さ9cm前後で納骨穴底部まで全範囲にわたり出土した。火葬人骨の取り上げは、任意に5層に分類し、それぞれ比較的大形の人骨や、部位の特定できるものは出土位置を

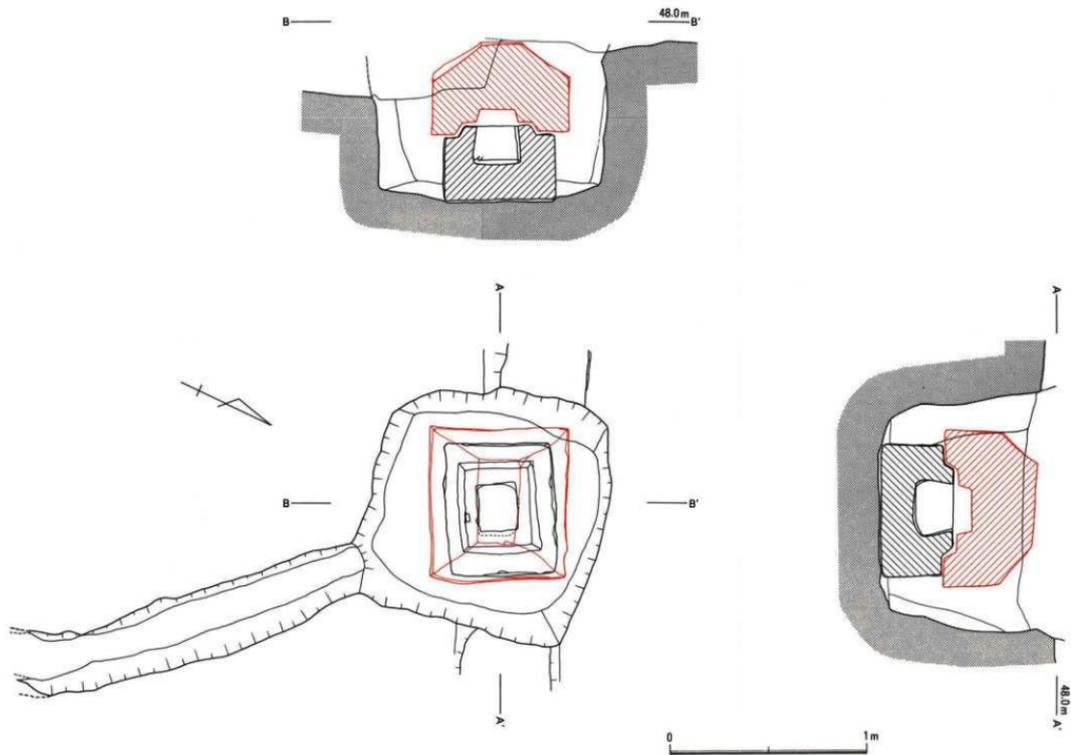


1. 腐植土
2. 暗黄褐色土 (明黄褐色土の礫を若干含みやわらかい)
3. 暗橙褐色土 (" " やや固くしまる)
4. " " (" " " ")

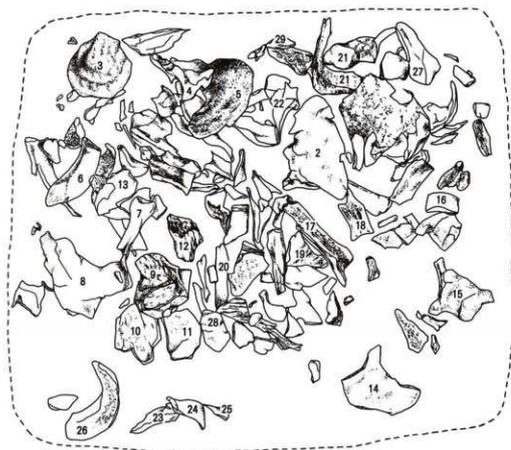
第12図 火葬墓実測図Ⅱ (墓墳・排水溝縦断) (1/20)



第11回 火葬墓実測図I (土層) (1/20)

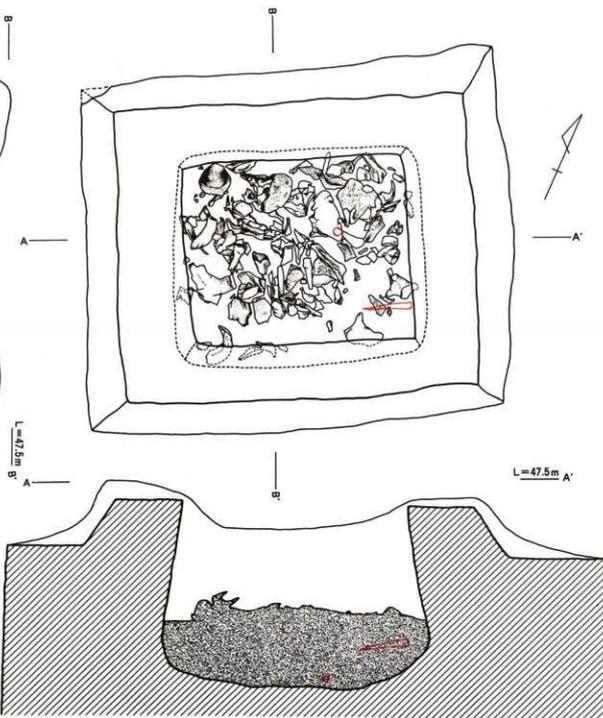
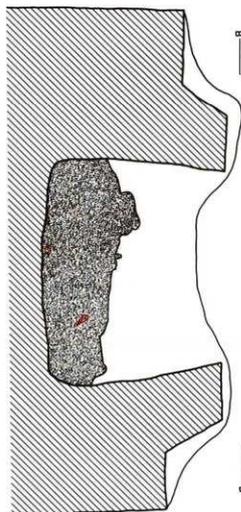


第13回 火葬墓実測図Ⅲ (埋土・覆除去後) (1/20)



0 10cm

- | | | |
|---------|--------------|---------|
| 1. 距骨 | 12. 側頭骨 | 23. 檢骨 |
| 2. 側頭骨 | 13. 頭蓋骨 | 24. 肱骨 |
| 3. 大腸骨 | 14. 頭蓋骨 | 25. 頭蓋骨 |
| 4. 喉椎 | 15. 頭蓋骨 | 26. 大腸骨 |
| 5. 大腸骨 | 16. 長管骨 | 27. 前頭骨 |
| 6. 大腸骨 | 17. 尺骨 | 28. 前頭骨 |
| 7. 長管骨 | 18. 骨片 | |
| 8. 頭蓋骨 | 19. 椎骨 | |
| 9. 頸椎 | 20. 長管骨 | |
| 10. 骨片 | 21. 頭蓋骨 | |
| 11. 後頭骨 | 22. 前頭骨 (眼窩) | |



0 20cm

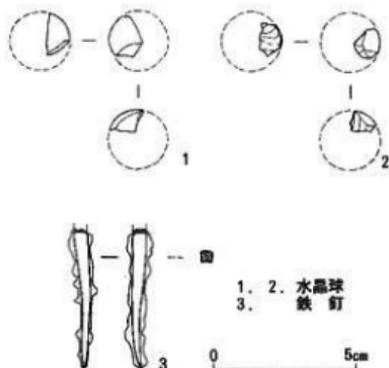
第14回 骨藏器内火葬人骨・遺物出土状況実測図

記録し、その他の小片については、一括して取り上げた。一括して取り上げたものは、後にフルイにかけ土と選別した。この作業中にごくわずかの炭化物と水晶球、土塊を確認した。調査時に確認された水晶球は、底部付近から、鉄釘は先端を中央に向けた状態で出土している。

また、排水溝末端部付近で5cm×20cm、厚さ4cmの炭化材が出土している。出土地点は調査で確認できた排水溝からは外れているが、出土層位が排水溝埋土と類似しており、また鏝の出土地点と近接していることから、本来は、排水溝埋土中のものと思われる。また、放射性炭素年代測定では、A. D. 850±70年の結果がでている。同様な測定を排水溝内の様々な地点の埋土から出土した炭化材についても行い、B. C. 370±90年という測定結果が得られている。

(3) 出土遺物

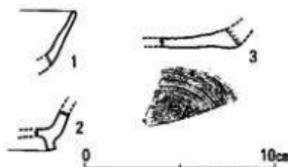
水晶球 (第15図1、2) 納骨穴内より出土した4片の水晶球の中で、図化できたものは2片である。他の2片は小片で、表面の研磨された部分ではない。4片は、同一固体と考えられ、復元すると径2cm前後のもので、穴は穿たれていない。色調は半透明であるが、1片だけやや黄褐色に変色している。1、2とも表面は研磨されているが、ざらついた部分が多い。これらは、火を受けて割れたものと考えられ、表面がざらついているのもこのためと考えられる。



第15図 骨蔵器内出土遺物実測図 (1/3)

鉄釘 (第15図3) 1本のみ出土しており、頭部は失われている。残存長は4.8cm、重さ3.97gで、断面は方形である。

周辺出土須恵器 (第16図) 1区において、火葬墓周辺からのみ7片の須恵器片が出土している。その中で図化できたものは、3片である。1は坏の破片で、口縁から底部付近のものと思われる。残存高で口縁端部より3cmである。2は、坏の底部から体部にかけての破片と考えられ、外側が高い高台が付くものである。残存高で2.2cmを測る。なお、1と2は同一固体の可能性も考えられ、その場合には、器高3.8~4.0cmと推定できる。3は、底部の破片で、糸切り痕残す。高台の付かない坏と推定される。以上の3点は、小片であるため時期等の詳細については明確にし難いが、1と2は、概ね8世紀後半~9世紀初頭頃のものと思われる。



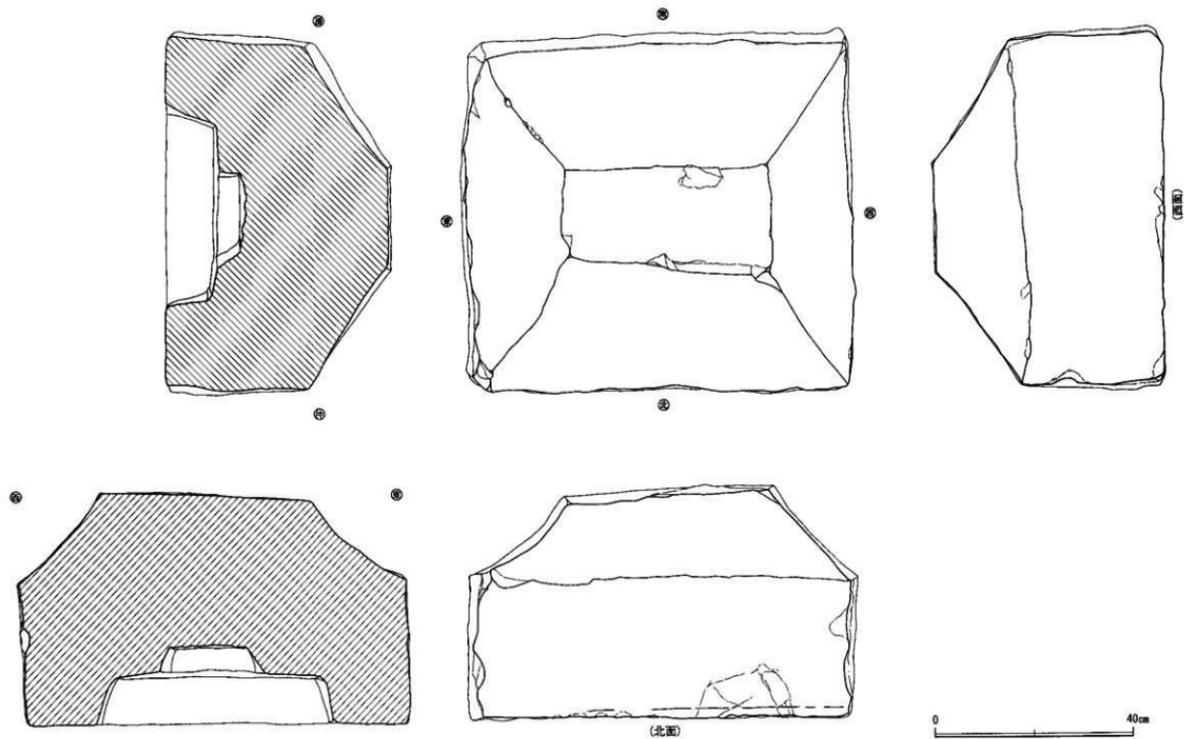
第16図 火葬墓周辺出土須恵器実測図 (1/3)

石製家形骨蔵器(第17、18図) 骨蔵器は、凝灰岩を加工して作られており、その凝灰岩は、付近の荒島周辺で産出されるいわゆる荒島石である。蓋と身で構成され、大形のものであり、身に比して、蓋がやや大きめに作られている。以下蓋と身についてそれぞれ述べたいが、現地での方位を用いて、各面を説明したい。

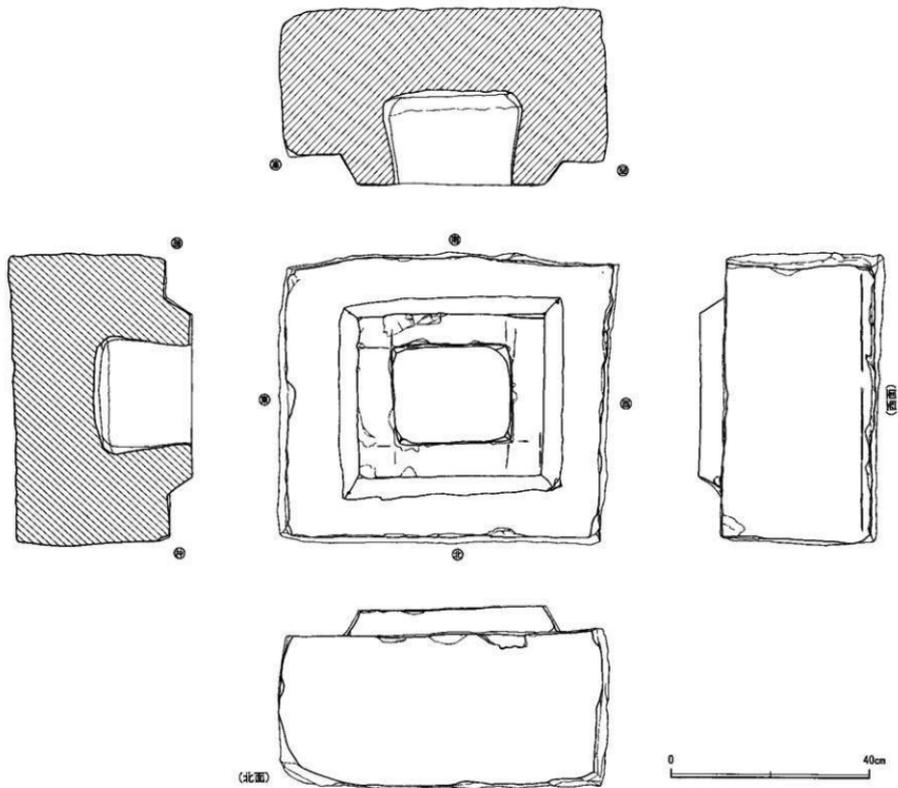
蓋(第17図) 東西79cm×南北71cmのやや長方形の平面形で、高さは中心で46cmを測る。上面観は、北側、西側、南側が直線的に加工されているのに比較して、東側は、やや粗雑な印象を受ける。外面は家形に加工されており、棟を42cm×22cmの東西に長い平坦面に加工している。中央付近から幅が狭まっており、東端では17cmを測る。また、西側から東側に傾斜しており、比高差は2cmである。また、屋根形に加工されている傾斜面においては、東側が西側よりも傾斜が急である。内面は、平坦面を残して方形に2段に削りこまれており、平坦面の幅は、東側14cm、西側13cm、南側11cm、北側16cmを測り、南北において幅が異なる。削り込み部の1段目は、東西48cm×南北41cmのやや縦長の平面形で10cm程削り込んでいる。2段目は東側11cm、西側9cm、南側9cm、北側5cm幅の平坦面を残して削り込んでいる。平面形は、東西21cm×南北19cmを測り、5cm程削り込んでいる。重量は300kgと推定される。

身(第18図) 東西66cm×58cmの縦長の平面形で、高さは、突帯部で36cm、蓋受部で31cmを測り、箱形を呈す。上面観は、北側と東側が直線的に加工されているのに対し、南と西側は粗い加工である。蓋受け部の平坦面の幅は、東側10cm、西側8cm、南側8cm、北側9cmを測り西と南側の幅が狭く、また西面の仕上げ状況は、他の面と比較して粗い。突帯部は、上端部で38cm×32cmの長方形を呈し、受部から高さ5cm程削り出されており、下端部が外に広がるように削りだされている。突帯部の上端の平坦面は、幅を東側7cm、西側6.5cm、南側6cm、北側6.5cmを測る。そして、加工時の目安としたと思われる幅・深さ2mm程度の沈線が残っている。四隅周辺においては必ず認められ、これは、納骨用の穴を穿つ時のものと思われる。また、西側と南側の外周部側においても認められ、これは、突帯部を削り出す時のものと考えられる。納骨用の穴は上端で東西24cm×南北20cmの方形の平面形で、深さ20cm削りこまれている。断面は、底部にいくにしたがって広がる形状で、底付近で最もふくらむ袋状をなしている。各側面には、西面の底部付近において突帯部の上面で認められた加工時に引かれた沈線がほぼ全域に渡って認められる。加工状況は、北、西側面が丁寧に加工され、南、東側面は粗い加工となっている。重さは、200kgと推定される。

蓋と身は、それぞれ加工の状況が各面によって異なり、東西及び南北が対照的に加工されているとは言い難いが、組み合わせについては、十分気を使っているものと考えられる。



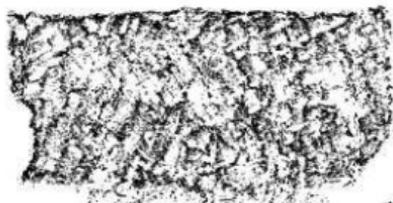
第17四 石製骨藏器実測四I (畫) (1/8)



第18圖 石製骨殖器実測圖Ⅱ (身) (1/8)

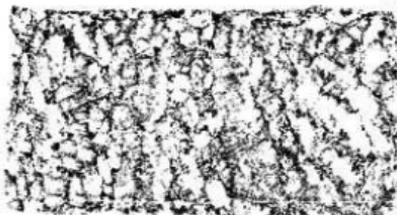
骨蔵器の加工状況について（第19、20、21図） 石製骨蔵器には加工痕が良好に残っており、また、各面によって加工痕の幅、仕上げの精粗があることが分かる。以下、蓋と身それぞれの加工痕の状況について詳細に説明したい。

身（東面） 平坦に仕上げられ、粗い加工痕は認められない。左側は右斜め下方向に削られており、右側も右斜め下方向に削られているが、左側に比べ垂直方向に近い。幅は4cm前後である。



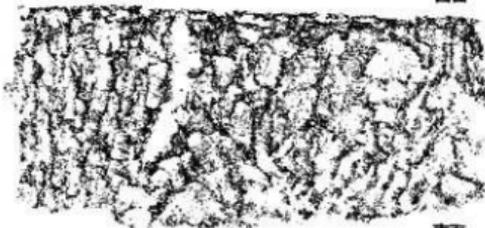
東面

身（西面） 全体的に粗い仕上げである。左上部は幅3.5cm程で水平方向のものが認められ、左下部は垂直方向のものが認められる。



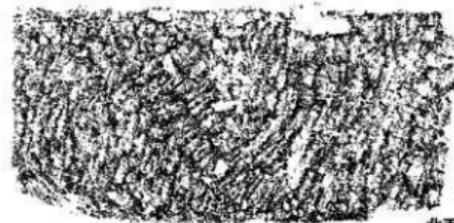
西面

身（南面） 他の面と比較して最も粗い仕上げであり、右側2/3程は、左側に比べ削りが少なく段差ができています。また、所々に加工具の先端の痕が深く残っており、その幅は5.5cm程である。左側は、水平方向に粗く削られている。



南面

身（北面） 非常に丁寧な仕上げで、最も平坦に加工されている。全体的に細かく削られており、右斜め下方向のものが認められる。



北面



第19図 石製骨蔵器拓影Ⅰ（身側面）（1/8）

身(突帯部上面) 平坦であり、加工痕はかろうじて平坦面に沿って長軸方向に削られていることが分かるが、明瞭ではない。加工痕を消すために砥石で磨いている可能性が高い。

蓋(東面) 屋根部の傾斜面においては、接する面の界線ではそれに沿って下方に加工痕が見られる。幅は4cm前後である。他の面は明確に方向等が確認できないが、中央付近の下端部では、右斜め下方向、左斜め下方向のものが確認できる。垂直面では、非常に粗い加工痕が認められ、表面は凹凸が著しい。右斜め下方向のものが確認できる。

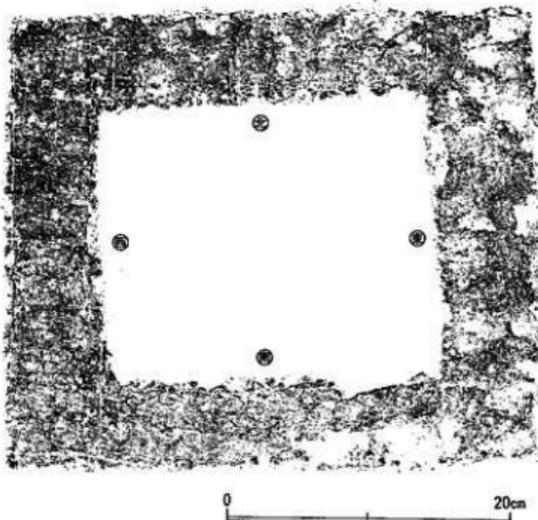
蓋(西面) 屋根部の傾斜面においては、左側の北面と接する部分で、幅4cm程の加工痕が界線に沿って連続的に認められる。同様に、中央付近まで左斜め下方向のものが連続的に残っている。右半分の範囲は、はっきりと分らないが、下端部において右から左へ水平方向のものが界線に沿って認められ、幅3cm前後を測る。垂直面では、ほぼ全城に幅5cm前後のものが、右斜め下方向に認められる。表面はあまり平坦に仕上げられていない。

蓋(南面) 屋根部の傾斜面においては、棟との界線に沿って水平方向のものが認められ、また垂直部分との界線方向でも水平方向のものが認められる。両者とも左から右に向けてのものである。垂直面では、上から下方向のものが認められる。

蓋(北面) 屋根部の傾斜面においては、東面との界線に沿って連続的な加工痕が残り、左側では同様な左斜め下方向のものが

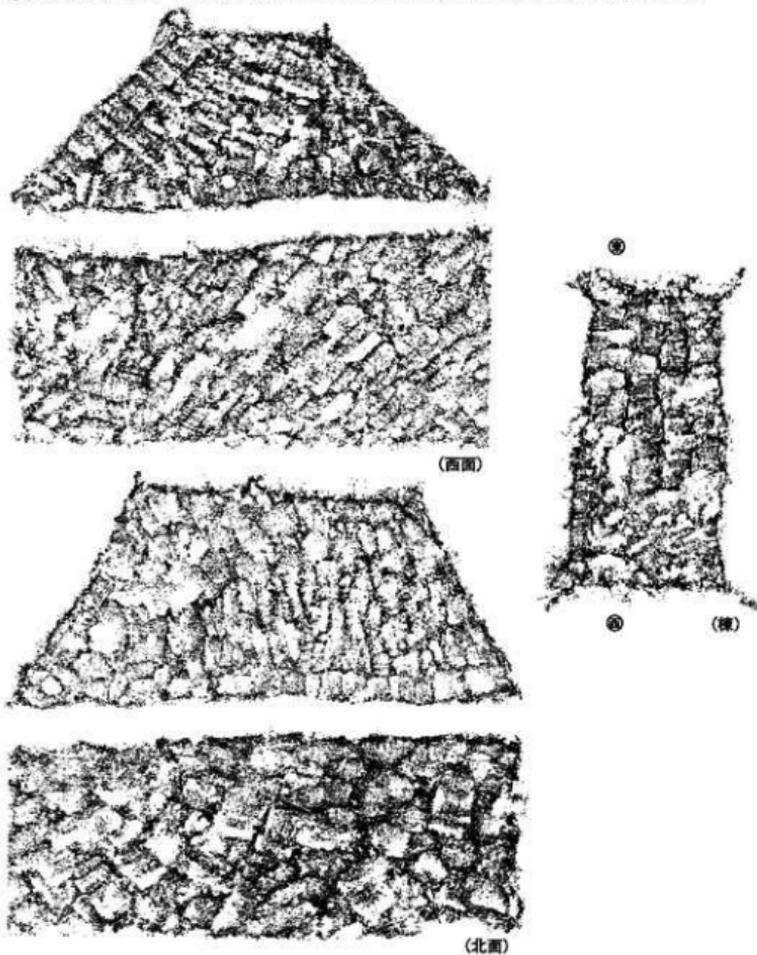
見られる。右側では、やや左斜め下方向の加工痕が認められ、垂直部分との界線付近では、水平方向のものが連続的にあるのが確認できる。垂直面では幅6cm程の加工痕が、他の面と比較して大雑把に残っており、一度に削られている単位が大きい。方向は、左側が右斜め下方向、右側が左斜め下方向である。

蓋(棟) 東側に下降しており、加工痕も東側に向かって連続的にあるのが認められる。幅は4cm～5cmほどである。



第20図 石製骨董器拓影Ⅱ(身上面)(1/8)

以上の状況をふまえて、加工の精粗がある一定の側面を意識しているかどうかを考えた場合、身では北・東面が丁寧であるのに対し、逆に蓋はその2面が粗い。よって、蓋と身は、ある意図をもって同一側面を丁寧に加工しておらず、正面観といったものは考えられない。正面観といったものが存在するとすれば、それは、最も丁寧に仕上げられた、身の上面である可能性が高い。



第21図 石製骨藏器拓影Ⅲ (蓋) (1/8)

3 自然科学分析

中山遺跡の骨蔵器から検出された火葬人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上貴央

(1) はじめに

このたび安来市荒島町の中山遺跡から、奈良～平安時代のもと考えられる石製骨蔵器が発見され、その中から火葬人骨が検出された。

火葬された人骨は収縮、湾曲、細片化をきたして大きく変形するので、骨から得られる情報は土葬された人骨に比してきわめて少なくなる。本遺跡から得られた人骨もその例にもれず、得られた情報は少ないが、本遺跡の重要性にかんがみ、検出人骨についてこれまで明らかになった点について述べてみたい。

(2) 骨の検出状況

石製の骨蔵器は、四角錐の家形の蓋と四角柱の身からなり、身には四角柱の納骨穴がある。納骨穴の上面は土砂に被われていたが、慎重に土砂を除去していくと、骨蔵器の身の上端より約9cmの深さから人骨が検出された。この時点で調査団から筆者に連絡が入り、1993年6月24日に現地へ赴き、骨の取り上げ作業をおこなった。

骨は大きいものでも5～8cm程度で、多くの骨は数センチメートル以下の細片となっているため部位の同定が困難であり、たとえ番号を付して取り上げたとしても部位を同定できないものが大部分であった。また、これらの骨のすべてを図面に描き、それぞれに番号を付して取り上げることは困難であったので、同定にたえられるものや、小さくても重要である骨については番号を付して図面上にプロットして取り上げることにし、骨の分布状況と取り上げの様子をビデオカメラに録画した。

納骨穴中の骨は上から順に第1～第5層に分類し、順次取り上げをおこなった。また、一括して取り上げる場合は、納骨穴の水平面をA～D区の4区に分割して、区域ごとに取り上げをおこなった。このように層位ごとに取り上げをおこなったのは、火葬後、骨を納骨する時に何らかの取り上げ埋葬順位があるかも知れないという想定に基づくものである。

(3) 検出人骨

第1層から第5層までに包含されていた人骨についてその概要を述べる。検出された人骨の総重

量は1690グラムであった。

1) 第1層

納骨穴の最上部の骨で、この骨は火葬人骨の埋納にあたって最後に納められた骨とみることができ、流入した土砂を除去して、最表層にあらわれた人骨は、比較的大きな扁平な骨が多い。頭蓋骨では、頭蓋冠の部分が5点、頭頂骨片、後頭骨片、乳様突起をともなった左右の側頭骨が検出されている。また、右側頭骨の錐体の部分が遊離した状態で検出されている。側頭骨の乳様突起は中等度に発達している。椎骨では、頸椎片が1点検出されているのみで、骨盤の寛骨臼の一部が検出されている。四肢骨では、右大腿骨の遠位骨端をはじめ、大腿骨の大転子と思われる部分、左右不明の大腿骨頭が検出されている。脛骨では、骨体中央部の前縁の部分と近位骨端の一部が検出されている。その他上肢骨片と思われるものが混じっているが、小片化していて部位を特定できない。

2) 第2層

頭蓋骨では、頭頂骨と頬骨が同定できるが、細片化しているものが多く、部位の同定は困難なものが多い。第1層と比べて、頭蓋冠の部分はあまり検出されていない。下顎骨のオトガイ部の一部が検出されているが、歯牙は脱落しており、歯槽部分のみが認められる。確認できた歯槽は、右中・側切歯と左側切歯に相当するものであって、左中切歯に相当する歯槽は吸収閉鎖をきたしている。歯牙では、右上顎小臼歯が1本検出されている。椎骨では錐体の一部が検出されているものの、部位を特定できない。また、寛骨片と思われるものも検出されている。四肢骨では、上肢骨と思われるものは多数含まれているが、部位を特定できるものはない。下肢骨では、大腿骨の骨体部の骨片が3点含まれており、そのうちの1点は筋の付着部である粗線の部分が含まれている。骨の収縮を考えると粗線の発達は良好であるように見受けられる。その他に脛骨片、腓骨片と思われるものが数点含まれている。また中手骨と思われる骨片が1点検出されている。

3) 第3層

頭蓋骨では、左側頭骨の錐体部分が検出されているのみで、他の部位は細片化をきたしている。概して頭蓋の骨は少ない。しかしながら、この第3層には3本の歯牙が含まれており、その内訳は、右下顎大臼歯1本、上顎切歯1本、左下顎大臼歯1本である。これらの歯牙はヒト成人の永久歯であって、歯冠部分の残っているものは少なく、大部分が歯根である。歯冠が残っている大臼歯、小臼歯の咬耗はほとんど進んでおらず、咬耗度はMartinの0-1度である。四肢骨では、上肢骨の橈骨や上腕骨が検出されているのが特徴的である。大腿骨、脛骨などの一部が検出されているが、その数は第1層や第2層に比べて少ない。また、第3末跗骨に相当する指骨が検出されている。その他にも部位を特定できない小骨片が多数検出されている。

4) 第4層

頭蓋骨の頭蓋冠が10点検出されており、この中には骨縫合の状態が観察できるものが多数含まれている。三主縫合のいずれであるかを特定できるものは存在しないものの、縫合の癒合は内板、外板ともに進んでいない。この第4層には12本の歯牙が含まれており、その内訳は上顎小臼歯3本、下顎小臼歯4本、上顎切歯2本、下顎切歯1本、左上顎犬歯1本、部位不明の大臼歯1本である。上肢骨では上腕骨片、橈骨近位骨頭、橈骨片に加えて肩甲骨の関節窩の部分が検出されている。下肢骨では、大腿骨の骨体部分の骨片が検出されている。その他細片化して部位を特定できない骨が多数検出されている。

5) 第5層

納骨穴の底面にあった骨で、納骨時に最も早く埋納された骨である。第3～第4層の骨に比べ、比較的大きな骨片が目立つが、検出骨の部位は一定していない。頭蓋骨では、頭蓋冠の一部、後頭骨の一部が確認でき、顔面頭蓋の骨片も多数混じっている。歯牙では、左下顎第3大臼歯が1本検出されている。椎骨では頸椎が1点確認でき、寛骨の一部も含有している。四肢骨では、大腿骨骨片、脛骨片をはじめ、多数の骨片が認められる。上肢骨片も混じっているが、部位を特定できるものは少ない。

(4) 検出人骨の考察

骨の総量や検出部位から判断して、1体分の骨が埋納されたと考えて矛盾はない。歯牙は合計で17本検出されているが、いずれも同一人物のものと考えられ、部位の重複する歯牙は検出されていない。骨の保存状況そのものは良好であるが、火葬のため細片化や変形をきたして、部位が同定できないものが多かった。残存骨についていえば、頭蓋冠や側頭骨の錐体の部分は比較的よく残っている。下肢では部位の特定ができた骨が多いが、概して上肢骨では骨の特定が困難であった。また、椎骨では頸椎が比較的よく保存されているが、胸椎以下の椎骨については識別ができなかった。

今回、第1～第5層に分けて火葬骨の取り上げをおこなったが、層ごとに人骨を分析してみると、各層に種々の骨が混じっており、特定の部位ごとに骨を納骨穴に埋納した様子は窺えない。後に考察するように、本人骨は火葬時に遺骨を攪拌して十分に骨を焼く操作が加えられているようで、火葬終了時には、骨がバラバラになってしまっていた可能性が高い。

納骨穴に埋納された骨は、火葬後の二次埋葬骨であることは明らかであるが、どれくらい丁寧に骨を拾い埋納したかが問題となる。検出人骨で判断する限り、指骨や歯牙などの細部にわたって骨が検出されていることから、比較的丁寧に拾われたと考えてよい。筆者がこれまで経験した火葬人骨には、安来市小久白遺跡、鳥取市大熊段遺跡があるが、いずれの火葬人骨も多量の炭化物に混じって検出されている。本納骨穴に埋葬された火葬人骨は、炭化物がごくわずしか検出されておらず、

火葬後、骨を水洗して骨蔵器に埋納した可能性が強い。つまり、この火葬人骨は非常に丁寧な扱いを受けており、石製骨蔵器の造りもさることながら、被埋葬者の地位の高さを示しているものといえよう。

今回検出された人骨の大部分は白色を呈しており、小久白遺跡や大熊段遺跡のものよりもより高い温度で焼かれている。また、大腿骨などの主要四肢骨のほとんどすべての破断面は白色を呈している。骨の表面は高温で焼かれて白くなったとしても、その破断面は焼かれてから割れたものであれば、灰白色～灰色を呈しているのが普通である。本遺骨の場合は破断面も均一に白色を呈しており、火葬中に人為的に骨を細片化させる操作を加えたものと考えられ、当時、火葬の技術がかなり高度であったことを窺わせる。

被埋葬者の年齢は、歯牙の咬耗状態や頭蓋骨の縫合の癒合閉鎖の状況から判断して、壮年のものと考えられる。性別は、骨が細片化していて判定はかなり困難である。大腿骨への筋の付着部である粗線はよく発達しており、男性骨を窺わせるが、乳様突起の発達は中等度で、強大な筋の付着があった印象はない。大腿骨の骨皮質の厚みはかなりあって、男性骨を窺わせるものの、性別については確信しがたい。また、歯周囲性の疾患の有無については定かではないが、左下顎中切歯に対応する歯槽は吸収閉鎖をきたしており、生前から歯牙の欠損があったものと推定される。

(5) 参考文献

- 井上貴夫 (1984) 小久白遺跡の骨蔵器の火葬人骨。小久白遺跡詳細分布調査報告書 pp.36-38。
安米市教育委員会
- 井上貴夫 (1986) 大熊段遺跡より検出された中世人骨について。鳥取県教育文化財団報告書 19
「鳥取県鳥取市大熊段遺跡-鳥取中学校舎増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」pp.25-27。鳥取県教育文化財団



1層上面（南から）



2層上面（南から）



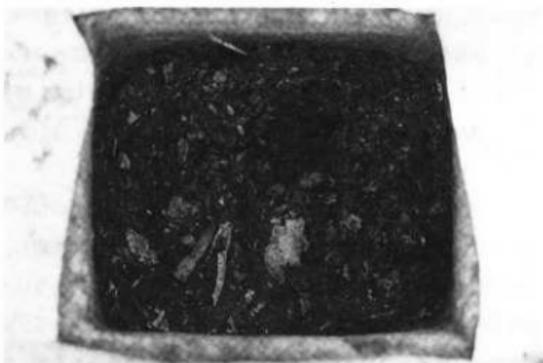
3層上面（南から）

第22図 火葬人骨取り上げ状況（1）

4層上面 (南から)



5層上面 (南から)



取り上げ風景



第23図 火葬人骨取り上げ状況 (2)

4 小結

はじめに

中山火葬墓は奈良～平安時代頃の火葬墓と推定され、排水溝を取り付けた墓壇に大形の石製家形骨蔵器を納めたものである。出土品として骨蔵器中より火葬人骨とともに水晶球、鉄釘等が出土している。詳細については、既に述べたところだが最後に当り本節では、これらについての問題点等について整理してみたい。

(1) 遺跡の立地について

本火葬墓の存在する荒島地域の丘陵には、弥生時代後期から古墳時代終末にかけての墳墓が多数知られている。この地域で古代の火葬墓が検出されたことは、非常に貴重な資料を新たに加えたことになり、600年程にもわたる各時代の墓制が、当地域では窺い知ることができるようになった。また、火葬墓の立地する丘陵尾根上には、ほかに遺構が認められなかったことから、群集するものではなく、単独的に存在するものであると推定され、そして、墳墓等にも存在していない地を選んで火葬墓が営まれたと考える。

(2) 埋葬施設について

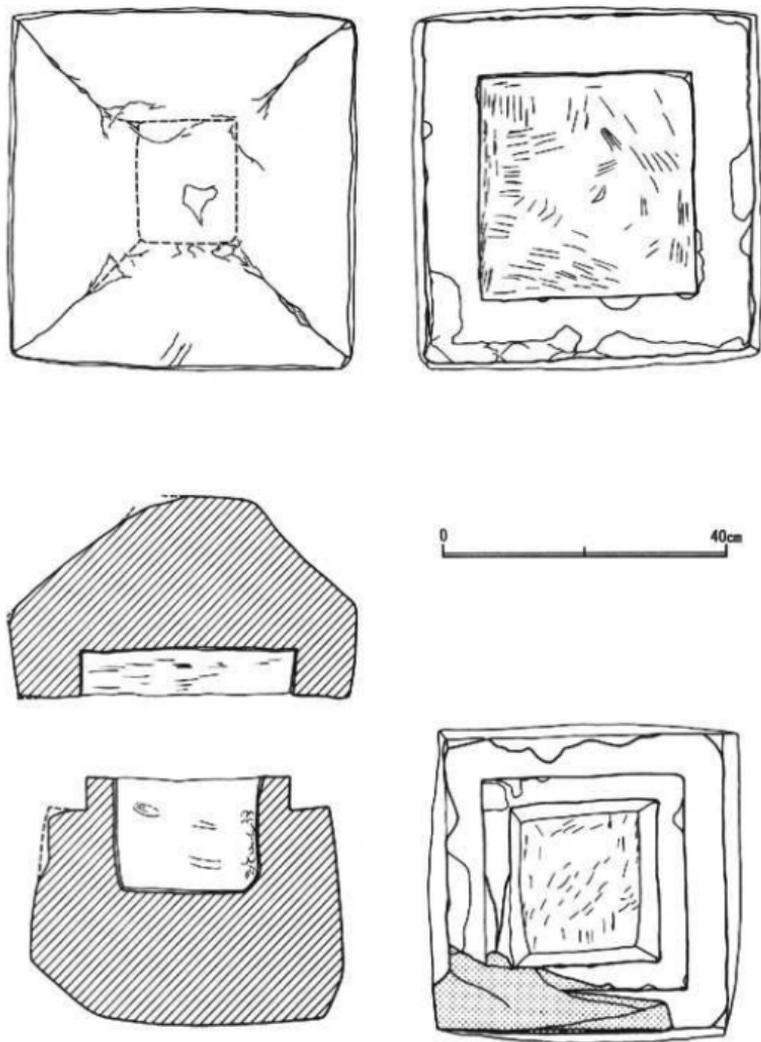
火葬墓で排水溝を伴うものは、管見では、全国的に類例のないものである。一般的に見られる火葬墓では、水に対する配慮として、多量の木炭を墓壇内に充填し、骨蔵器を被ったいわゆる木炭櫛や骨蔵器の合わせ口付近に木炭を置いたものが多く、このように木炭を利用するのは、除湿の意味が考えられている。中山火葬墓の構造も水に対しての配慮から、墓壇内においては合わせ口付近に礫を置き、礫敷きの排水溝を取付けているものと考えられるが、除湿と排水という点で異なっている。排水溝については、前代における古墳に伴う排水施設との比較や水に対する構造について今後全国的に検討してみる必要があると思われる。

(3) 石製骨蔵器について

奈良・平安時代における火葬骨を納めた骨蔵器において、その材質は、圧倒的に須恵器、土師器といった類が多い。その一方で、石を加工したものは、管見にふれたもので全国で97遺跡前後認められる。それらを表にしたものが第5表である。

97遺跡の分布をみると、関東が多く、特に群馬においては100点以上の膨大な数に上る。次いで、近畿、東海、中国で比較的多く、四国、九州においては、1、2例認められるのみである。

これらの石製骨蔵器（石櫃）で時期が確実に分かるものは少なく、時期をしばらく込むことは困難であるが、概ね8世紀初頭～9世紀代にかけてのものが多し。また、石櫃（外容器）として使用され、中に金属器等を内容器として納めたものは、確実に8世紀初頭には存在する。畿内では例外は



第24图 出雲市朝山古墓出土石製骨藏器実測図 (1/8)

あるが、8世紀前葉に限られ、石製骨蔵器として使用されるようになるのは、8世紀後葉段階になってからと考えられている¹¹³。

石製骨蔵器(石櫃)の中で、中山火葬墓と同様に家形に蓋を加工したものは、15遺跡18例認められている。それらは、表5における7、10、16、23、35、44、45、51、57、59、60、66、93、94、95であり、静岡県大北横穴群(57)では3点、群馬県上ノ原火葬墓(16)では2点確認されており、外は各1点である。そして、家形の蓋で石櫃(外容器)のものは、千葉県人竹40号墳(10)、善昌寺裏山火葬墓(35)の2点のみであり、家形に加工されたものは、ほとんどが骨蔵器(内容器)として使用されたといえる。また、家形の蓋のもので時期が分かっているものは、ごく僅かであり、奈良県穴虫古墓(66)が8世紀後葉に、徳島県榑殿谷古墓(95)が10世紀前半頃と推定され、静岡県大北横穴群(57)では、横穴墓出土であるため時期の確定はできないが、8世紀前半～9世紀前半頃の上器が伴っている。以上の状況から家形の蓋をもつ石製骨蔵器の時期は、8世紀前半～10世紀前半と推測できるが、榑殿谷古墓出土の人骨は火葬骨ではなく洗骨されたものであることから、これを除いた場合には、8世紀前半～9世紀前半ということになるが、あくまでも推測の域である。

さて、身に方孔を穿ち、印籠式の組合せである比較的中山火葬墓出土のものと同様しているものは、千葉県木更津市出土(7)のもの、群馬県上ノ原火葬墓(16)、神奈川県中郷出土(51)のもの、静岡県大北横穴群(57)、出雲市朝山古墓¹¹⁴(93)(第24図)、徳島県榑殿谷古墓(95)が挙げられる。ただし、中山出土のように蓋の内面を2段に列り込むものは認められない。このように、骨蔵器の形態的特徴は、各々微細な点で異なっている。

以上のような状況であり、現段階においては中山出土の石製骨蔵器の時期については、確実なところは不明であるといわざるを得ないが、外容器としてではなく内容器として石製骨蔵器が使用されている点や、蓋石が家形に加工されている点から、とりえず8世紀後葉～9世紀前半といった時期を考えたい。時期の確定については、今後の良好な資料を待ち再検討しなければならない。

(4) 骨蔵器内出土遺物について

水晶球 火を受けている可能性が高いことから副葬品として納められたものではなく、遺体が茶毘にふされた時にともに火を受け、破片となったものが、火葬人骨とともに骨蔵器に納められていたと考えられる。このように水晶球が骨蔵器中から出土している火葬墓には、岡山県桃山遺跡が知られており、同様に火を受け割れている。

鉄釘 鉄釘が出土している火葬墓は、比較的多い、これらは、副葬品として用いられたり、木櫃に使用されたものや、火葬時に遺体を納めていた木棺に使用されたものが、火葬人骨と共に納められたと推定されるものが存在する。中山火葬墓出土のものは、1本のみであることや出土状況から木

櫃に使用されたものとは考えがたい。木棺に使用されていたものか、副葬品として納められたものである可能性が高いと思われる。

(5) 山陰における状況について

山陰における奈良・平安時代の火葬墓は、13例認められる(第6表)。8世紀初頭と考えられるものに鳥取県の伊福吉部徳足比売墓が知られ、石櫃の中に銘文の入った銅碗が納められている。また、出雲市の小坂古墳の横穴式石室出土の石櫃も同様に銅碗を伴っていたと考えられており、出土品からこの時期と考えられる。そして8世紀末～9世紀前半頃と考えられるものに、出雲市西谷古墓、安来市小久白遺跡が知られ、9世紀後半以降のものとして江津市波来浜遺跡が存在する。また、火葬人骨を直接納めた石製骨蔵器も外に3点知られているが、時期については明確ではない。以上のように山陰においては、8世紀初頭の早い時期から火葬という新しい風習が導入され、それ以降さまざまな容器を使用して、埋葬が行われていたことが推定されるが、中山火葬墓のように、調査で確認され、構造等について明らかなものが少なく、不明な点が多いことから、今回は集積するにとどまった。今後より深い検討をおこなうことが必要であろう。

おわりに

以上、中山火葬墓の発掘調査の成果をもとにまとめてみた。被葬者については、排水溝をもち、大形の石製骨蔵器を丁寧に埋納していることから、当地方の有力氏族か郡司層と推定することは可能であろう。また、時期については、石製骨蔵器の他地域の様相から8世紀後葉～9世紀前半頃と考えた。あくまでも推定であり、今後、被葬者の問題も含めてさらに検討すべき課題が多いと考えらる。

註

1. 学習院大学木越邦彦氏の測定結果によるものである。
2. 加工痕は、コ字形で、幅4～5cm前後のものが多い。工具としては、直刃のものの使用が考えられる。
3. 静岡県大北横穴群出土の石製骨蔵器においては、入り口側の側面が丁寧な加工がしてあり、正面観といったものが存在するようである。伊豆長岡町教育委員会「大北横穴群」
4. 表では、直接火葬人骨を納めた容器(内容器)を石製骨蔵器と呼称し、火葬人骨を納めた容器を入れるもの(外容器)を石櫃と呼称した。外容器と内容器といった違いはあるが、両者は密接な関係があると思われるので一括して掲載している。
5. 黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『奈良国立文化財研究所論集』IV
6. 道路工事中に出したもので風土記の丘資料館に所蔵されているものを実測した。実測にあたっては、資料館の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。なお現在、出雲市教育委員会にて保管されている。
7. 岡山県教育委員会「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)』
他に奈良・平安時代の墳墓から水晶製の玉類が出土したものに以下のものが知られる。
奈良県能峰古墳群3号墳検出木棺墓『能峰遺跡群I(南山編)』奈良県立橿原考古学研究所
SX1075『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』奈良県教育委員会

第5表 石製骨蔵器(石櫃)出土地名表

番号	遺跡の所在地	内容	文献	備考
1	秋田県雄勝郡羽後町西馬宮内編廻字岩土山	(骨蔵器)	1・38	岩土山遺跡
2	千葉県富津市岩坂	骨蔵器	12・13・37	岩坂大台遺跡2号火葬墓
3	千葉県富津市岩坂字山田	(石櫃)	1	
4	千葉県市原市姉ヶ崎町天羽田	(石櫃)	1	
5	千葉県市原市姉ヶ崎町立野字金出台	石櫃	1・2	
6	千葉県市原市	骨蔵器	36	福増遺跡
7	千葉県木更津市江川1008熊野神社境内	骨蔵器	1・15	
8	千葉県木更津市烏田小谷	(石櫃)	1	
9	千葉県木更津市田川	(石櫃)	35	宮脇遺跡
10	千葉県袖ヶ浦市大竹	骨蔵器	36	大竹古墳群40号墳
11	東京都昭島市玉川町	石櫃	8・13	玉川町火葬墓
12	群馬県渋川市並木町	(骨蔵器)	1	
13	群馬県渋川市金井	骨蔵器	1・5	(上ノ平)
14	群馬県群馬郡群馬町引間	(骨蔵器)	1	
15	群馬県群馬郡箕郷町富岡区礼下道	骨蔵器	1・5	
16	群馬県北群馬郡吉岡町上野田	骨蔵器	1・5・24	上ノ原火葬墓
17	群馬県北群馬郡吉岡町	(骨蔵器)	24	大久保遺跡・龍樹に堀
18	群馬県新田郡立懸町西鹿田山西	(骨蔵器)	1	(山西)
19	群馬県新田郡尾島町世良田	(骨蔵器)	5	
20	群馬県佐波郡赤堀町今井	(骨蔵器)	1	
21	群馬県佐波郡赤堀町下触	(骨蔵器)	1	(稲荷林)
22	群馬県佐波郡赤堀町今井	(骨蔵器)	1	(北原)
23	群馬県佐波郡赤堀町今井多田山	骨蔵器	1・5・24	多田山火葬墓
24	群馬県佐波郡赤堀町今井	(骨蔵器)	24	宝珠寺裏火葬墓
25	群馬県佐波郡境町伊与久	骨蔵器	24	十三宝塚遺跡火葬墓群
26	群馬県前橋市光子町	(骨蔵器)	1	
27	群馬県勢多郡大胡町茂木	(石櫃)	1	
28	群馬県勢多郡新里村新川	(骨蔵器)	1	(新川熊堂)
29	群馬県勢多郡新里村板橋鍋木	骨蔵器	1・5・24	鍋木火葬墓
30	群馬県勢多郡新里村高菜	骨蔵器	1・5	(高泉藤葉平)
31	群馬県勢多郡新里村板橋赤坂並木	(骨蔵器)	1・5	(赤坂並木)
32	群馬県勢多郡新里村板橋	(骨蔵器)	1・5	(板橋赤坂)
33	群馬県勢多郡新里村山上	骨蔵器	1・5	芝遺跡

番号	遺跡の所在地	内容	文献	備考
3 4	群馬県勢多郡新里村新川十三塚	骨蔵器	1・5	十三塚遺跡
3 5	群馬県勢多郡新里村新川	石櫃	34	菩昌寺裏山火葬墓
3 6	群馬県勢多郡新里村新川	(骨蔵器)	24	熊野火葬墓
3 7	群馬県勢多郡柏川村室沢	骨蔵器	1・5	東開墾遺跡
3 8	群馬県勢多郡柏川村月田	骨蔵器	1・5	月長田長峯火葬墓
3 9	群馬県勢多郡柏川村込皆戸	骨蔵器	1・5	
4 0	群馬県前橋市新宿	骨蔵器	1・5	
4 1	群馬県前橋市荒口人道	骨蔵器	1・5・24	荒口大道火葬墓群
4 2	群馬県伊勢崎市波志江	(骨蔵器)	1・5	
4 3	群馬県伊勢崎市	(骨蔵器)	24	青上原2遺跡・龍田川
4 4	群馬県前橋市西大室乾谷	(骨蔵器)	24	西大室乾谷火葬墓
4 5	群馬県前橋市西大室池田栗	(骨蔵器)		津金沢吉茂氏教示
4 6	群馬県新田郡新田町	骨蔵器	24	上中新割火葬墓
4 7	群馬県新田郡新田町	骨蔵器	24	川上遺跡
4 8	神奈川県横浜市区西宮ヶ谷55浅間神社	(石櫃)	1	
4 9	神奈川県横浜市区神奈川区青木町大森山	(石櫃)	1	
5 0	神奈川県横浜市区鶴見区生麦	(石櫃)	1	
5 1	神奈川県綾瀬市深谷中郷	石櫃	1・39	
5 2	神奈川県川崎市高津区普生潮見台	石櫃	1・8・12・13	組合せ
5 3	神奈川県川崎市多摩区南生田6-5	石櫃	8・12・13	
5 4	神奈川県川崎市宮前区平	(石櫃)	12・13	風久保遺跡
5 5	静岡県田方郡大仁町宗光寺	(石櫃)	1	宗光寺遺跡
5 6	静岡県沼津市足高	(石櫃・蓋)	20	清水柳北遺跡
5 7	静岡県田方郡伊豆長岡町北江間	骨蔵器	20・22・29	大北横穴群
5 8	静岡県田方郡伊豆長岡町北江間	骨蔵器	20・22	大北東横穴群
5 9	静岡県田方郡伊豆長岡町北江間	骨蔵器	20・22	割山横穴群
6 0	愛知県丹羽郡 桑田	(骨蔵器)	2・15	桑田古墳
6 1	奈良県桜井市忍坂	(外容器)	16	忍坂古墓
6 2	奈良県宇陀郡大宇陀町拾生字城山	石櫃	15・16	拾生古墓
6 3	奈良県宇陀郡室生村無山	(石製容器)	16	無山古墓
6 4	奈良県高市郡高取町田井ノ庄藤谷	(石櫃)	16	藤谷古墓
6 5	奈良県北葛城郡当麻町当麻北墓	骨蔵器	16	当麻古墓
6 6	奈良県北葛城郡香芝町穴無視字シバヤマ	骨蔵器	6・15・16	穴虫古墓
6 7	奈良県山辺郡都賀野村甲園字出屋敷120	石櫃	3・15・29	

番号	遺跡の所在地	内容	文献	備考
6 8	和歌山県伊都郡高野口町名古屋	石櫃	16・19	名古屋古墓
6 9	和歌山県和歌山市六十谷大同寺	石櫃	16	大同寺古墓
7 0	大阪府茨木市安威將軍山	石櫃	16	將軍山古墓
7 1	大阪府寝屋川市高柳長栄寺東側	骨蔵器	2・16	高柳古墓
7 2	大阪府東大阪市石切町	(石櫃)	16・42	辻子谷古墓
7 3	大阪府羽曳野市西浦山王	(石櫃)	16・42	西浦古墓
7 4	大阪府羽曳野市西浦山王	骨蔵器	16	日吉神社裏山
7 5	大阪府羽曳野市蔵の内北谷	(石櫃)	16	蔵の内古墓
7 6	大阪府羽曳野市蔵之内字牛谷山	骨蔵器	2	
7 7	大阪府富田林市高辺台	(石櫃)	16・42	機坂古墓
7 8	大阪府富田林市津々山台	(石櫃)	16・42	甘山古墓
7 9	大阪府八尾市大竹町	(體形藏骨器)	4	鏡塚門墳
8 0	京都府京都市西京区大枝塚原町	石櫃	14・16・29	宇治宿禰墓
8 1	京都府宇治市広野町八軒原谷	(石櫃)	14・15・16	広野古墓
8 2	兵庫県宝塚市中山寺北米谷	石櫃	16・19	北米谷古墓
8 3	兵庫県姫路市別所町小林	(石製合子カ)	16	仏心寺古墓
8 4	兵庫県姫路市辻井町藤ノ木	(半球状容器)	16	辻井古墓
8 5	兵庫県川辺郡小浜村米谷	石櫃	2・4	
8 6	岡山県小田郡矢掛町東三成唐臼	石櫃	7・9・14	
8 7	岡山県久米郡中央町打穴西花ノ木唐臼	(石櫃)	7・10	唐臼古墳群
8 8	岡山県英田郡作東町土師谷	(石櫃)	10・11・25	
8 9	鳥取県岩美郡国府町宮下	石櫃	29・41・43	伊福吉部徳足比売
9 0	鳥取県米子市青木	(骨蔵器)	27	青木遺跡
9 1	島根県出雲市馬木町小坂	(骨蔵器)	26・32	小坂古墳
9 2	島根県山雲市上塩冶町菅沢	(骨蔵器)	31・32	菅沢古墓
9 3	島根県出雲市朝山町	(骨蔵器)	26	朝山古墓
9 4	島根県安来市荒島町中山	骨蔵器		中山火葬墓
9 5	徳島県板野郡大麻町坂東樋殿谷	骨蔵器	1・40	樋殿谷古墓
9 6	香川県木田郡三木町深谷	(骨蔵器)	1	
9 7	鹿児島県大口市曾木斧トキ	(骨蔵器)	17	斧トキ1号墳

(注) 石 櫃：外容器として使用されたもの。

骨蔵器：内容器として使用されたもの。

□□□□：不詳のため原典のまま記載。

石製骨藏器(石櫃)文献一覧

1. 「墳墓」『仏教考古学講座』7巻
2. 安井良三「日本における古代火葬墓の分類」『日本考古学論集』6
3. 藤澤一夫「墳墓と墓誌」『日本考古学講座』6
4. 藤澤一夫「火葬墓の流布」『新版考古学講座』6
5. 尾崎喜左雄・大里仁一「群馬県赤堀村多田山発見の火葬墓群」『古代学研究』第15・16号
6. 関千善教「大和二上出土の家形骨藏器について」『古代学研究』第15・16号
7. 御船恭平「岡山県の歴史時代資料一覧表」『古代学研究』第15・16号
8. 長谷川厚「歴史時代墳墓の成立と展開(1)」『古代』第75・76号
9. 間壁霞子「古傳真備祖母骨藏器周辺の問題」『倉敷考古館研究集報』第15号
10. 間壁忠彦「取子「岡山県下の奈良・平安期墳墓集成」『倉敷考古館研究集報』第16号
11. 間壁霞子「岡山県下奈良・平安期墳墓に見る二・三の問題」『倉敷考古館集報』第16号
12. 村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨藏器の基礎的研究(上)」『川崎市市民ミュージアム紀要』第2集
13. 村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨藏器の基礎的研究(下)」『川崎市市民ミュージアム紀要』第3集
14. 帝室博物館「天平地寶」
15. 朝日新聞社「天平の地宝」
16. 黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『奈良国立文化財研究所研究論集』VI
17. 上野精志「火葬墳墓の研究」『遠賀川流域の考古学』
18. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XX
19. 北九州市立考古博物館「火葬墓の世界」『集末期古墳の世界』開館10周年記念展図録
20. 「骨器・石櫃」『静岡県史・資料編』3
21. 佐野五十三「駿河妙見古墳群の再検討」『静岡県埋蔵文化財調査研究所・研究紀要』I
22. 伊豆長岡町教育委員会「大北横穴群」
23. 「火葬墓」『岡山県の考古学』地域考古学叢書
24. 津金沢吉茂「古代の墓制」『群馬県史・通史編』2
25. 作東町教育委員会「作東の文化財」
26. 三宅博士「火葬された人々」『さんいん古代史の周辺』下
27. 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書」II
28. 東京都教育委員会「東京の遺跡散歩」
29. 奈良国立博物館「発掘された古代の在銘遺宝」特別展図録
30. 八雲立つ風土記の丘資料館「山陰の仏教考古」76特別展
31. 池田満雄「出雲・菅沢古墓」『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』III
32. 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」古代の出雲を考える6
33. 鳥根県教育委員会「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」
34. 尾崎喜佐雄「古代」『勢多郡誌』
35. 君津郡市文化財センター「昔むかしの上郷」1991
36. 君津郡市文化財センター「大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書」I
37. 千葉県文化財センター「古墳時代(2)」『房総考古学ライブラリー6』
38. 千葉県文化財センター「岩坂大台遺跡」
39. 秋田県教育委員会「秋田県遺跡地図」(奥南版)
40. 石野 瑛「相模編高座郡浪谷村の横穴と瀬瀬村の石櫃」『考古学雑誌』第15巻第3号
41. 菅原康夫「日本の古代遺跡」37徳島
42. 野田久夫・清水真一「日本の古代遺跡」9鳥取
43. 大阪府教育委員会「大阪府文化財地名表」
44. 鳥取県埋蔵文化財センター「歴史時代の鳥取県」鳥取県埋蔵文化財シリーズ4

第6表 山陰の古代火葬墓

遺跡の所在地	内容	文献	備考
[鳥取県]			
1 岩美郡国府町宮下	銅製容器	1・2・3・4・11	伊福吉部徳足比売墓
2 岩美郡岩美町新井		11	
3 八頭郡河原町三谷	須恵器壺	11	
4 米子市青木	石製骨蔵器	5	青木遺跡
[鳥根県]			
1 出雲市馬木町小坂	石製骨蔵器	3・4・9・10・11	小坂古墳
2 出雲市上塩冶町	石製骨蔵器	3・6・9・10・11	菅沢古墓
3 出雲市朝山町	石製骨蔵器	4・10	朝山古墓
4 出雲市大津町来原	須恵器壺	6・10・11	西谷古墓
5 江津市後地	土壇	7・8	波来浜遺跡
6 江津市都野津町青山	須恵器壺	3・4・7	
7 江津市都野津町清水上	須恵器壺	3・4・7	
8 安来市久白町	須恵器壺	12	小久白遺跡
9 安来市荒島町	石製骨蔵器		中山火葬墓

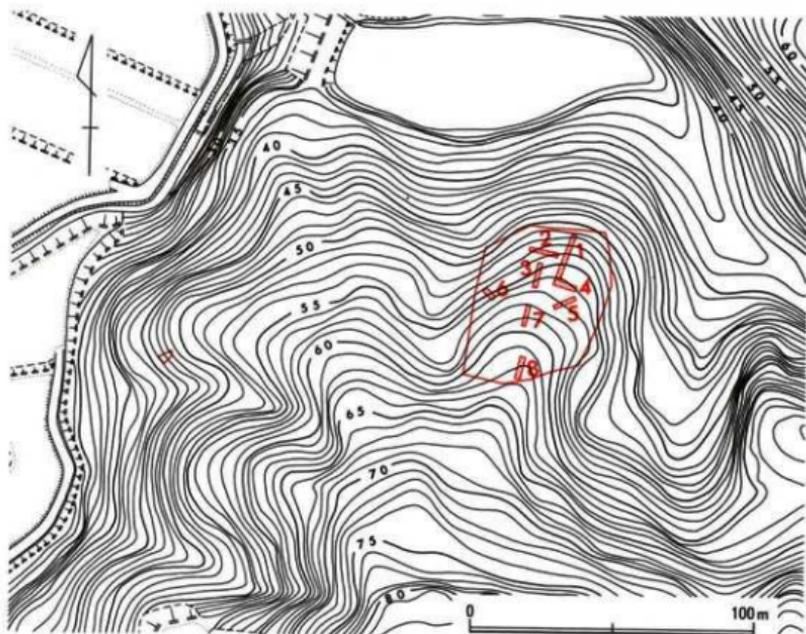
参考文献

1. 奈良国立博物館『発掘された古代の在銘遺宝』特別展図録
2. 鳥取県埋蔵文化財センター『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ4
3. 鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館『山陰の仏教考古』特別展図録
4. 山陰中央新報社『さんいん古代史の周辺(下)』ふるさと文庫9
5. 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
6. 鳥根県教育委員会『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集
7. 江津市教育委員会『江津市誌』
8. 江津市教育委員会『波来浜遺跡発掘調査報告書』
9. 出雲考古学研究会『石棺式石室の研究』古代の出雲を考える6
10. 鳥根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』
11. 雄山閣『仏教考古学講座』7巻
12. 安来市教育委員会『古代出雲王陵の丘シンポジウム』資料集

まきばやし IV 巻林遺跡

1 遺跡の位置と調査の概要

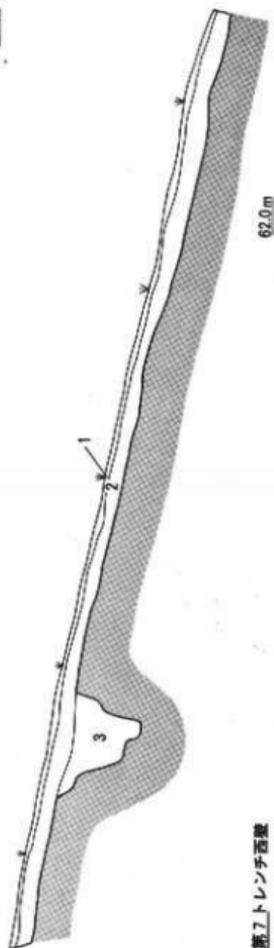
巻林遺跡は、八東郡東出雲町下意東字巻林3158他に所在する。現在の行政区分上では、安来市と東出雲町とは中海に向かって南北に延びる丘陵の脊稜に沿って境界が置かれているが、巻林遺跡はこの境界の役割を果たす丘陵の、西側に派生した支丘の尾根上にある。標高は55～65mで、周辺の丘陵と比較すると、尾根筋上としてはかなり広い平坦な緩斜面を有する。水田面とは、比高差が最小でも35mと大きく、場所もかなり隔たっている。三方を丘陵で囲まれているものの、谷が大きく開く北方向は、中海から島根半島を一望でき、眺めは大変良い。中山遺跡のある丘陵とは、谷を隔てて西隣りの丘陵に当たる。



第25図 巻林遺跡調査区位置図 (1/2000)
(ワク内H5年度調査範囲、アミ目H4年度調査トレンチ配置)

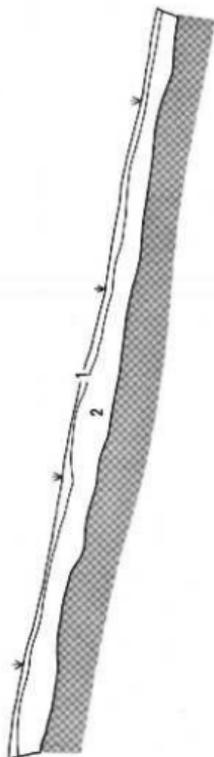
59.0m

第3トレンチ西壁



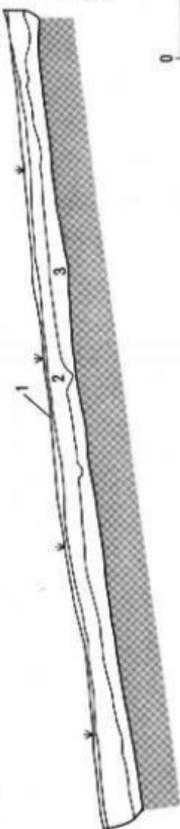
62.0m

第7トレンチ西壁



63.6m

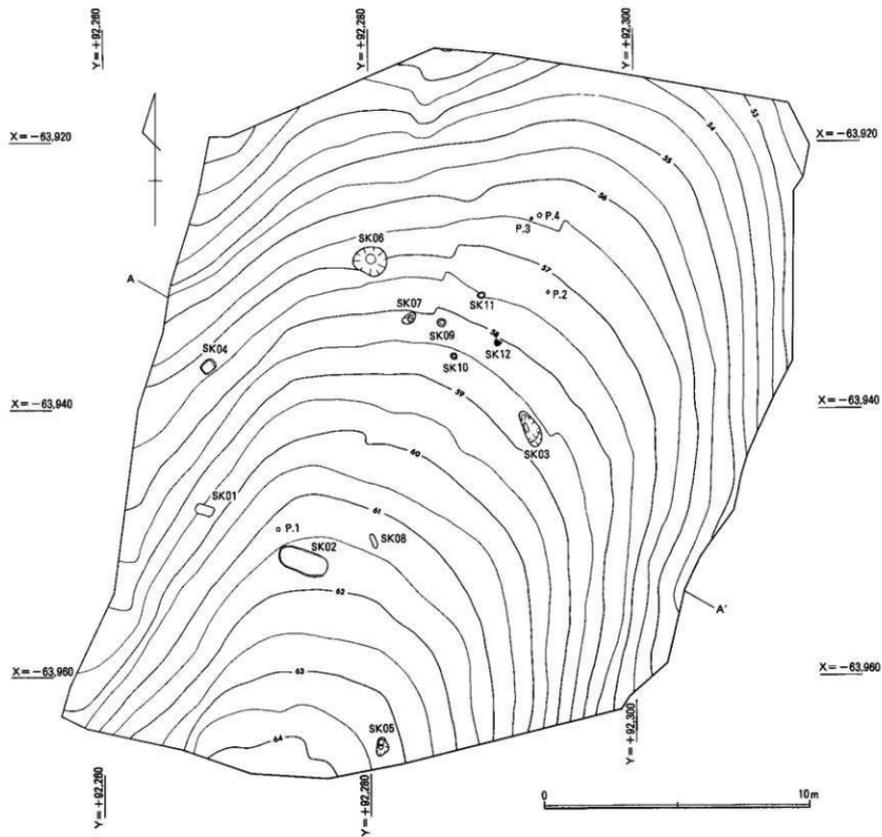
第8トレンチ東壁



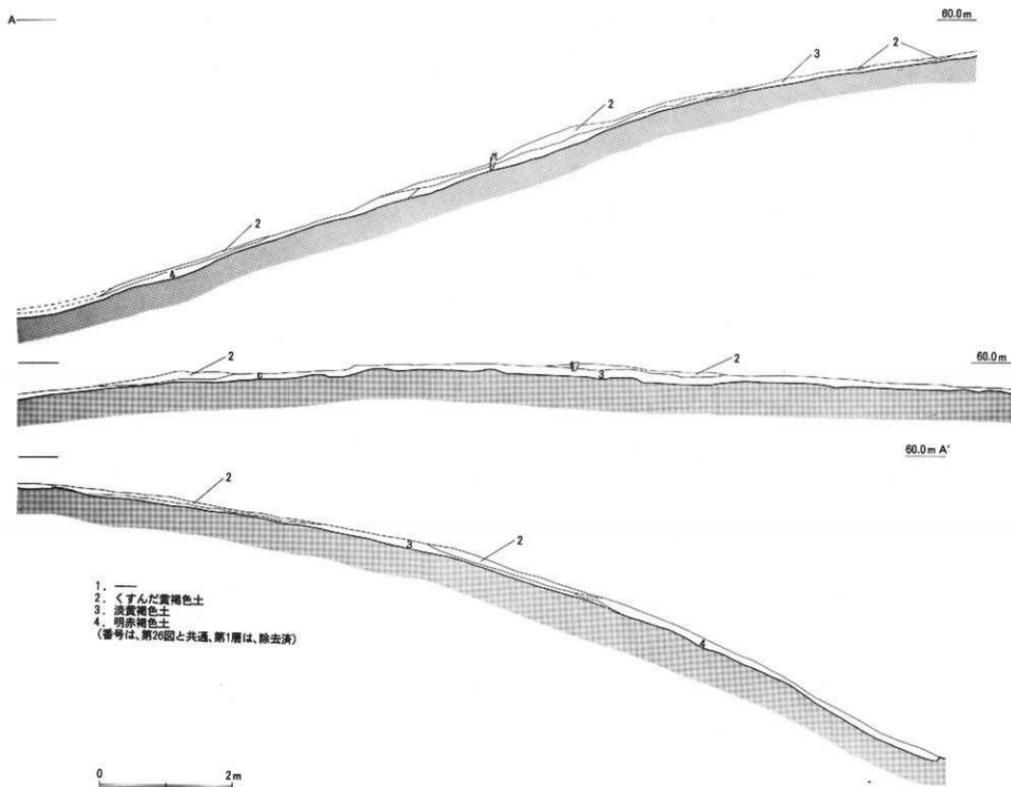
1. 黒色埋戻土 (腐植土)
2. くすんだ重褐色土
3. 淡黄褐色土

0 2m

第26図 土層断面図 I (H4年度トレンチ調査時) (1/60)



第27圖 卷林遺跡遺構配置圖 (1/300)



第28図 土層断面図Ⅱ (H. 5年度A-A'ライン) (1/60)

発掘調査は、H4年度に任意に2×4～8mのトレンチを8か所に設け、範囲確認調査を行ったところ、遺物包含層と土坑を確認した。これを受けて、未調査部分にも遺跡が広がっている可能性が考えられるため、今回面積を広げて調査を実施するに至った。この結果、土坑12基などを検出した(第27図)。これらには、大きさなどに規格性はなく、各々は性格の異なる、独立したものであると考えられる。

調査区内の、遺構の多くが検出された尾根上緩斜面の基本的な土層堆積状況は、以下の通りである(第26図、第28図)。なお斜面側には一部でこれ以外の土層の堆積が確認されている。第3層の下層は基盤層である。

- 第1層 黒色現表土層(腐植土)
- 第2層 くすんだ黄褐色土層(炭含む)…遺物包含層
- 第3層 淡黄褐色土層…遺構掘り込み面

2 遺構について

検出した遺構は、土坑12基(SK01～12)とピット4個(P1～4)であり、多くは尾根上の緩斜面で検出されたが、尾根筋ということから残存状況はあまり良好ではなかった。以下それぞれについて述べる。なお、土坑の計測値などは第7表にまとめ、覆土については各土坑実測図(第29、30図)に記載している。

SK01(第30図、図版17) 尾根上から西側斜面への変換点付近にある。平面形は、やや直線的な小判形を呈している。覆土中より遺物は出土していない。

SK02(第29図、図版17) 尾根上緩斜面にある。平面形は小判形を呈しており、今回検出した土坑の中では大型である。尾根上ということから残存状況は良くない。50cm程北西には直径20cm深さ15cmのピット(P1)を検出したが、SK01と関連があるかどうかは不明。遺物は出土していない。

SK03(第29図、図版18) 尾根上緩斜面にある。平面形は不整形円形を呈し、二段の深い掘り込みである。覆土中より遺物は出土していない。

SK04(第30図、図版18、19) 尾根上から西側斜面への変換点付近にある。この土坑のみは淡黄褐色土下層の基盤層から掘り込まれており、他の土坑とは時期的に隔たる可能性がある。平面形はやや直線的な小判形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれていたようである。内部は赤くよく焼けており、底面には8cm厚の炭層や、混上炭層が観察できた。炭は細かなものばかりである。これに伴う遺物は出土していない。

SK05 (第30図、図版19) 尾根上緩斜面、調査区の南端の最も標高の高い位置にある。平面形は不整楕円形で、掘り込みもあまり整っていない。形態・規模・覆土では、SK07と似通っている。覆土中より遺物は出土していない。

SK06 (第29図、図版20) 尾根上緩斜面にある。平面形は多少乱れているがほぼ正門に近く、浅い円錐状を呈している。遺物は出土していない。

SK07 (第30図、図版20) SK06の西側、尾根上緩斜面のほぼ中央にある。平面形は、不正楕円形で、掘り込みもあまり整っていない円錐状である。形態・規模・覆土ではSK05と似通っている。覆土中より遺物は出土していない。

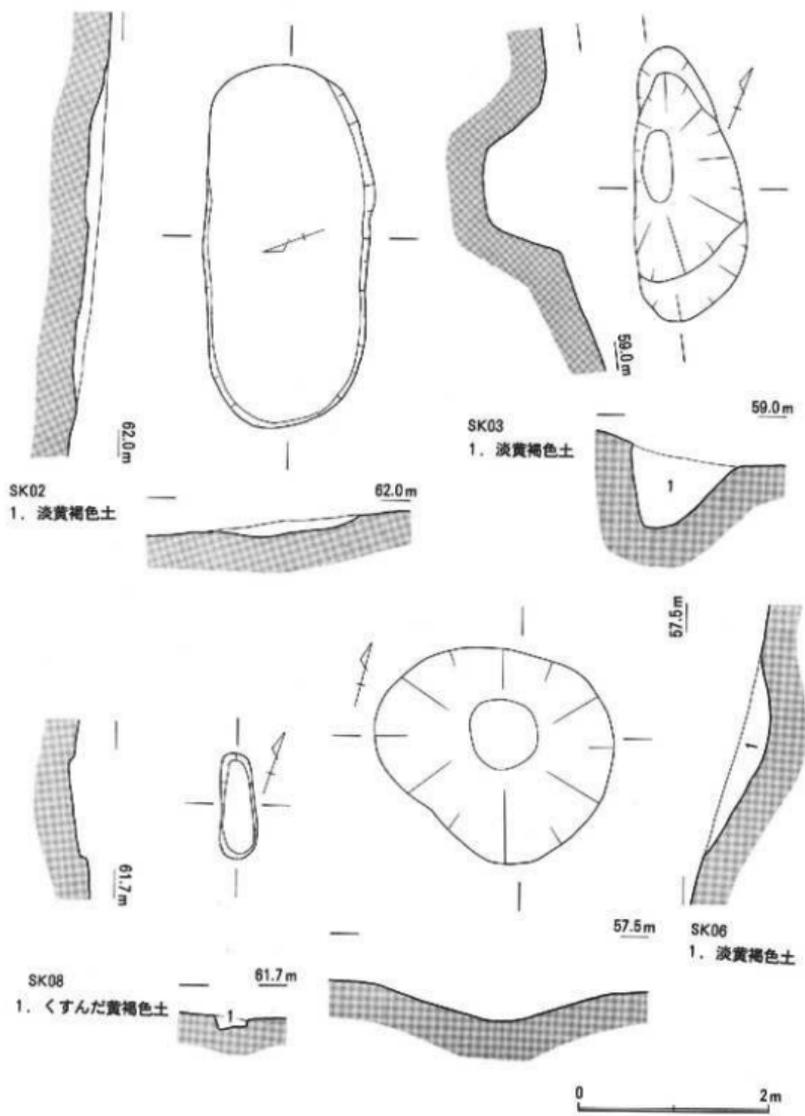
SK08 (第29図、図版21) 尾根上の緩斜面にあり、SK01の東側に隣接している。平面形は楕円形を呈し、浅く、比較的整っている。形態は、SK01の小型化したものであると考えられることもできるが、それぞれの覆土には差があり、性格は異なると思われる。覆土中より遺物は出土していない。

SK09・10・11・12 (第30図、図版21) これらはSK06、07と近接して、尾根上緩斜面にある。平面形は円形で、それぞれは2.8~3.5mの間隔で配置されている様にも見えるが、個々の断面形を見ると、住居跡に見る柱穴のような底が平らに仕上げられているものばかりではなく、また平らなものでも傾斜があることから、住居跡に関係するピットとは考えられない。覆土の第1層はくすんだ黄褐色土で、小さい炭片を多く含んでいた。何れの土坑からも覆土中より遺物は出土していない。

第7表 巻林遺跡土坑計測値一覧表

(単位cm)

土坑番号	平面形	長軸	短軸	深さ
SK01	不整楕円形	170	82	14
SK02	楕円形	384	176	16
SK03	不整楕円形	282	112	84
SK04	不整形	114	88	35
SK05	不整楕円形	142	86	75
SK06	不整形	256	224	34
SK07	不整楕円形	110	74	63
SK08	不整楕円形	112	36	14
SK09	円形	69	61	13
SK10	不整形	56	48	10
SK11	不整円形	57	48	17
SK12	不整円形	51	48	8

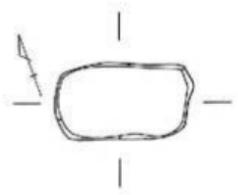


第29図 土坑実測図 I (1/60)

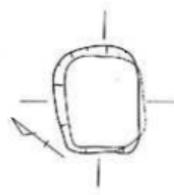


SK01

1. くすんだ黄褐色土
2. 淡黄褐色土



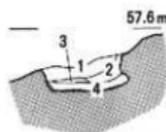
60.0m



57.6m

SK04

1. 黒褐色土
2. 黄褐色土
3. 混炭褐色土
4. 黒色炭層



57.6m



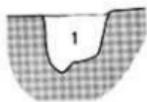
58.5m

SK07

1. 淡黄褐色土



58.5m

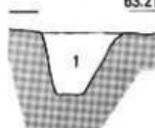


63.2m

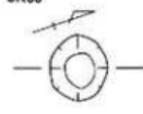
SK05

1. 淡黄褐色土

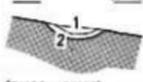
63.2m



SK09



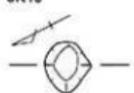
57.4m



(SK09~SK12)

1. くすんだ黄褐色土
2. 淡黄褐色土

SK10



58.5m



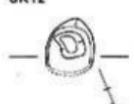
SK11



58.0m



SK12



58.4m



0 2m

第30図 土坑実測図Ⅱ (1/60)

その他の遺構と遺物出土状況(第25図) 以上の土坑の他に、ピット4個(P1~4)を検出した。ピットは直径25cm以下深さ30cmと小規模なもので、配置に規則性は見出せない。覆土はくすんだ黄褐色土で、小さいの炭片を含んでいるSK09~12と同じものである。これに伴って遺物は出土していない。

遺物はSK09~12などが検出された尾根上緩斜面の中央付近から出土している。遺構の掘り込み面からは若干浮いているものの、直上の第2層からほとんどのものが出土した。この付近は今回最も遺構が多く検出されており、土器はこれらの遺構に伴っていた可能性が高い。

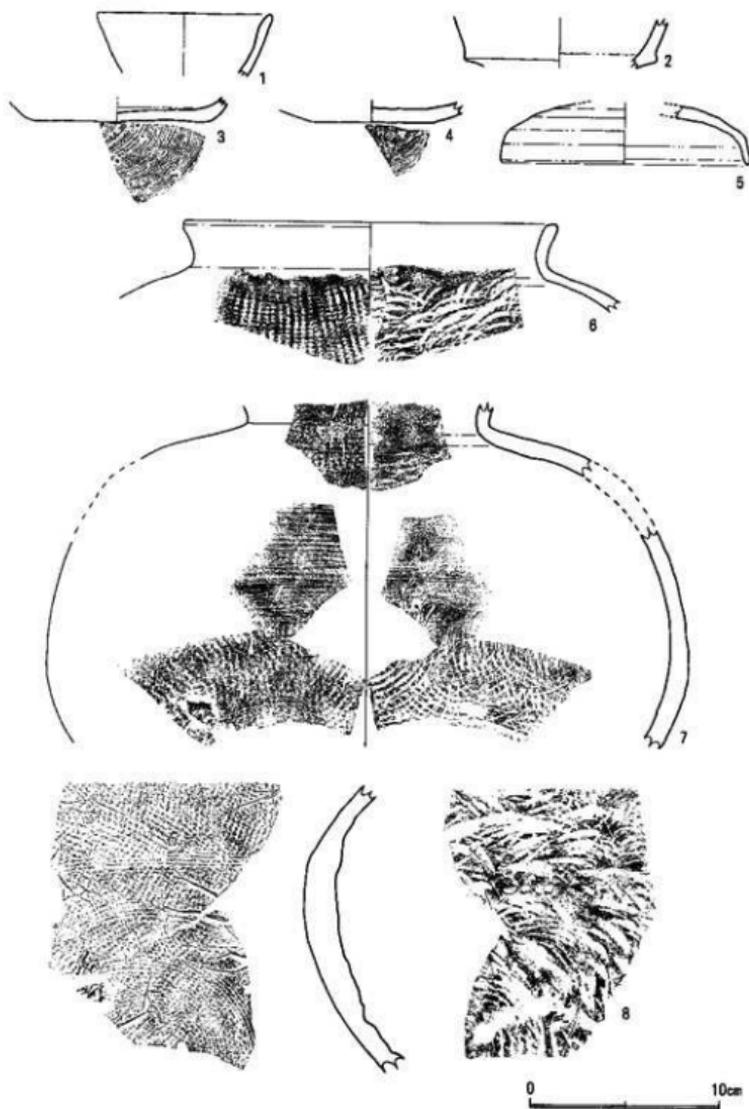
3 遺物について

出土した点数は非常に少なく、うち須恵器がほとんどを占める(第31図、図版22)。1と2のみが土師器である。2は調査前の表面採集品で、小片で著しく磨滅しているため、他所からの流れ込みであると思われる。淡黄褐色を呈し古墳時代前期の鼓形器台片である。以外はすべて第2層からの出土品である。

1は土師器で器壁が非常に薄い単純口縁の小型壺の口縁である。3・4は須恵器の杯の底部で、青灰色を呈し底部は回転糸切痕を残す。5は坏身である可能性もあるがここでは蓋と考える。小さく立ち上がり、段は全く強調されない。青灰色。6、7、8は甕・壺の一部分である。6と8は、焼成、色調、成形などで非常に似ており、同一個体である可能性が高い。6・8の調整は、タキ調整の後、外面にカキメを施す。頸部はタキ調整のみで終了している。7は、6・8より単位が細い内面当て貝を使用しており、内面は頸部から肩部にかけてタキ調整の後ヨコナデを行っている。これらの須恵器の時期は、何れも小片であり不明な点も多いが、7~8世紀のものであると思われる。

4 小結

今回の調査では、検出した遺構についての性格について詳しく述べるための十分な情報を得られなかった。特に第2層出土遺物の出土状況は、より高い位置からの流れ込みであると言いつり難く、本来は遺構に伴っていたと思われる。



第31图 卷林遗址出土土器实例图 (1/3)

V その他の遺跡

1 亀尻Ⅰ遺跡

所在地 安来市日白町字亀尻・亀ノ尻

立地 丘陵斜面から谷部の湿地(水田跡)に存在し、三方を山に囲まれた眺望の利かない地である。

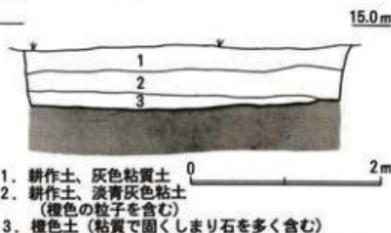
概要 谷部に7本、丘陵斜面に3本のトレンチを設定して調査を行った。(第37図)

遺構は、第6トレンチで焼土坑(第35、36図)が検出された。100cm×100cmの隅丸方形を呈し、深さは60cmで、東側の壁がよく焼けていた。覆土中から炭片以外は出土せず、性格等については不明である。他のトレンチからは何も検出されなかった。

遺物は、須恵器と陶磁器が出土しているが、いずれも小片であるため、時期等については不明である。

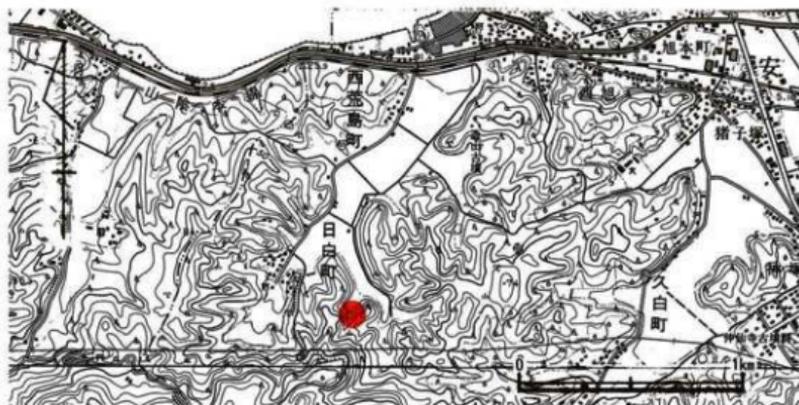


第32図 亀尻Ⅰ遺跡全景



1. 耕作土、灰色粘質土
2. 耕作土、淡青灰色粘土
(橙色の粒子を含む)
3. 橙色土(粘質で固くしまり石を多く含む)

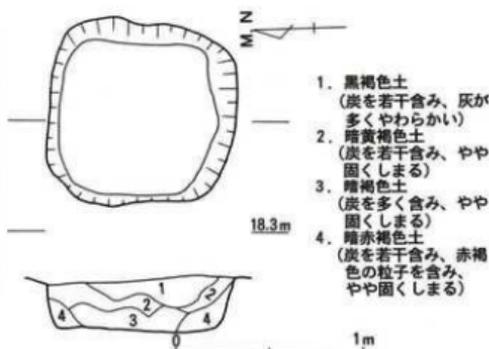
第33図 第10トレンチ北東壁土層断面図(1/60)



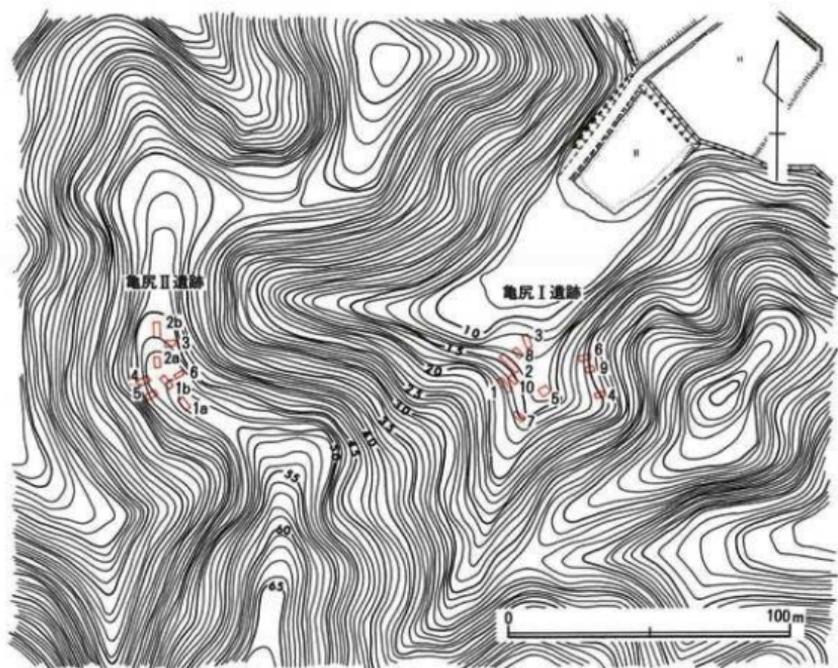
第34図 亀尻Ⅰ遺跡の位置(1/25,000)



第35図 亀尻Ⅰ遺跡焼土坑



第36図 焼土坑実測図 (1/30)



第37図 亀尻Ⅰ・Ⅱ遺跡調査区配置図 (1/2000)

2 ^{かめじり} 亀尻Ⅱ遺跡

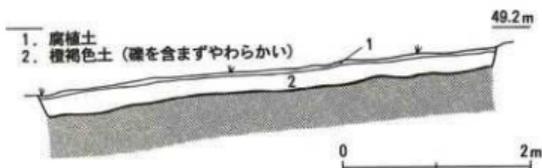
所在地 安来市日白町字亀ノ尻・蓮池谷

立地 亀尻Ⅰ遺跡の後背地で、標高47～49mの丘陵上に存在し、北側に造山古墳群や中海を望むことができる。

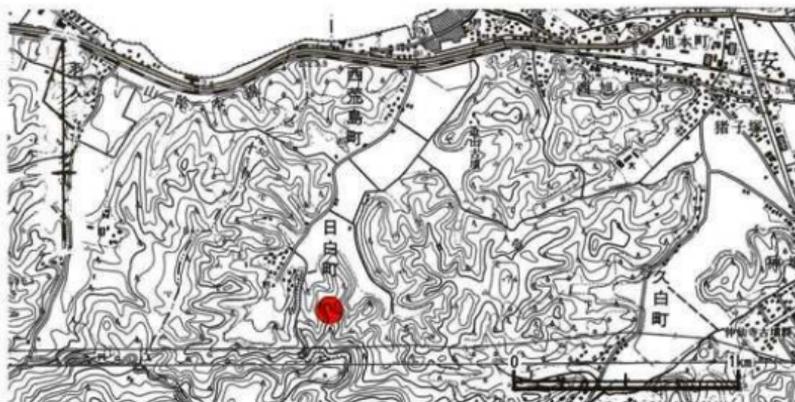
概要 丘陵尾根上に8本のトレンチを設定し調査を行った(第37図)。墳墓などの存在が予想されたが、何れのトレンチからも遺物も遺構も検出されなかった。



第38図 亀尻Ⅱ遺跡全景



第39図 第1-bトレンチ東壁土層断面図(1/60)



第40図 亀尻Ⅱ遺跡の位置(1/25,000)

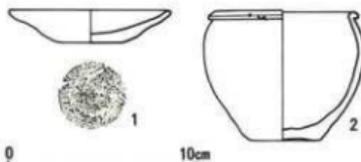
3 桐の木Ⅰ遺跡

所在地 安来市日白町字桐の木・ドフマ

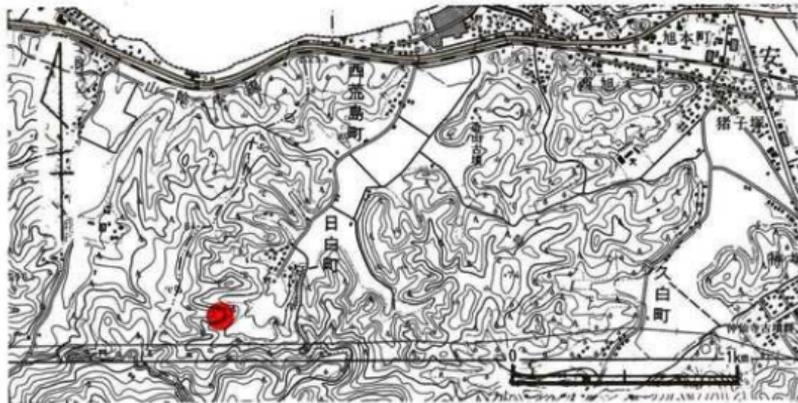
立地 日白の谷の最奥部、日白神社の裏の標高27m～38mの丘陵先端部に存在する。

概要 尾根筋に数基の低墳丘の古墳の存在が予想されたため、推定される部分を中心に調査区を設定し調査を行った(第45図)。しかし、大部分の範囲で、表土(腐食土、黄褐色土)を取り除いた時点で地山が検出され、墳墓等の遺構は何も検出されなかった。

遺物は、黄褐色土層より2点の陶磁器(第41図)が出土している。時期は、不明確であるが、近世後半以降と考えられる。



第41図 桐の木Ⅰ遺跡出土遺物実測図(1/3)



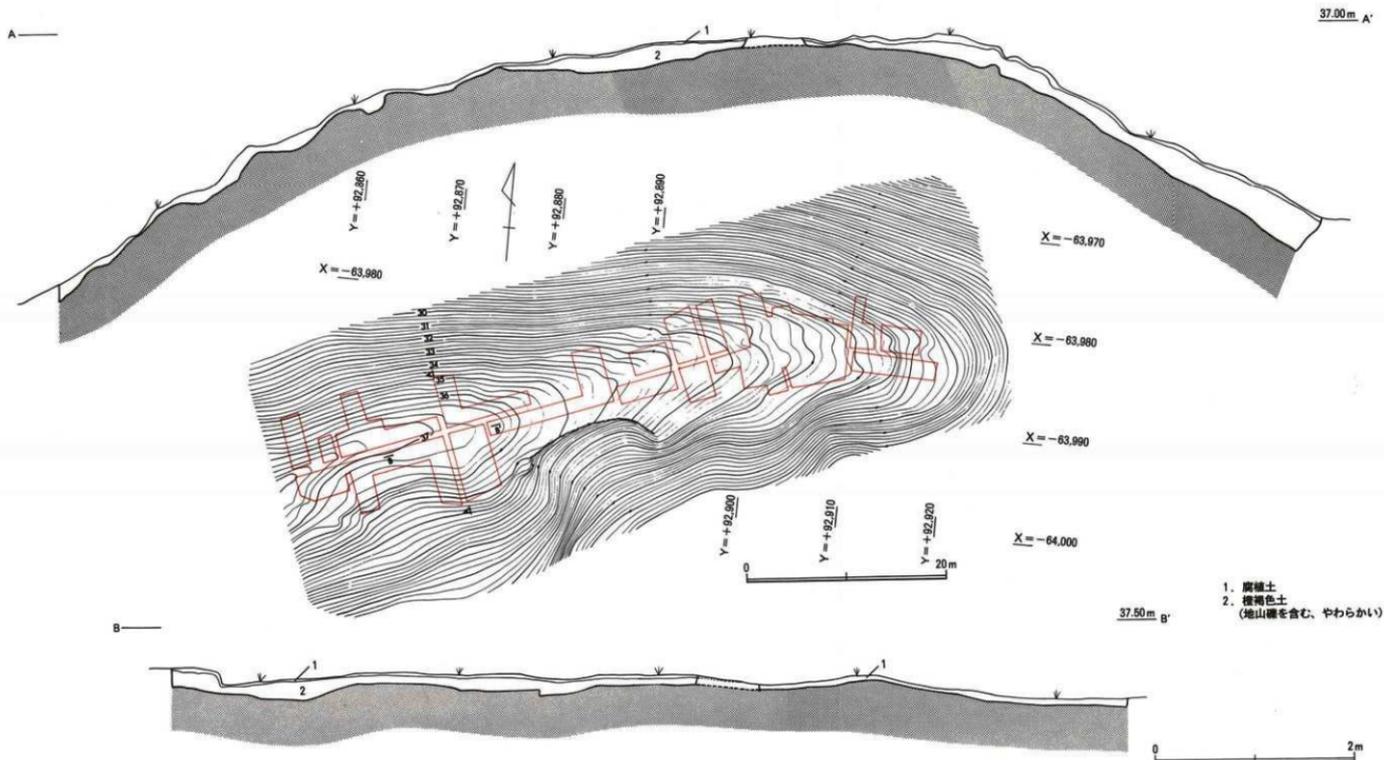
第42図 桐の木Ⅰ遺跡の位置(1/25,000)



第43図 桐の木Ⅰ遺跡全景



第44図 桐の木Ⅰ遺跡発掘状況



第45図 桐の木I遺跡調査区配置・土層断面図

4 桐の木Ⅱ遺跡

所在地 安来市日白町字桐の木・八東郡東出雲町下意東字梨子木廻

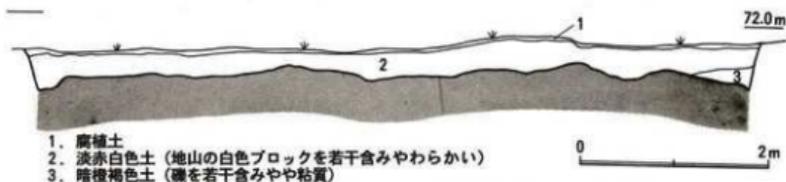
立地 桐の木Ⅰ遺跡へ延びる丘陵の基部、標高72mの丘陵上の平坦部に存在し、安来市と東出雲町の境に位置する。

概要 丘陵上の平坦面に8本のトレンチを設定し調査を行った。(第49図)

遺構は、何れのトレンチからも検出されず、平坦面は後世の整地作業によるものと考えられる。遺物は、黒曜石の剥片が2片第5トレンチより出土しているのみである。



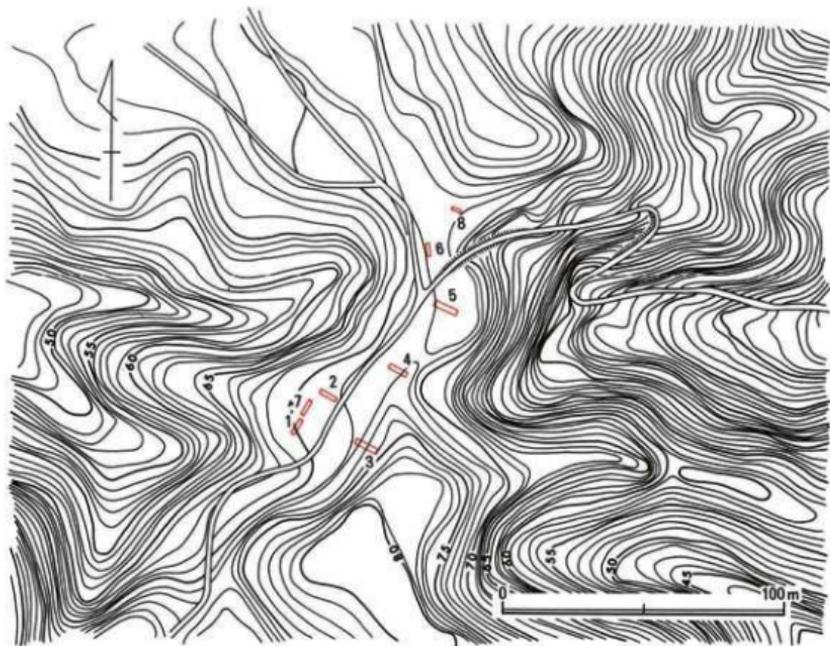
第46図 桐の木Ⅱ遺跡第8トレンチ完掘状況



第47図 桐の木Ⅱ遺跡第4トレンチ北壁土層断面図 (1/60)



第48図 桐の木Ⅱ遺跡の位置 (1/25,000)



第49図 桐の木Ⅱ遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第50図 桐の木Ⅱ遺跡全景

5 受馬遺跡

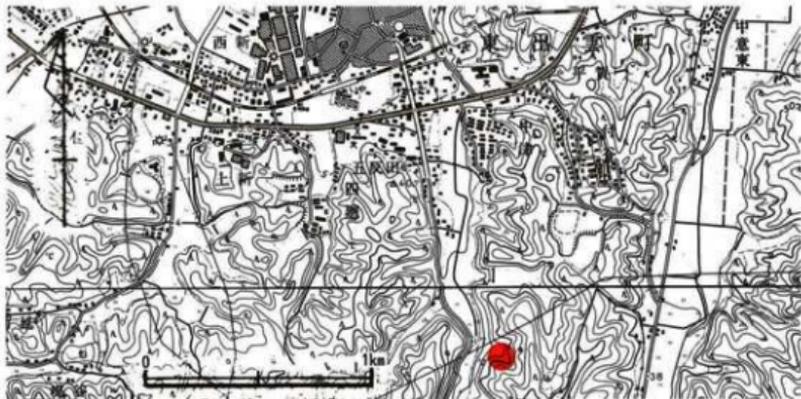


第51図 受馬遺跡遠景

所在地 八束郡東出雲町掛屋字受馬

立地 遺跡は、京羅木山や星上山をはじめとする山塊から、中海に向かって、南北方向に細長く延びる丘陵の西側に位置する。調査地は標高30～35mの緩斜面で、小さく谷が入り込んだところで、山からの水が集まって小さな小川を作って、調査区の中央を二分している。周辺の水田地とは比高差10m以内と程近く、丘陵から谷合いの水田への変換点、丘陵の裾の部分に当たる。

概要 平成4年度に行った範囲確認調査では、現表土層直下の暗黄褐色土層より土師器片が数片出土したのみで、明瞭な遺構は検出できなかった。今回の調査では暗黄褐色土層中から大量の土師器皿が出土し、ピット群などの遺構を確認した。これらの遺構は基盤層ではなく、暗黄褐色土層直下の地積層（黄褐色土層）から掘り込まれており、まとめて「上層遺構面」と呼んだ。他に基盤層に掘り込まれた溝状遺構を確認しており、分けて「下層遺構面」と呼んだ。調査区内で確認できる基本的な土層の堆積状況は、上層より①現表土-②暗黄褐色土-③黄褐色土-④橙褐色（基盤層）である。



第52図 受馬遺跡の位置 (1/25,000)

上層遺構面

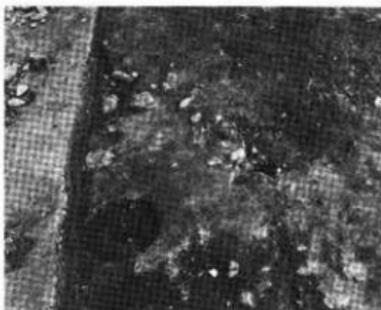
遺構は、第③層の黄褐色土層から掘り込まれた土坑3基（SK01、SK02、SK03）（第54図）、円形ピット群（第55図）などがある。土坑は、直径0.8~1.0m深さ0.1~0.3mの円形を呈し、内面が赤くよく焼け、炭層の堆積が認められる焼土坑である。これらの覆土中には、焼けた痕跡のある、周辺の地山層に多く見られる、拳大の自然石が認められたのみで、遺物は伴っておらず、時期は不明である。

調査区の中央のやや南には、調査中「神木」と呼んだ根の周りが調査前の状態で、1.5m四方もある大木が根を張っていて、この周辺にピットなどを検出した。「円形ピット群」と呼んだものは、2.5×2.0mの平坦に整えられた範囲に、7基のピットが確認されたもので、直径50cm深さ30~40cmと、一般的な住居跡の柱穴と形態は似ているものである。覆土の観察から7基すべてが同時に機能していたのではなく、少なくとも3基、あるいは4基ずつの二次以上の使用が考えられる。3基あるいは4基ずつのまとまりのどちらにも規則的な配置は認められず、建物に伴うものであるかどうかは判断し難い。これの上層には他所では認められない赤褐色軟質土層があり、小規模な盛土を行った可能性がある。「神木」の周辺には、この他にもピット4基、地山中に見られる自然石（拳大~人頭大で、加工痕はない）の集積・立石遺構が検出されており、これらが関連しあって機能を果たしていたものと思われる。

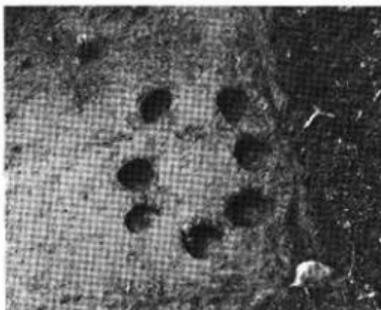
これらの遺構に伴って、あるいは上層の第②



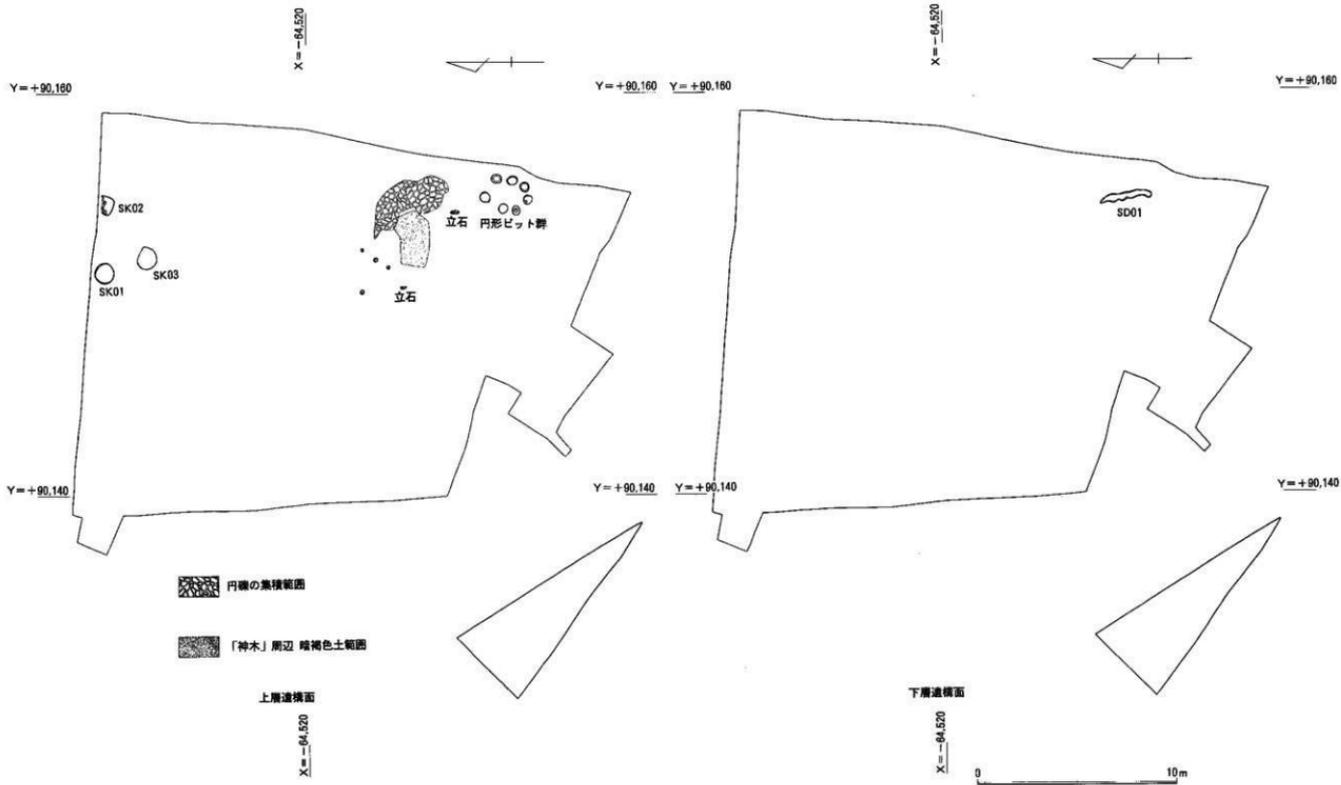
第53図 受馬遺跡近景



第54図 SK01・02・03（焼土坑）



第55図 円形ピット群



第56図 受馬遺跡遺構配置図 (1/200)

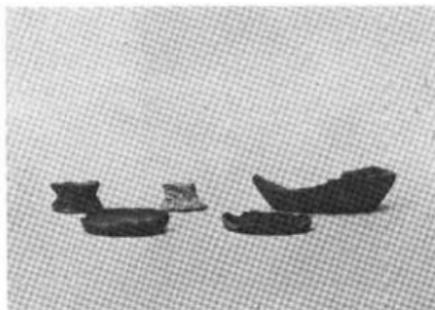
層暗黄褐色土層中から、多量の土師器皿、古銭（寛永通宝など）、鉄釘などが出土している。土師器は、俗に「かわらけ」と呼ばれる小皿や坏が中心で、色調や胎土、器形、成形方法で幾つかのバリエーションがあり（第59図、1～8）、他に脚付皿の脚が数個体分見られる（第57図、9）。これらの年代は、現在のところ当地域では資料的にも乏しく、不明な点が多いが、おおよそ下限は12～13世紀に、上限は出土した古銭（寛永通宝、初鋳1636年）より、17世紀以降までの期間であると、現段階では考えておく。

下層遺構面

上層遺構面で円形のピット群が検出された位置の下から、小規模な溝状の掘り込みが検出されている。長さ2.5m幅0.3m深さ0.3mで、基盤層に掘られており、覆土中および周辺の基盤層に貼り付いた状態で、古墳時代の土師器高杯片（第59図、10）が出土している。

他にも包含層中より、古墳時代から奈良時代の須恵器片も少数ながら混入していることから、周辺にはこれらの時期の遺構の存在も想定できる。また黒曜石製のスクレーパーも出土している。

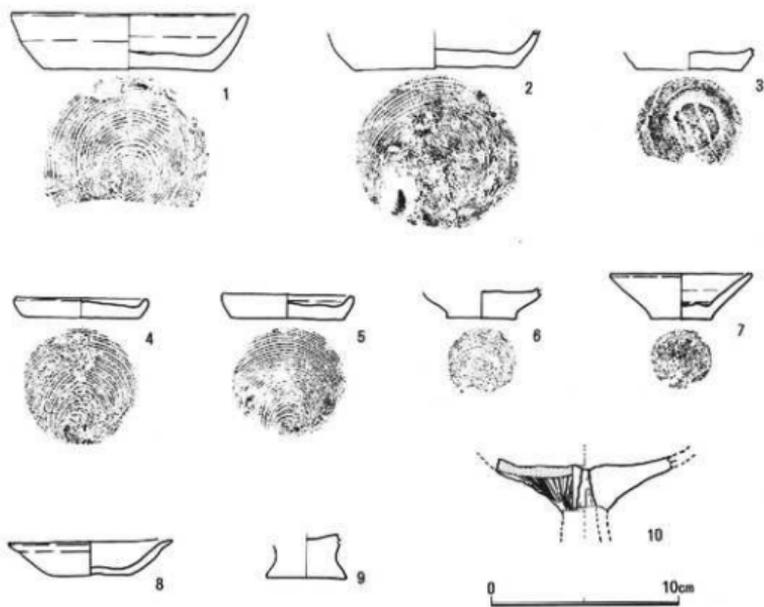
まとめ 上層遺構面で検出した（焼土坑を除く）一連の遺構は、土器の大部分が土師器皿に限られること、殆どがわざと破碎されたような出土状況であること、「神木」を中心としてかなり限定された小範囲に密集していることなどを合わせて考えると、日常生活跡とは考え難く、何らかの祭祀に関連したものである可能性が高い。これが機能していた当時の周辺の風景は、調査でこれらのすぐ側まで水田であったことが確認されている。想像の域を脱しないが、これらは田の神を祭る、あるいは地を鎮めるといった、身近な信仰の対象であったのかもしれない。



第57図 出土土器



第58図 スクレーパー



第59図 受馬遺跡出土土器実測図 (1/3)



第60図 小学生体験教室
(東出雲町立掛屋小学校6年生が発掘と土器接合の体験教室を行いました。)

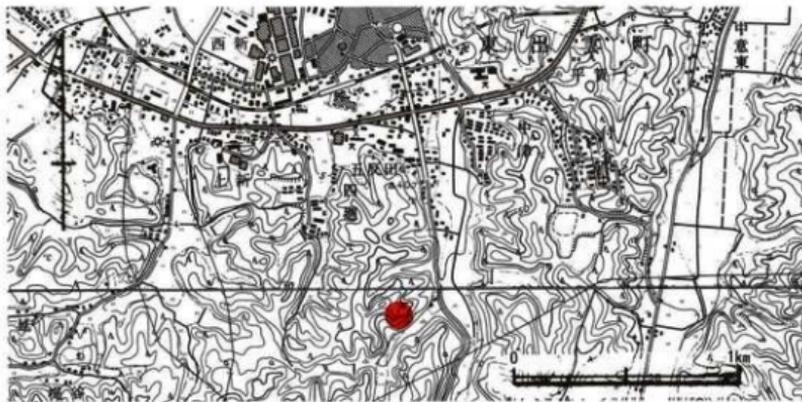
6 はやしまわ 林廻り遺跡



第61図 林廻り遺跡近景

所在地 八東郡東出雲町揖屋字林廻り他
立地 遺跡は、京羅木山や屋上山をはじめとする山塊から、中海に向かって南北方向に細長く延びる丘陵の中程の、東側に小さく舌状に張り出した低丘陵の斜面中腹に位置している。検出した建物跡があるのは、三方を丘陵で囲まれ、最近まで水田が営まれていた谷合いの小さい可耕作地を目前に見下ろす、標高約35～40mの南向きの、やや勾配のきつい斜面にある。

概要 今回の調査では、現在の地表面より約30～50cm下の基盤層に掘り込まれた掘立柱建物跡4棟（SB01～04）と、性格・時期不明の土坑2基（SK01、02）を検出した。基盤層に達するまでの基本的な土層の堆積状況は、上層より、①現表土（腐植土）→②軟質暗褐色土→③黄褐色土→④黄橙色土（＝基盤層）である。部分的に①と②の間に、礫をほとんど含まない締まりのない赤褐色土が溝状に堆積している様子が観察できるが、人為的な掘り込みとは考え難く、掘立柱建物跡が営まれ廃棄され、②軟質暗褐色土が堆積して後におこった地すべり等の現象によるものであると考える。



第62図 林廻り遺跡の位置 (1/25,000)

掘立柱建物跡

丘陵の中腹の急峻な斜面をL字状に大きくカットして作り出された、建物が1棟建つだけの小規模な加工段上に作られている。調査区内ではこのような加工段が3か所に、他にこの端の一部分と思われるものが1か所にあり、合計4か所で認められている。

加工段のうち残存状況の良好であったものは、発掘調査に入る前の掘削前の状態でも若干の窪みが観察できたが、掘り進めると、谷側の部分は、後世の攪乱や自然の崩壊によって、現存していなかった。このためそれぞれの建物跡が営まれていた当時の、本来の規模については、不明である。

最も保存状況の良好であったSB01(第63図)では、斜面側の壁際に幅20cm深さ5~10cmと浅い溝が一部に認められ、その内側に直径30cm深さ40cmの柱穴が検出された。柱穴は、位置を少しずつ移動させて1度以上立て替えが行われたようで、一部で重なりあっている。建物の規模は、柱間1.8m桁行三間の5m程度で、梁行は崩れているため不明である。この西側には、柱穴や溝が掘り込まれていない空地があり、加工段の掘り込みに接して、0.7×1.5m高さ10cmのベッド状に地山を掘り残している施設が設けられている。SB01に伴って多くの遺物が出土している(第67、68図、第69図1~8)。



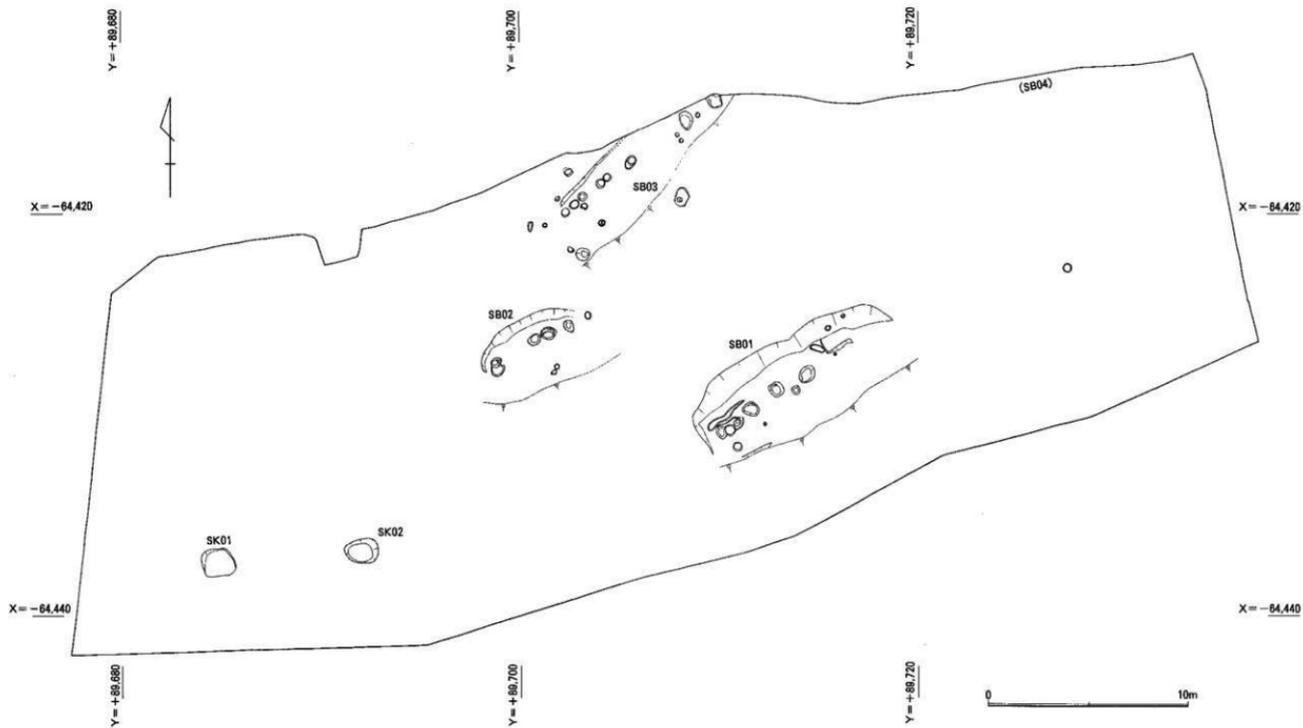
第63図 SB01



第64図 SB02



第65図 SB03

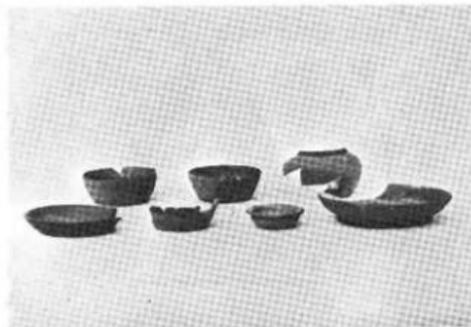


第66圖 林廻分遺跡遺構配置圖 (1/200)

土器は、加工段の覆土の最上層から地山直上まで出土しているものの、地山上約10cmのところで完形に近い土器が集中している場所があり、これらがこの建物の年代を示すものと思われる。須恵器には、青灰色を呈する焼成のしっかりしたものと、褐色系の明るい色調を呈するものがあり、坏身、皿が多く、他に坏蓋、長頸・短頸の壺、大甕などの器種がある。土師器は、甕、甔、移動式の竈、土製支脚といった煮沸・調理用具が中心で、個体数は須恵器に比して非常に少ない。土器の他に、刀子・角釘などの鉄製品数点、めのう製勾玉1個（第68図）など、この遺跡の他の住居跡では見られない遺物が出土している。

SB02～04（第64、65図）は大きく崩れていたり（SB02）、遺構が調査対象地外に広がっている（SB03、04）ことから、規模などで不明な点が多いが、SB01と大きく異なるという点はない。遺物は、土器が数点出土したのみではあるが、須恵器の形態はSB01で出土した土器と大きな隔たりはない。

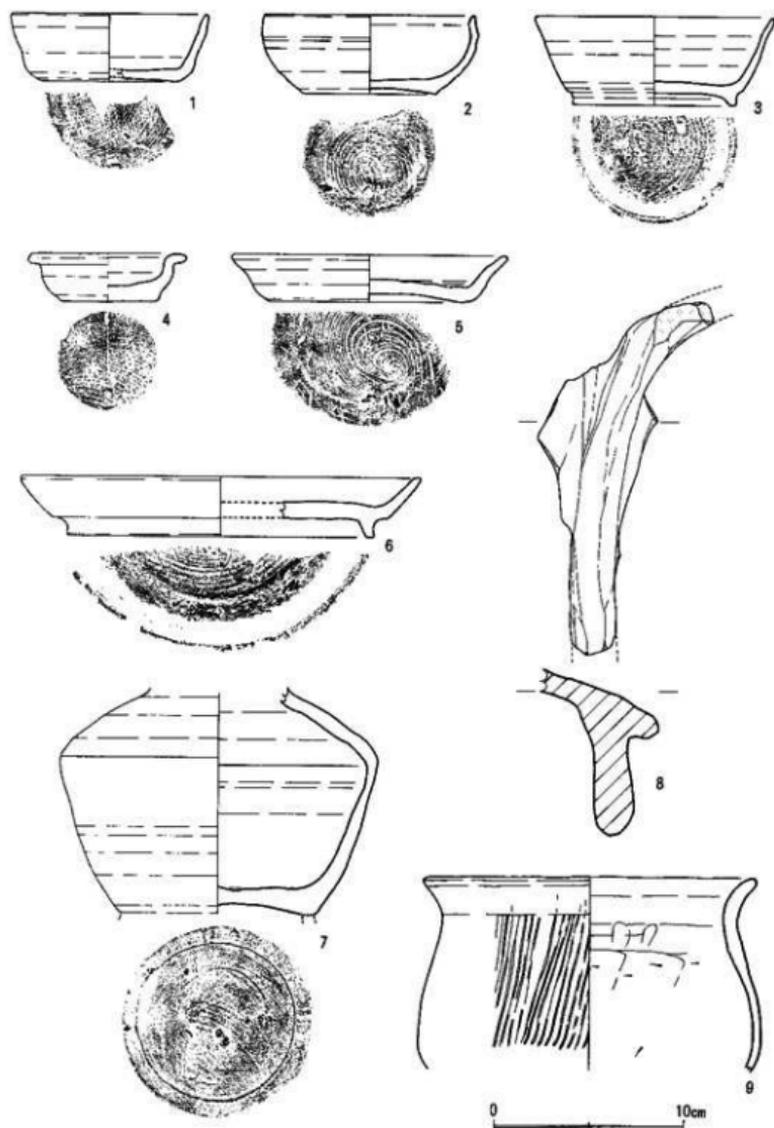
以上の4棟の建物跡は、それぞれで独立して作られており、方位や規模に、一貫した強い規制が働いていたり、規格性は認められず、地形に則して作られていたようである。出土した土器より、これらの建物跡が営まれていた年代は、概ね8世紀後半から9世紀前半期頃に当たるとと思われる。まとめ 8～9世紀の、以上のような丘陵の斜面をカットして作る住居跡は、規模の大小を問わなければ、島根県では調査例もかなりあり、当時の一般的な住居の建築方法の1つであったと考えられる。しかし、これらは残存状況が悪いものが多く、今回のように良好な状態で土器がまとまって出土する例は少なく、一住居単位内での土器の消費状況をなどを考える上で良好な資料であるといえよう。



第67図 出土土器



第68図 SB01出土勾玉



第69図 林廻り遺跡出土土器実測図 (1/3)

7 まつぎに 四ツ廻Ⅱ遺跡

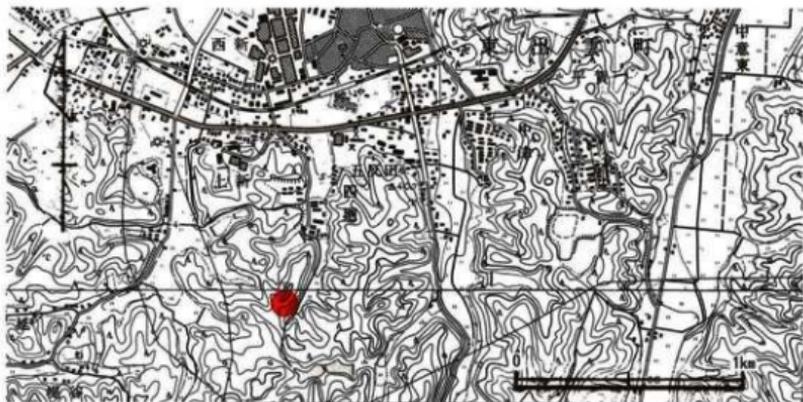


第70図 四ツ廻Ⅱ遺跡全景

所在地 八束郡東出雲町掛屋字四ツ廻
立地 遺跡は中海岸より約2kmほど谷を南に入り込んだ丘陵に位置する。標高30~40mの東向きの丘陵斜面であり、谷の最奥部分、可耕地からは離れたところにある。

概要 今回の調査では、現在の地表面直下の、厚い場所で1mにも及ぶ赤褐色無遺物土層の下層より遺構を検出した。主な遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡1棟(SI01)、掘立柱建物跡8棟以上(SB01~08)、古墳時代前~中期の土器埋納土坑2基(SK05、SK11)、時期不明の落とし穴状土坑2基(SK07、SK09)などであり、こ

れらのうちSI01などからは、碧玉やめのう製の勾玉未製品や砥石といった玉作関係物がままとまって出土しており、玉作工房跡であると考えられる。



第71図 四ツ廻Ⅱ遺跡の位置 (1/25,000)

玉作関係の遺構・遺物

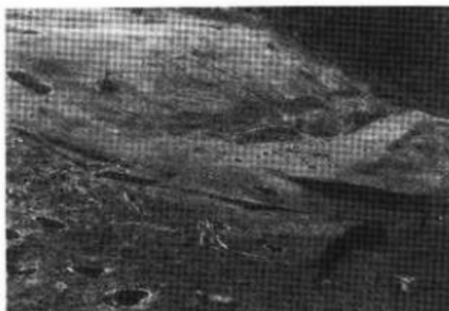
今のところ、確実に玉作が行われていた、あるいはそれに関連があったと考えられる遺構は、SI01、SB01、SD01であり、これらは勾配のきつい急斜面を掘り込んで作られている。SI01（第72図）は、現存6×4.2mの方形の床面をもつ竪穴住居跡で、斜面側には幅1mのコの字型のテラスが取り囲んでいる。床面には（テラス部分含む）直径・深さにばらつきのある大小34基のビットを検出した。うち2基は、直径60～80cm深さ30cmの円錐形を呈し、覆土中より完形に復元しうる上石器の臺や高坏と共に、細かな剥片が多く出土しており、玉製作に関係した工作用ビットの可能性が強い。他にも一般の住居跡には見られない溝状の掘り込みが床面の中央にあり玉の製作に関するものであると思われる。SB01は、SI01より簡単な作りをしてをり、依存状況も良くないため詳細は不明であるが、床面より剥片や木製品が出土している。SD01は現況では溝状であるが、本来はSB01のような掘立柱建物であったものの一部であると考えられ、剥片や砥石が出土している。これらで製作していた玉類には、現段階では碧玉・めのう製の勾玉、頁岩製の小玉・白玉・勾玉などが確認できている。砥石には、河原石を用いた砥石は見られず、結晶片岩を用いたものが主である。雑な



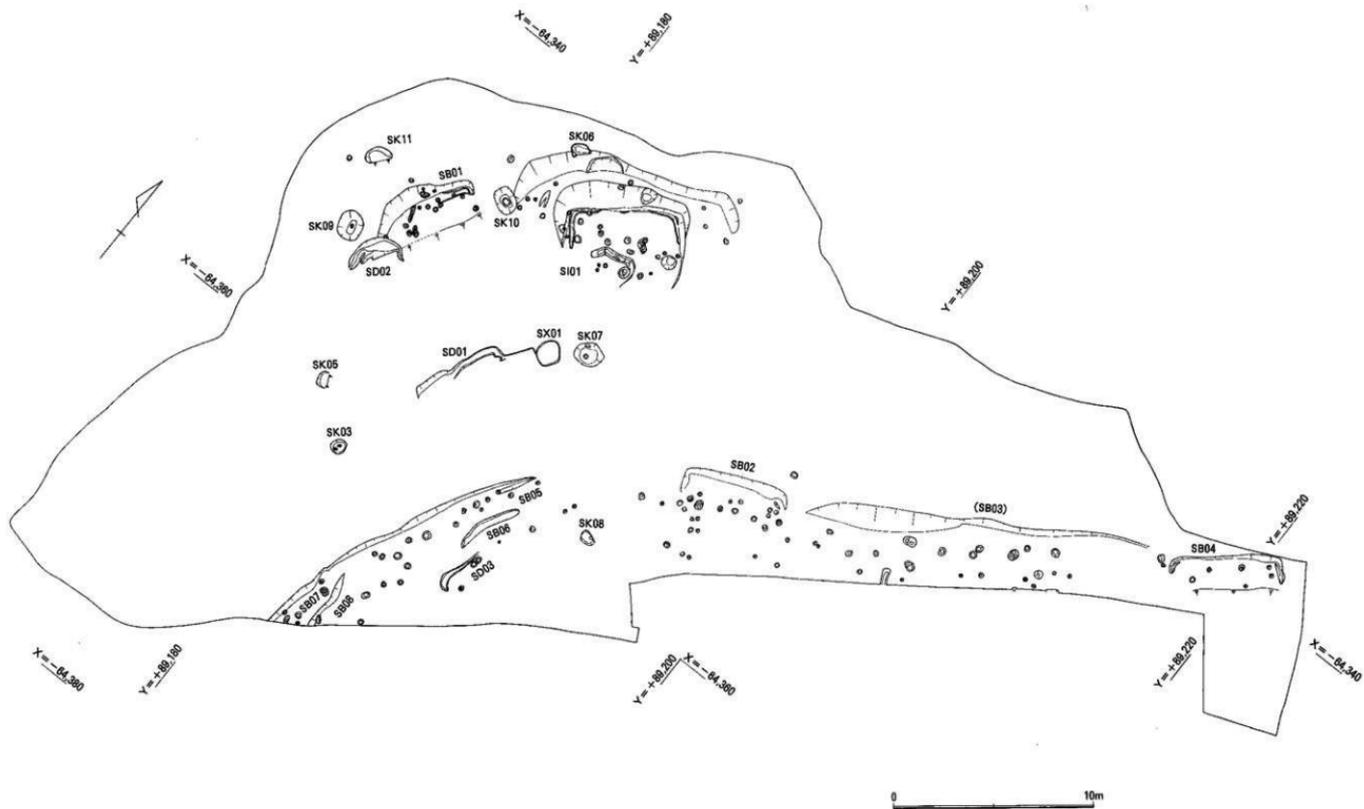
第72図 SI01



第73図 SK09（落とし穴状土坑）



第74図 掘立柱建物跡



第75図 四ツ廻り遺跡遺構配置図 (1/200)



第76図 SK05土器検出状況

どの鉄製・石製の工具は未確認。これらから出土した土器（第79図1、4、12、13、14）の時期は、おおよそ古墳時代後期、山本編年Ⅱ～Ⅲ期に当たると思われる。

掘立柱建物跡（第74図）

SI01の下方の緩斜面には、一定の広さを確保できる弧状を呈した加工段があり、そこに7棟以上の掘立柱建物を検出した。斜面側を掘り込み平坦面を作り出し、そこに柱穴が掘られ、多くは柱穴をずらして立て替えを行っている。これらに伴って須恵器・土師器

などが出土しており（第79図2、3、5、6、7～11）、時期は古墳時代後期、山本編年Ⅲ～Ⅳ期に当たる。

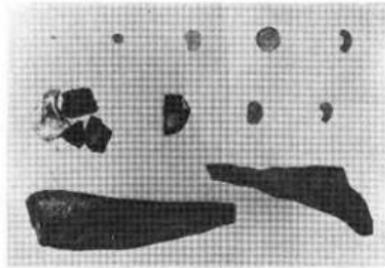
その他の遺構

以上の他に、土坑を11基検出している。このうちSK07・08は直径1.5m深さ1.2～1.5mの大型の円柱形で底に小ピットを持ついわゆる落とし穴状土坑である（第73図）。SK07の最下層より粗製の縄文土器と見られる小片が出土している。またSK05・11は、直径0.8m深さ0.3mの楕円形の土坑で、内部に古墳時代前～中期の壺形土器が、コンターに直交し口縁部を斜面の上方に向けるように置かれていた（第76図）。

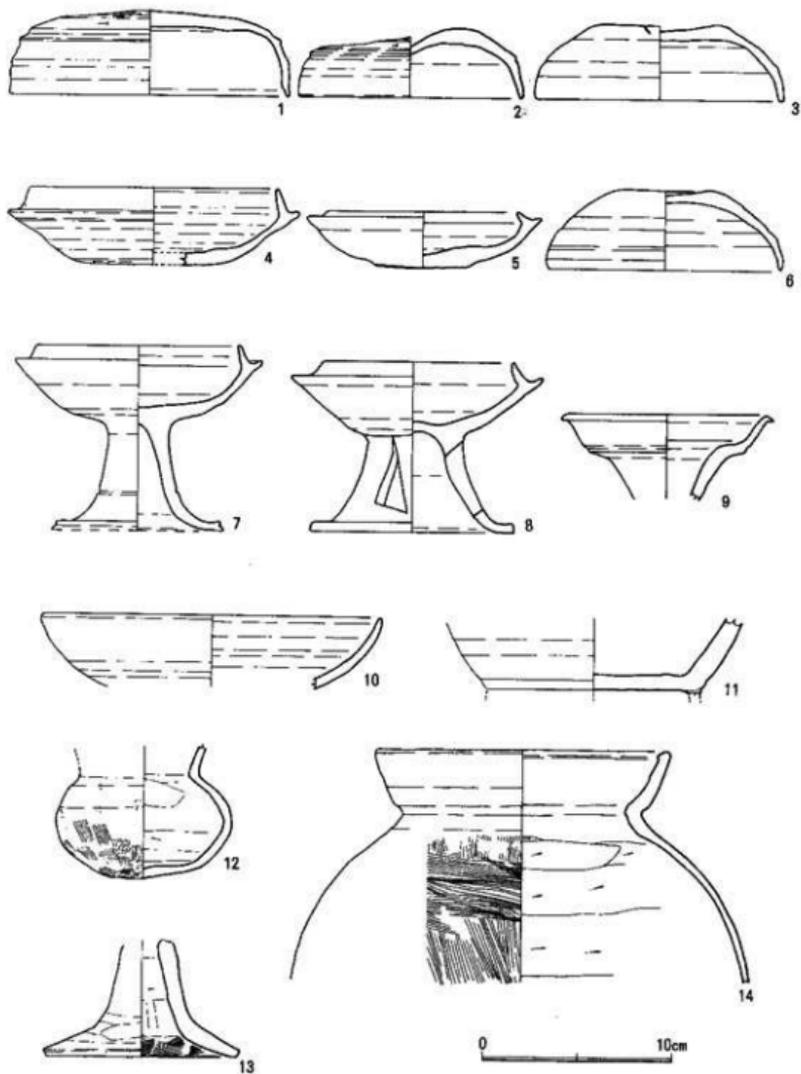
まとめ 古墳時代の玉作工房跡は、良質の原石の産地である花仙山周辺に多く分布し、安米市などで数箇所調査されているが、その他の地域では不明であった。今回の調査では、玉製作方法などの成果と合わせて、当時の一集落のなかでの手工業の在り方を考える上で好資料であると思われる。



第77図 出土土器



第78図 玉作関係遺物



第79図 四ツ廻Ⅱ遺跡出土土器実測図 (1/3)

8 鷗貫遺跡

所在地 八東郡東出雲町出雲郷深田

立地 意宇平野の東端の水田中に存在し、
標高は2m前後である。

概要 昨年度のトレンチ調査に続いて、今年度は全面調査を行った。遺構は、土坑2基、溝状遺構1条が検出された。また、調査区の北端において、自然流路と推定される落ち込みを確認した。

調査区内の土層の堆積状況(第84図)は、40cm前後の耕作土の下に、褐色砂層(4層)、青灰色砂層(5層)の順に堆積している範囲と、褐色砂層が認められず、黒色粘質土層(2層)、暗褐色粘質土層(3層)といった遺物包含層、青灰色砂層の順に堆積している範囲の2つがある。前者は、調査区の4分の3程度を占め、後者は、調査区の南端のみで確認される。



第80図 鷗貫遺跡全景



第81図 鷗貫遺跡SK01



第82図 鷗貫遺跡の位置 (1/25,000)

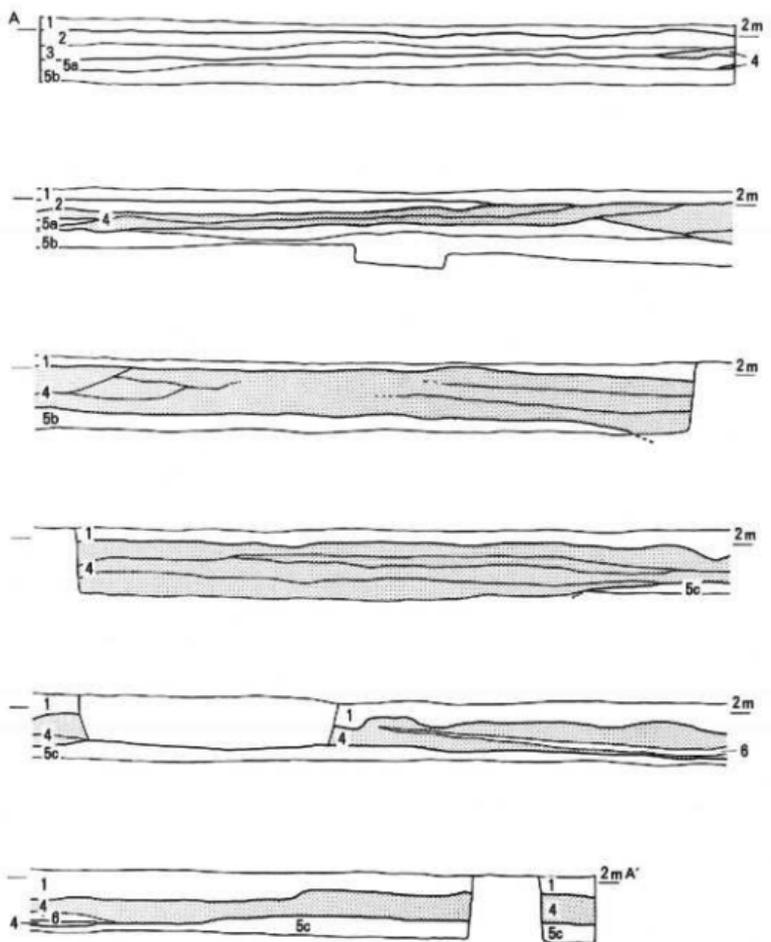
調査区全域で確認される青灰色砂層は、砂岩の基盤層上に厚く堆積している層で、海面下に堆積した砂の可能性が考えられ、中海の水面が上昇した時期のものとして推定される。出土遺物等より青灰色砂層の上面の標高1.5m付近は、約6000～5000年前の海水面上昇時のピークと思われる。そし



第83図 騎貫遺跡調査区配置図 (1/2,000)

て、青灰色砂層上の褐色砂層は、海面下の低下後に中海によって運ばれた砂と考えられ、おおよそ縄文時代の後・晩期以降から遺跡の周辺は、砂浜が形成されていたものと推定される。また、褐色砂層の認められない調査区南端部は、砂浜の後背地の湿地帯と推定され、そこに遺物が流れ込み包含層を形成したと思われる。

調査区北端部において確認された自然流路と推定される落ちこみ(第86図)は、褐色砂層、青灰



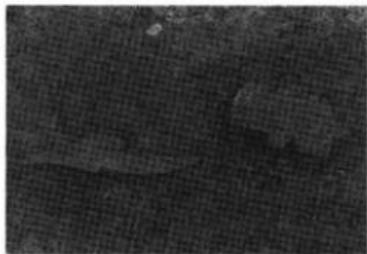
1. 暗褐色土 (耕作土)
2. 黒色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土 (植物の腐植土を多く含む)
4. 褐色砂層
- 5a. 青灰色粘砂土 (植物の腐植土を多く含む)
- 5b. 青灰色粘砂土 (粒度細かい)
- 5c. 青灰色粘砂土 (粒度荒い)
6. 植物の腐植土

0 2m

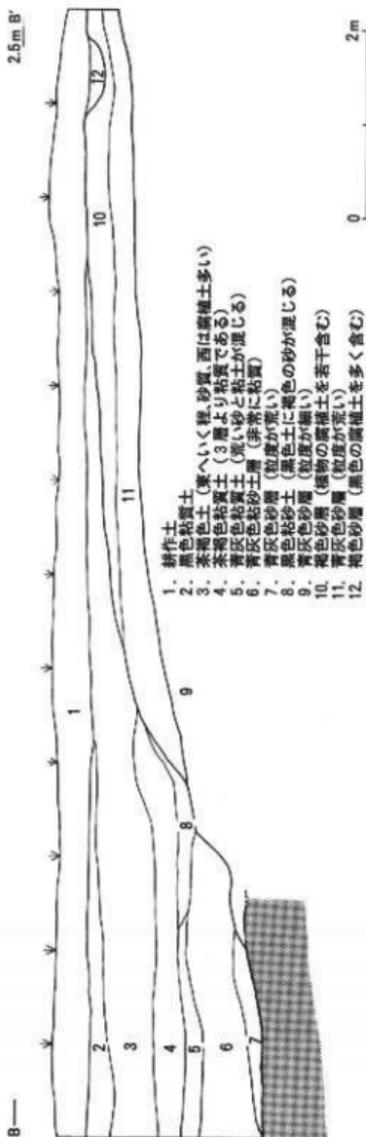
第84図 鶴貫遺跡土層断面図 (A-A') (1/60)

色砂層を削り込んでおり、最も深いところでは、基盤の砂岩層が認められる。堆積層中より縄文時代後期～近世初頭までの遺物が層位的に出上している。

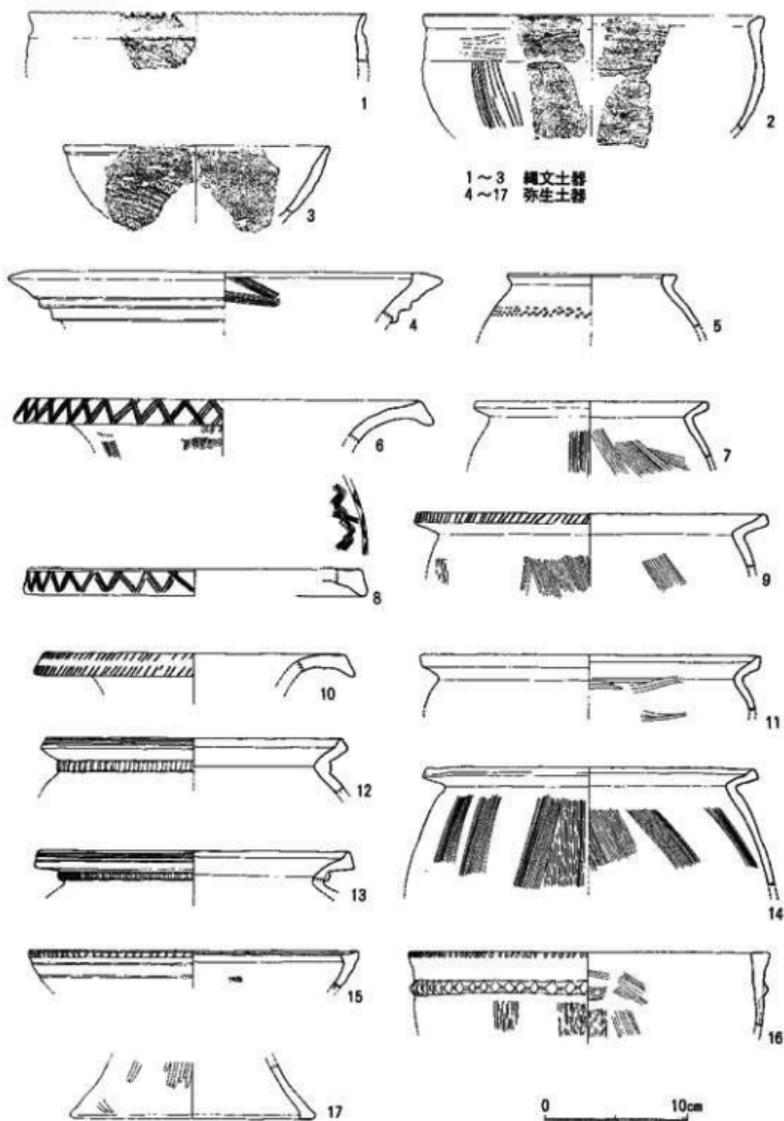
遺物（第87、88図）は、南端部の湿地帯と推定される地点においては、上層の黒色粘質土（第84図2層）より弥生土器、土師器、須恵器、青磁等の陶磁器といった弥生時代～近世初頭までの遺物が、下層の暗茶褐色粘質土（第84図3層）からは、弥生時代中期の土器を中心に、縄文時代後期～弥生時代中期の遺物が出上している。また、上下2層とも木製品が出土しており、鏃、機織具等が出上している。北端の自然流路と推定される落ち込みの堆積層からは、最下層の青灰色粘土（第86図6層）より縄文時代後期の土器が出土し、その上層の茶褐色粘質土、青灰色砂質土、黒色粘砂土（第86図4層、5層、8層）からは、縄文時代後期～弥生時代前期の土器が、茶褐色土（第86図3層）からは、弥生時代中期の土器の外に、分銅形土製品、緑色凝灰岩製の管玉未製品が出土している。遺構に伴うものとして、SK01（第81図）より弥生時代



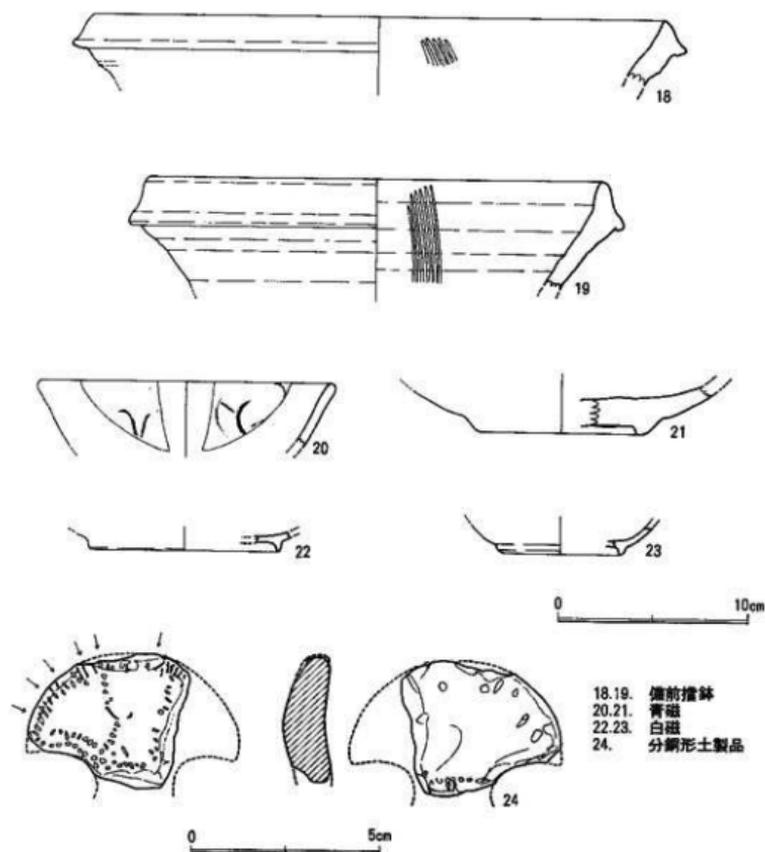
第85図 騎貫遺跡木製品出土状況



第86図 騎貫遺跡土層断面図 (B-B') (1/60)



第87図 鶴貫遺跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第88図 鶴賀遺跡出土遺物実測図(2) (1/3)

前期の壺片が出土し、溝状遺構からは、弥生時代中期の土器が出土している。

まとめ 本遺跡の調査によって、5000年～6000年前と推定されている縄文海進のピーク時の海水面が現在の標高1.5mまで上昇している可能性が考えられことが確認され、また、出土遺物より弥生時代中期には、付近に玉作遺跡の存在が、中世においては、豪族の館跡等の存在が推定されるに至った。

圖 版

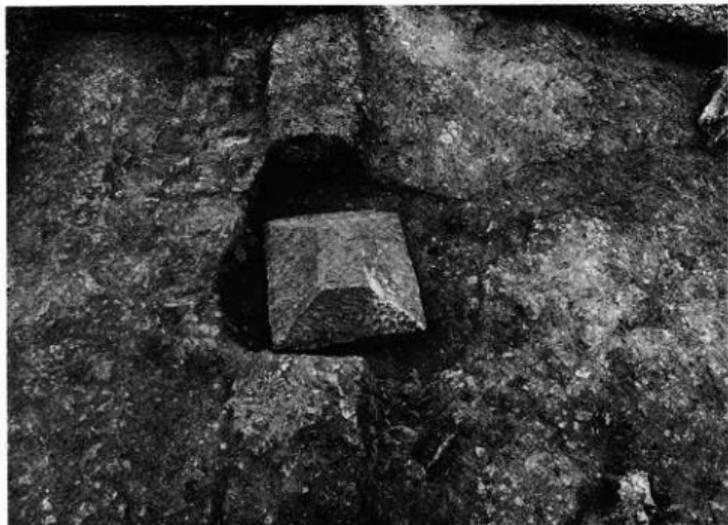


中山遺跡遠景（南西から）



中山遺跡近景（1区）（西から）

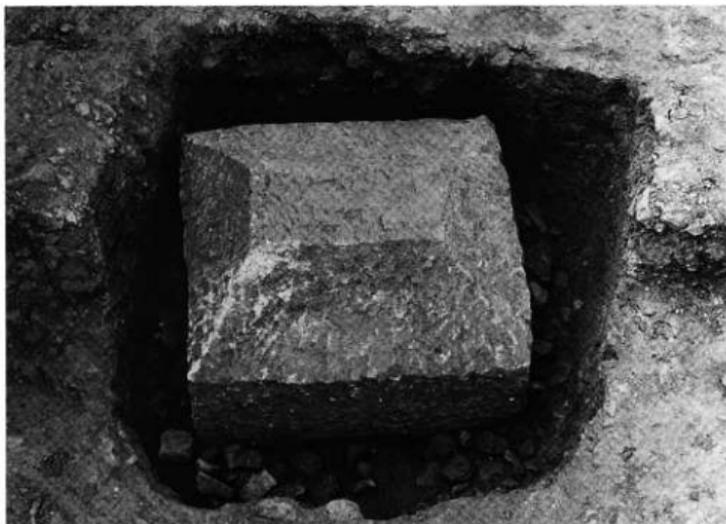
図版 2



中山火葬墓 検出状況（西から）



中山火葬墓 検出状況（南から）



中山火葬墓 発検出状況 (南から)



中山火葬墓 発検出状況 (東から)

図版 4



中山火葬墓 埋土除去後（西から）



中山火葬墓 埋土除去後（南東から）



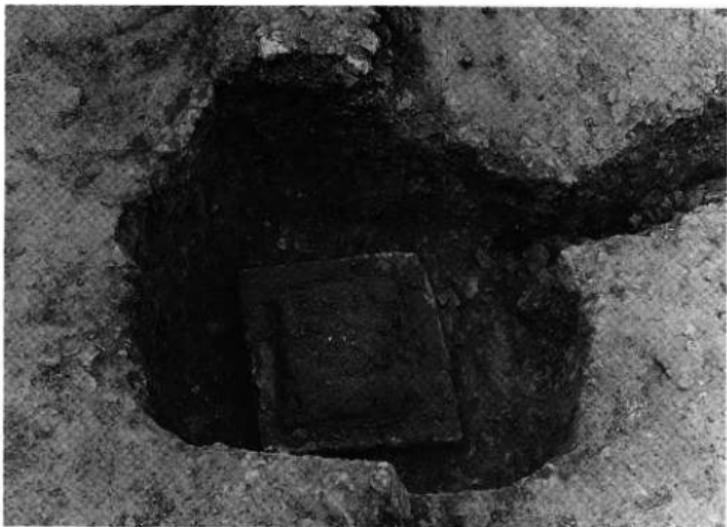
中山火葬墓 排水溝内礫検出状況（墓墳側）（南西から）



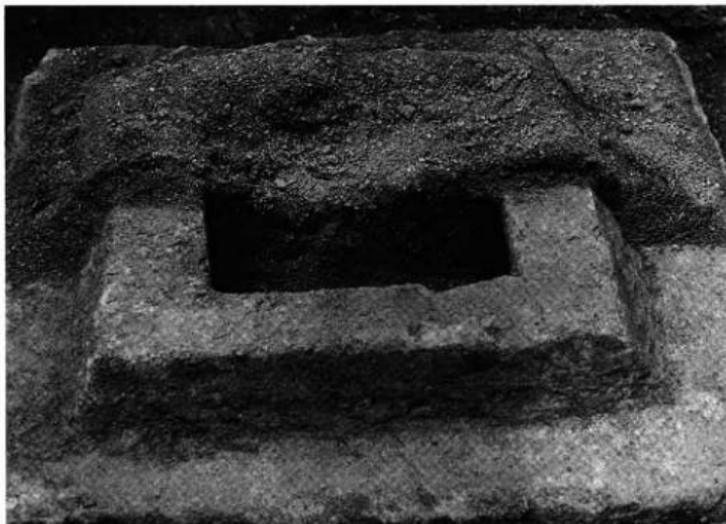
中山火葬墓 排水溝内礫検出状況（末端部）（西から）



中山火葬墓 炭化材出土状況（南から）



中山火葬墓 蓋石除去後（西から）



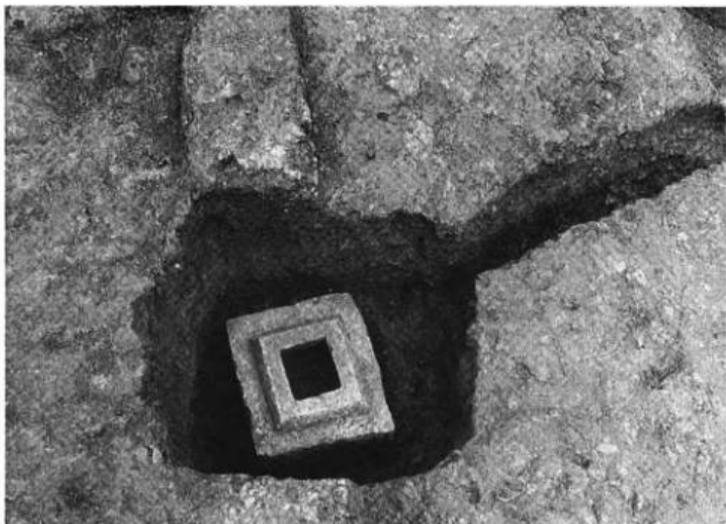
中山火葬墓 骨藏器内土層断面 (南から)



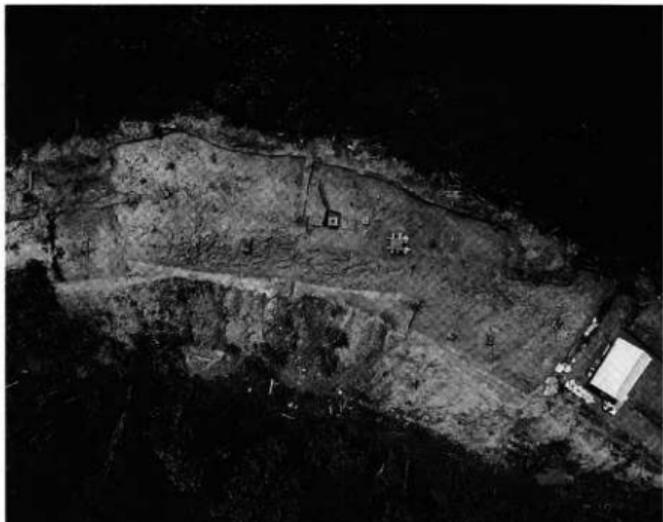
中山火葬墓 火葬人骨出土状況 (北から)



中山火葬墓 最下層埋土断面 (南から)



中山火葬墓 埋土・礫除去後 (西から)



中山火葬墓 周辺全景



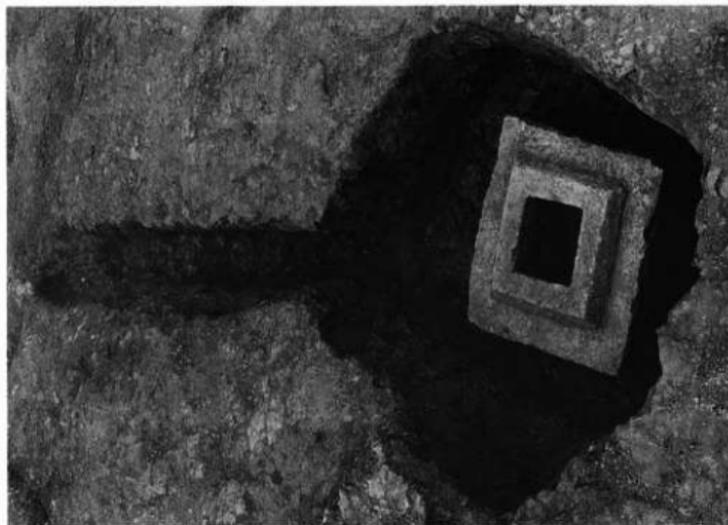
中山火葬墓 全景



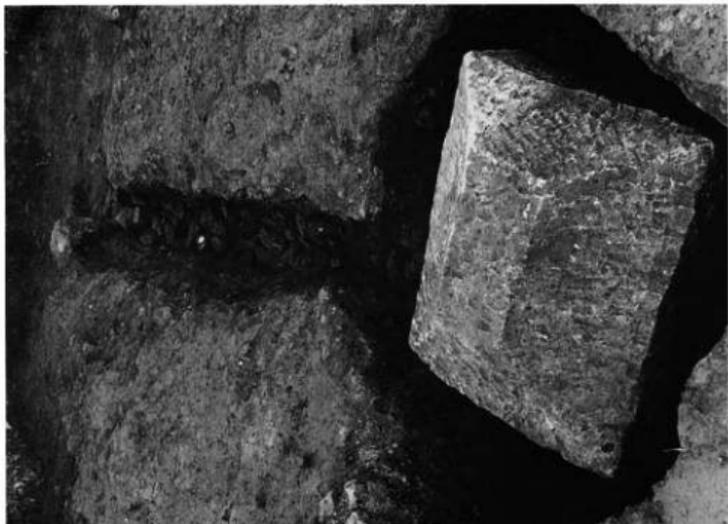
中山火葬墓 全景（南から）



中山火葬墓 完掘状況（西から）



中山火葬墓 墓石・埋土・覆除去後（北西から）



中山火葬墓 埋土除去後（北西から）